

博士課程教育リーディングプログラム
京都大学デザイン学大学院連携プログラム

Program for Leading Graduate Schools
Kyoto University Collaborative Graduate Program in Design

活動報告書（平成30年度）
Activity Report (2018.4-2019.3)



目次

デザイン学大学院連携プログラム活動報告書（平成30年度）	1
プログラム担当者一覧（2019年3月時点）	3
1 履修者	4
1.1 履修者選抜	4
1.1.1 履修者（予科）選抜	4
1.1.2 履修者（本科）選抜	4
1.2 3年次編入者選抜	5
1.3 Qualifying Examination（博士論文研究基礎力審査）	5
1.4 修了審査	6
1.5 履修者の評価	7
1.6 履修者の進路	9
1.7 履修者の研究活動支援	10
1.8 履修者キックオフ合宿	11
1.9 履修者のネットワーキング	13
1.10 意識調査	14
1.11 参画専攻の変更（教育学研究科）	15
2 科目と履修	16
2.1 修士教育の充実	16
2.1.1 教科書シリーズの出版	16
2.1.2 問題発見型／解決型学習（FBL/PBL）の実施	17
2.1.3 沖縄、香港でのデザインスクールの実施	18
2.2 博士教育の実施	23
2.2.1 オープンイノベーション実習の実施	23
2.2.2 フィールドインターンシップの実施	24
2.2.3 リサーチインターンシップの実施	26
2.2.4 リーディングプロジェクトの実施	26
3 イベント	35
3.1 サマーデザインスクール2018	35
3.2 スプリングデザインスクール2019	37
3.2.1 国際デザインシンポジウム	37
3.2.2 デザインスクール全学生・修了生ミーティング	39
3.3 デザインワークショップ	40
3.4 デザインエキシビション	44
4 デザインイノベーションコンソーシアム	46
4.1 概要	46
4.2 会員	47
4.3 活動内容	48
4.3.1 プロフェッショナル・デザインキャンプ	48
4.3.2 デザインフォーラム	49
4.3.3 デザインレクチャー	52

4.3.4	社内教育プログラム	53
4.3.5	デザインイノベーション拠点フェロー	54
4.3.6	デザイン学履修者の経済的支援	55
5	プログラムの評価	56
5.1	質問紙調査	56
5.2	デザイン学リーディング大学院協議会	58
5.3	事後評価	59
6	将来構想活動	61
6.1	将来構想委員会の活動	61
6.1.1	顧問会議	61
6.1.2	卓越大学院への継承	62
6.1.3	デザインイノベーション拠点の継続性	62
6.1.4	デザインファブリケーション拠点の継続性	63
6.1.5	デザインイノベーションコンソーシアムの継続性	63
6.1.6	補助金終了後の組織体制	63
6.1.7	補助金終了後の予算	64
6.1.8	京都大学デザインスクール基金	64
6.2	教育委員会によるカリキュラムの改定	65
7	その他の活動	66
7.1	広報活動	66
7.1.1	Program Overviewの改定	66
7.1.2	デザイン学論考	66
7.2	デザイン学白書	67
7.3	海外調査・交流	69
7.3.1	京都大学—リーズ大学国際シンポジウムの開催	69
7.4	学学連携	70
7.4.1	東北大学電気通信研究所 —京都大学デザインスクール合同ワークショップ	70
7.5	博士課程教育リーディングフォーラム2018	72
付録1	プログラムの教員	73
付録2	業績リスト（講演・出版）	76
付録3	業績リスト（メディア）	94
付録4	プログラムの概要（事後評価調書より）	95
付録5	事後評価スライド	99
付録6	事後評価結果	110
付録7	問題発見／解決型学習（FBL/PBL）成果ポスター	111
付録8	イベントポスター	114

デザイン学大学院連携プログラム活動報告書（平成 30 年度）

本報告書は、「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」における平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月の活動をまとめたものである。初めて博士号取得者を輩出した 29 年度は、修了生（博士号取得者）は 6 名、仮修了生（プログラムは修了しているが博士号は未取得）は 6 名であった。30 年度は、新たに 8 名が修了し、年度末時点での仮修了生は 8 名となっている。

また、本年度は補助金の最終年度であったため、これまでの活動の事後評価を受けると共に、補助金終了後を見通して活動の整理を図った。以下にその概要を述べる。

■カリキュラム■

教育委員会を中心に、補助金終了後のカリキュラムの検討を行った。本プログラムで新設したデザイン学共通科目 5 科目を存続させると共に、各領域（情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学）に新設した概論 1 科目を存続させることとした。実習科目では、問題解決型・発見型学習を、各部局の専門科目とすることで継続性を確保し、部局間連携によって領域横断的なワークショップを構成できるようにした。オープンイノベーション実習、フィールドインターンシップは部局主導型、研究室主導型の定着を図った。

■カリキュラム外活動■

補助金により運営してきたカリキュラム外活動には、サマーデザインスクール、デザインスクール in 沖縄・香港などがある。多くの学生・教員が自主的に参加し、ユニークな相互学習の場が生まれていた。しかしながら補助金終了後の継続は難しく、本年度を最終回として終了する。こうしたカリキュラム外活動は、学外にも開かれたものであったため、その波及効果には特筆すべきものがある。例えば、提携先であった琉球大学、香港バプティスト大学では、本プログラムとの共同ワークショップの経験を基にして、学制改革を機に、学士課程への横断型ワークショップ科目の導入を決めている。

■产学連携■

产学連携の場であるデザインイノベーションコンソーシアムには 70 余社が参加しているが、規約上、31 年 3 月末で終了するとされていた。しかし、企業が参加する活動が堅調なことに加え、リーディング大学院の今後に大きな影響力を持つ卓越大学院の動向を見極めるため、2 年間延長されることとなった。一方、京都リサーチパーク（KRP）に開設したデザインイノベーション拠点の継続性については、多くのアイデアが提案され議論が行われて來たが、本稿執筆時点では未だ結論を得ていない。

■学内の運営体制■

従来、プログラムの運営は、学際融合教育研究推進センターの下のデザイン学ユニットが主体となってきた。しかし、本センターは教員の自主的な学際活動を支援するものであるのに加え、デザイン学ユニットは規約上、31 年 3 月末に終了することが予定されていた。そこで、新たに設置された大学院横断教育プログラム推進センターの下にデザイン学リーディング大学院として移行し、プログラムの運営を継続することとした。

■事後評価■

事後評価の重点は、人材育成の実績と継続性の確保にあった。人材育成の効果については確信があった。まず、第一期生へのインタビューやアンケート調査を基に、キャリアパスが大きく広がっていることを示した。また、デザインイノベータインデクスと呼ばれる評価手法を考案し、プログラムの教育効果を履修者の汎用力の経年変化によって示した。一方、継続性の確保については、学生支援やカリキュラム外活動を大幅に縮小せざるを得ない状況にあるが、幸い、デザインイノベーションコンソーシアムなど社会に開かれた活動が認められ、総合的には良い評価結果を得ることができた。

さて、本プログラムに雇用された特定教職員は、補助金終了を持って全員がデザイン学を離れることとなる。要員の継続が図れないことはプログラムにとって痛手であるが、より広い視点からは悪い面ばかりではない。デザイン学の中核を担った教員と、それらの教員から刺激を受けた履修者が、その次のステップにおいて、開かれた社会で、新たな人材育成活動を展開することを期待したい。

平成 31 年 3 月

プログラムコーディネータ 石田 亨
(京都大学 情報学研究科)

プログラム担当者一覧（2019年3月時点）

北野 正雄	プログラム責任者／理事（教育・情報・評価担当）・副学長
石田 亨	プログラムコーディネータ／情報学研究科 社会情報学専攻 教授
楠見 孝	教育学研究科教育学環専攻 教授
齊藤 智	教育学研究科教育学環専攻 教授
林 康裕	工学研究科建築学専攻 教授
神吉 紀世子	工学研究科建築学専攻 教授
三浦 研	工学研究科建築学専攻 教授
榎木 哲夫	工学研究科機械理工学専攻 教授
西脇 真二	工学研究科機械理工学専攻 教授
富田 直秀	工学研究科機械理工学専攻 教授
小森 雅晴	工学研究科機械理工学専攻 教授
松原 厚	工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
泉田 啓	工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
藤本 健治	工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
西田 豊明	情報学研究科知能情報学専攻 教授
黒橋 稔夫	情報学研究科知能情報学専攻 教授
吉川 正俊	情報学研究科社会情報学専攻 教授
守屋 和幸	情報学研究科社会情報学専攻 教授
太田 快人	情報学研究科数理工学専攻 教授
田中 利幸	情報学研究科システム科学専攻 教授
佐藤 高史	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
守倉 正博	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
川上 浩司	情報学研究科知能情報学専攻 特定教授
佐藤 彰洋	情報学研究科数理工学専攻 特定准教授
松井 啓之	経営管理大学院 教授
山内 裕	経営管理大学院 准教授
多々納 裕一	防災研究所社会防災研究部門 教授
中村 裕一	学術情報メディアセンター 教授
塙田 章	京都市立芸術大学大学院美術研究科 教授
澤田 宏	NTT コミュニケーション科学基礎研究所協創情報研究部 部長
山田 敬嗣	NEC ASIA PACIFIC 社 シニアバイスプレジデント
田中 健一	三菱電機株式会社開発本部 技術統轄
梶本 一夫	パナソニック株式会社イノベーション戦略室 戰略企画部 主幹
三浦 智康	株式会社野村総合研究所 理事
松田 晃一	独立行政法人情報処理推進機構 顧問
谷脇 康彦	総務省 総合通信基盤局 局長
上田 誠	京都市 産業観光局 局長
中小路久美代	大学院横断教育プログラム推進センターデザイン学リーディング大学院 特定教授
十河 卓司	大学院横断教育プログラム推進センターデザイン学リーディング大学院 特任准教授
北 雄介	大学院横断教育プログラム推進センターデザイン学リーディング大学院 特定講師

1 履修者

1.1 履修者選抜

デザイン学プログラムの履修者は、まず履修者（予科）選抜を受験し、さらに半年後、履修者（本科）選抜を受験する。このような予科の制度は、前期に所属研究科の課程の履修を進めるとともに、デザイン学プログラムの目的と内容を理解し、自らの能力と適性を確認する機会を学生に与えることが目的である。

平成 30 年度は昨年度より設けられた制度により、半年毎の履修者（本科）選抜を実施した。

1.1.1 履修者（予科）選抜

平成 30 年度は昨年度と同様に、4 月、10 月に参画研究科の専攻において修士課程に入学した学生を対象として、それぞれ下記のスケジュールで履修者（予科）選抜を実施した。

【4 月入学者向け】

平成 30 年 4 月 9 日 プログラム応募説明会（於：吉田キャンパス、桂キャンパス）
平成 30 年 4 月 9 日～4 月 23 日 応募期間
平成 30 年 5 月 10 日 履修者（予科）選抜
平成 30 年 6 月 12 日 選抜結果通知

【10 月入学者向け】

平成 30 年 10 月 1 日～10 月 12 日 応募期間
平成 30 年 10 月 25 日 履修者（予科）選抜
平成 30 年 11 月 19 日 選抜結果通知

履修者（予科）の選抜においては、願書、志望調書、出身大学の学業成績証明書等による書類審査を実施した。平成 30 年度は 14 名（4 月入学者）の応募があり、審査の結果、14 名全員（教育学研究科 1 名、工学研究科 4 名（機械理工学専攻 1 名、建築学専攻 3 名）、情報学研究科 4 名（知能情報学専攻 2 名、社会情報学専攻 2 名）、経営管理教育部 5 名）入学を認められた。今年度は、14 名中 3 名が外国人学生であった。

1.1.2 履修者（本科）選抜

昨年度から半年毎に本科への進学希望が可能となったことから、4 月期本科進学希望者の選抜を 3 月に、10 月期本科進学希望者の選抜を 9 月に、以下のスケジュールで実施した。

【平成 30 年度 4 月期】（平成 30 年 3 月実施）

平成 30 年 2 月 21 日 応募締切
平成 30 年 3 月 1 日 履修者（本科）選抜（面接）
平成 30 年 3 月 5 日 選抜結果通知

【平成 30 年度 10 月期】（平成 30 年 8 月実施）

平成 30 年 8 月 20 日 応募締切
平成 30 年 9 月 20 日 履修者（本科）選抜（面接）
平成 30 年 9 月 21 日 選抜結果通知

本科選抜においては、事前に提出された課題レポートに基づく面接を行うとともに、デザイン学予科での履修状況、英語成績、及びデザイン学大学院連携プログラム主催の研究発表会、セミナー、デザインスクール等の参加実績を合わせて総合的に審査を行った。

4月期（3月実施）履修者（本科）選抜には17名の履修者（予科）のうち5名から、10月期（9月実施）履修者（本科）選抜には22名中5名から応募があり、それぞれ選抜を実施した。その結果、4月期5名（工学研究科1名（機械理工学専攻）、情報学研究科3名（社会情報学専攻、数理工学専攻、通信情報システム専攻）、経営管理教育部1名）、10月期5名（教育学研究科1名、工学研究科1名（機械理工学専攻）、情報学研究科2名（社会情報学専攻、知能情報学専攻）、経営管理教育部1名）の10名全員が履修者（本科）として選抜され、所属研究科の修了要件を満たすよう単位等を取得しつつ、京都大学－琉球大学合同デザインスクールなどの各種イベントや、デザイン学共通科目などデザイン学連携プログラムの履修を本格的に開始した。

なお、10月期に進学を希望しなかった17名の履修者（予科）の内、12名が予科を延長し、5名が履修を辞退した。履修を延長した12名は、平成31年度4月期に履修者（本科）選抜に応募するか否かを選択する予定である。

1.2 3年次編入者選抜

本学位プログラムに対する社会的関心・ニーズの高まりを受け、また多様な人材を受け入れるため、社会人経験や修士課程における学修経験を踏まえて3年次でのプログラムへの編入を可能としている。今年度は、4月入学と10月入学の2回、編入による履修者の募集とその選抜を行った。3年次編入の資格として、本プログラムに参画する専攻の博士課程に入学した学生であり、本学位プログラムのディプロマポリシーに合致する目的意識を持つと認められ、編入後1年以内に博士論文研究基礎力審査（QE）を受験する条件を満たすことができることを求めていた。編入資格、本プログラム全体の履修、ならびに編入による場合のプログラム履修について理解を深めてもらうよう、4月と10月の双方の募集において、募集期間に先立ってプログラムへの応募に関する説明会を実施した。

4月入学の3年次編入者の募集期間は4月9日より4月23日までとした。5名（情報学研究科4名（うち留学生3名）、工学研究科1名（機械理工学専攻））の出願があり、これを受けて出願書類による資格確認の上、面接による審査と出願書類に基づく総合的な審査を行なった。その結果をうけて5名全員を合格とした。10月入学の3年次編入者の募集期間は10月1日より10月12日までとした。2名（いずれも留学生で、情報学研究科、工学研究科（機械理工学専攻））の出願があり、4月入学者の選抜と同様に、プログラムへの博士編入資格の確認を行ったのち、出願した学生について面接を行い、2名全員を合格とした。平成30年度には、合計7名が本学位プログラム第3年次へ編入した。

1.3 Qualifying Examination（博士論文研究基礎力審査）

本学位プログラムでは、コースワークを通じて習得された知の基盤を評価し、プログラムに係る博士研究を開始する資格が備わっているかどうかを博士論文研究基礎力審査（Qualifying examination: QE）により審査することとなっている。

QEは、本学位プログラムの3年次以上の履修者で、所属専攻の博士後期課程に在籍し、

かつ、デザイン学共通科目・共通実習科目より 10 単位以上を取得しているものを対象とする。博士後期課程における研究計画が提出され、それが本学位プログラムとの関連があると認められるかどうかを審査基準として、博士論文研究の主体的な遂行に必要な基礎的知識及び能力を審査する。4 月入学と 10 月入学（編入を含む）の年 2 回行われているプログラム履修者の募集に対応させて、4 月と 10 月に QE を実施している。

平成 30 年度 4 月期の QE には、6 名の履修者より申請があった。全履修者に対し QE 受験に必要な履修単位を取得しているかを確認するとともに、提出された申請書類に基づいて 1) 修士課程における所属研究科の履修状況と成績、2) デザイン学共通科目及び主領域科目の評価、3) 修士論文等の概要、4) 博士後期課程における研究計画、履修計画、および 5) 指導教員が作成する所見、をもとに審査を行った。この結果、申請のあった 6 名全員が合格した。10 月実施の QE には、2 名の履修者より申請があった。4 月実施の QE と同様の手続きにより審査を行い合格した。平成 30 年度には、合計 8 名が QE に合格した。

1.4 修了審査

履修者は、所属する研究科と、デザイン学大学院連携プログラムの双方へ修了審査を、「デザイン学プログラム修了審査願」および「デザイン学プログラム履修成果報告書」により申し出こととなっている。

付記型学位の修了審査においては、各研究科において博士審査資格を有する教員から、調査委員を選出する。その際、異なる研究分野の教員を含む 2 名以上のプログラム担当者が調査委員に含まれるよう選出を行う。博士（総合学術）の場合であって情報学研究科所属の履修者については、情報学研究科においてデザイン学側教員を含むように、調査委員会を組織する。

いずれの学位の場合も、修了調査委員会は、学位論文公聴会等において試問を行い、履修者が本プログラム終了の基準を満たすかどうか調査する。なお、本プログラムの修了のためには、次の 3 項目の要件をすべて満たしている必要がある。

- (1) 参画研究科・専攻に 5 年（3 年次編入生は 3 年）以上（短縮修了の場合は当該研究科の定めるところによる期間以上）在学し、本プログラムのカリキュラム・ポリシーに沿った研究指導を受け、QE に合格後、所定の単位（デザイン学共通実習科目・インターンシップ科目・デザイン学副領域科目から 10 単位以上）を修得していること。
- (2) 多様な専門分野を俯瞰し、創造的に課題解決にあたるために必要な突出した実践力（独創力+俯瞰力）とその基盤となる学識を身につけており、および、グローバルに活躍するために必要なコミュニケーション力と国際性を蓄えていること。
- (3) 所属する専攻の修了要件を満たし、所定年限内に提出した博士論文について教育委員会の最終審査に合格すること。

平成 30 年 3 月修了に向けて、8 名の履修者より、博士（総合学術）が 1 名、付記型学位が 7 名のプログラム修了審査願が提出された。

以下に平成 29 年度、30 年度修了者の博士学位論文題目を掲載する。

[30 年度]

博士（総合学術）	• A Study of Value Co-creation in Service: A performative perspective (サービスにおける価値共創の研究: 行為遂行性の視座から)
教育学研究科 付記型学位	• 食品リスク認知に関わるリスクリテラシーの測定と育成 • 利他行動の促進・抑制過程：評判への関心に基づく検討 • 幼児期におけるルーティンの獲得と実行機能の相補的関係の検討 • 洞察瞑想による情動調整の心理・神経メカニズムの研究
工学研究科 付記型学位	• Omnidirectional Mobile Mechanisms and Integrated Motor Mechanisms for Wheeled Locomotion Devices (車輪式移動装置用の全方向移動機構と統合型モータ機構の研究) • Trajectory Design Based on Robust Optimal Control and Path Following Control (ロバスト最適制御と経路追従制御に基づく軌道設計)
情報学研究科 付記型学位	• Anchoring Events to the Time Axis toward Storyline Construction (ストーリーライン生成のための時間と事象情報の対応付け)

[29 年度]

博士（総合学術）	• 実践論に基づくワークショッピング方法論の開発と社会実装
教育学研究科 付記型学位	• 学習課題遂行場面における動機づけの変化 • 感情比喩の理解と産出の特性 • 幼児期における表情の理解と意図的な表出
工学研究科 付記型学位	• Sensitivity analysis and optimization methods for thermoelectric devices and their modules (熱電素子および熱電モジュールを対象とした感度解析および最適設計手法)
情報学研究科 付記型学位	• A Language-Based Approach to Robust Context-Aware Software (堅牢な文脈認識ソフトウェア開発のためのプログラミング言語の研究)

1.5 履修者の評価

本プログラムでは、修了者が獲得すべき汎用力（Generic Skill）として、インテリジェンス（知性）8項目、パーソナリティ（個性）4項目、エンゲージメント（協働）9項目、ガバナンス（管理）3項目の4群からなる合計24項目の能力指標を「デザインイノベータインデックス（Design Innovator Index）」として設計し、学生の申告に基づき能力伸張を測定している。図1は、企業ならびに、入学時の履修者が獲得すべきと考える汎用力を示している。図から、プログラム開始時に履修者が獲得を期待する能力（履修者の気概）と、企業が就職後に必要と認識している能力（employability）の多くが共通していることが分かる。

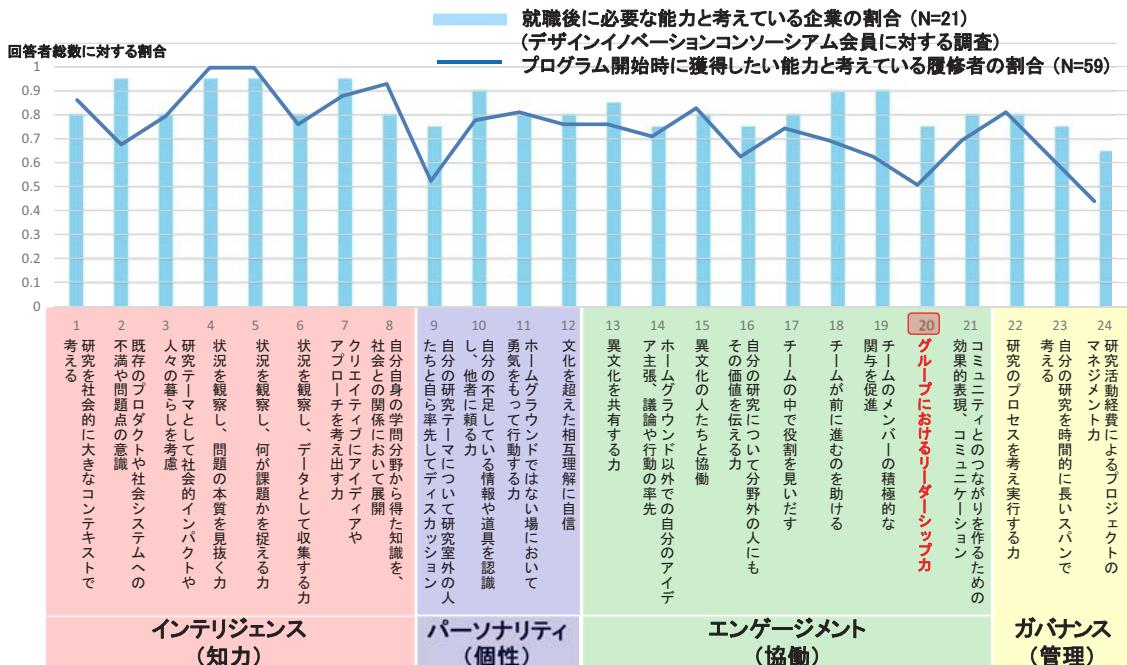


図1 汎用力の育成（入学時）

一方、図2は履修者に対する5年間の履修者の自己評価の変化を示している。最終年度では24項目中18項目において、5年間の中で最も高い達成比率を示している。学年進行とともに、特に協働とそれを支える個性を中心にが上昇していることが分かる。履修者がプログラムで獲得したいとする能力と、実業界が涵養すべきとする能力とのギャップが大きい項目（例えば項目20）に対しても能力伸長が認められ、実業界の期待に応える学修成果が得られている。

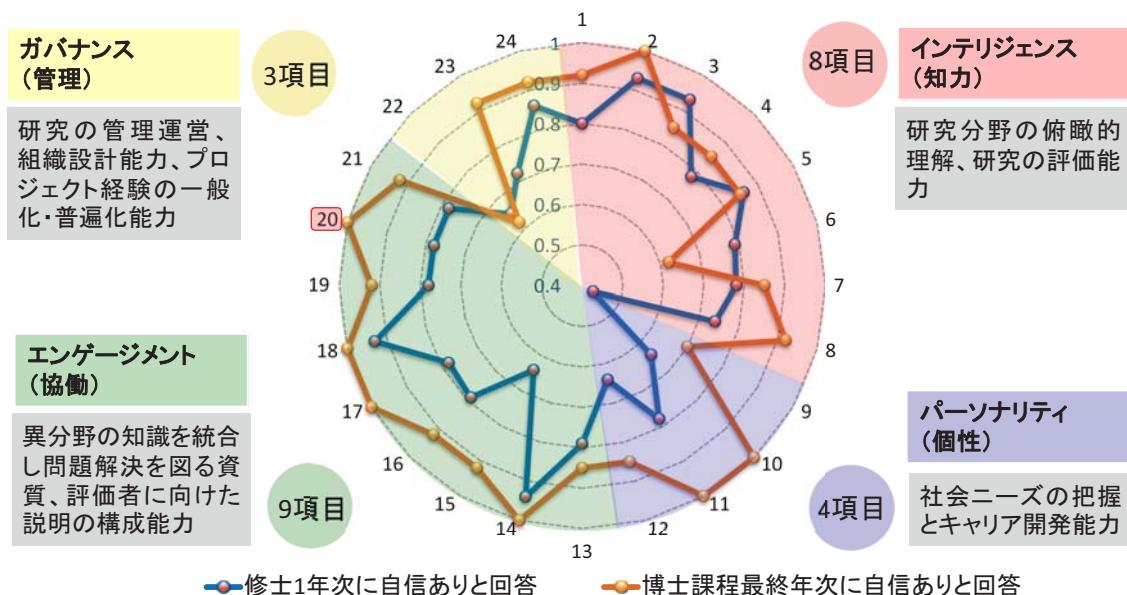


図2 汎用力の育成（デザイン学の履修時）

また、修了時の評価としては、履修者の全期間におよぶワークを含む学修の質を総合的に評価すべく、プログラム修了に必要な汎用力を示す7項目・3段階のループリック（多元的・多段階的評価基準）を設計した。これにより、修了審査委員による公平かつ儉約的な質評価が可能となった。その結果、本プログラム第1期生で2017年度末に学位記を授与された全ての履修者が、7項目全ての基準を満たしていることを、履修期間中の正課ならびに正課外の履修に係るポートフォリオ記録、そして修了審査公聴会の質疑を通じて確認している。

1.6 履修者の進路

2017年度末に5年次の履修者15名に対し、個別にインタビューを行い、異なる専門領域やコンソーシアム企業が履修者の博士研究や進路に与えた影響を調査した（図3）。履修者の進路は多様で、アカデミアを希望する者は40%（教員、コミュニケータを含む）、企業は54%（研究所、事業・コンサルを含む）、起業が6%である。異領域を学ぶことが博士研究のテーマに影響を与えた履修者は40%に上る。また、コンソーシアム企業との交流が、履修者の職業観に大きな影響を与え、様々な職種の選択を促していることが分かる。例えば、心理学を専攻する学生の進路は、従来、ほとんどがアカデミアであったが、プログラムに参加した結果、企業研究所、事業・コンサルなどに広がっている。

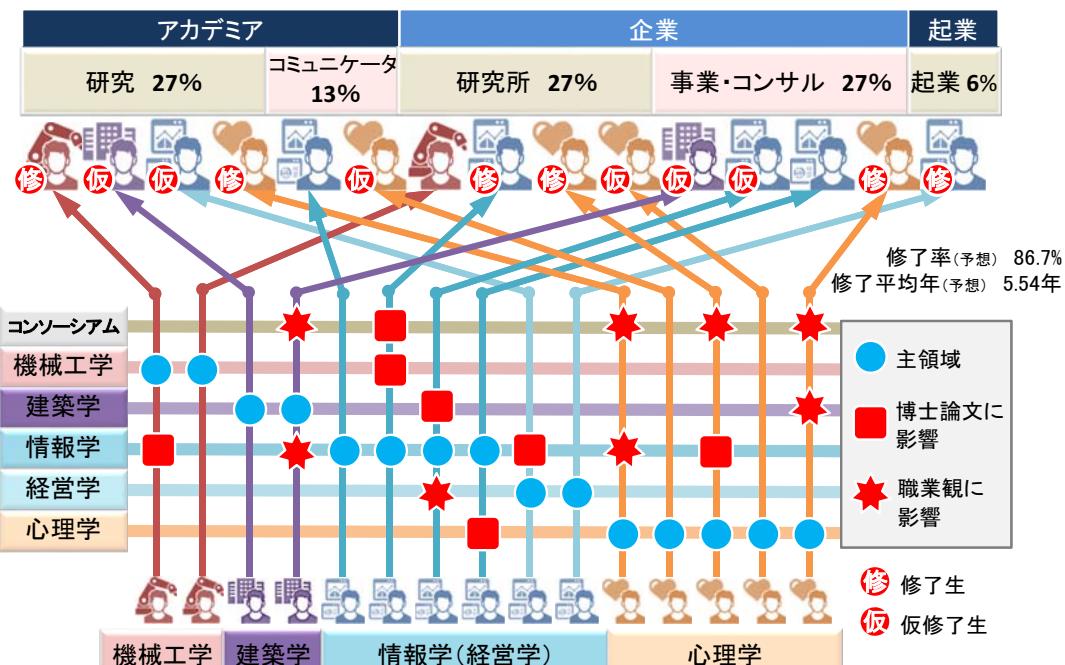


図3 就職、キャリアパスの実績（就職状況）

次に、プログラム活用の類型と進路の関係を調査した。その結果を図4に示す。「機会活用型」は、提供される機会を活用し社会や海外などに体験を広げていくもので、アカデミア志向の履修者が多い。「専門領域拡張型」は、専門を深めつつ周辺領域との接点を広げていくもので、企業研究所への就職が多い。「クロスボーダー型」は、研究領域を横断するテーマに挑戦するもので、企業の事業部門やコンサル部門に進む者が多い。「キャリアパス開拓型」は、企業や異分野と活発に接し視野を広げていくもので、様々な進路に分かれ、起業した者もいる。

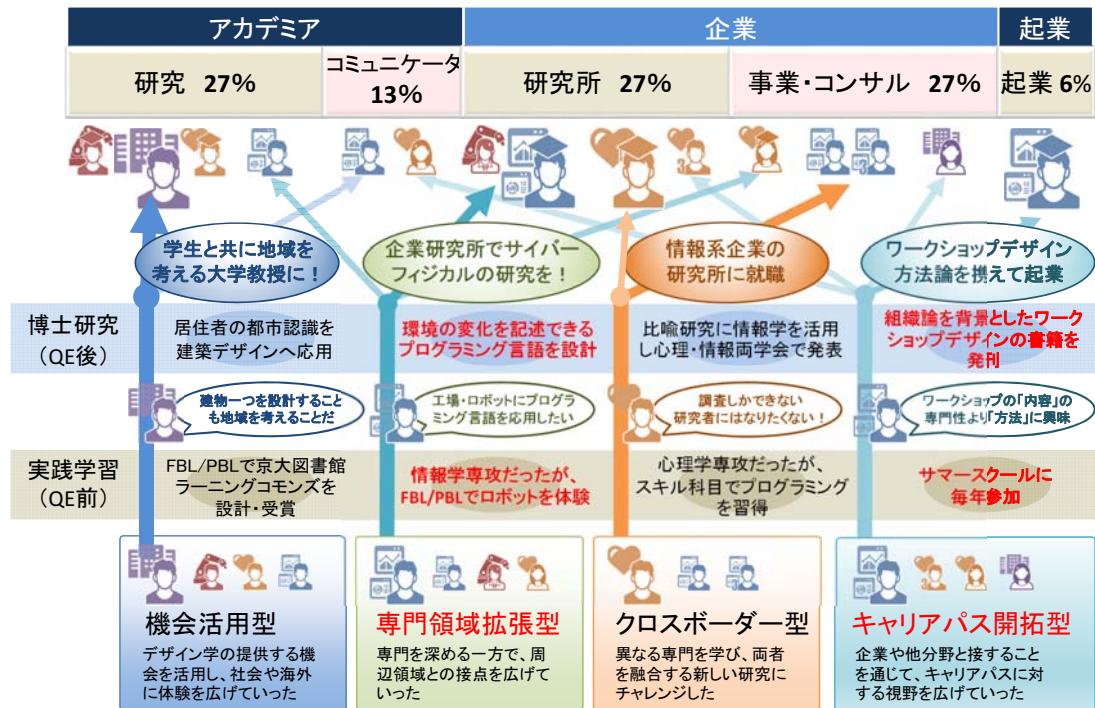


図4 就職、キャリアパスの実績（活用パターン）

このように、プログラムが博士研究や進路に大きな影響を与える一方で、履修者のプログラム活用方法は様々で個性的である。なお、調査対象の15名の内、2017年度末に博士号を取得した修了者は6名、博士審査を残している仮修了者は6名、継続して博士取得を目指す者は3名である。博士取得に要する期間の平均は5.5年程度と予想される。2018年度末に、新たに博士号を取得した修了者は8名、博士審査を残している仮修了者は4名となる。

1.7 履修者の研究活動支援

デザイン学プログラムでは、助成期間後半の学生数の増加に対応するために、博士課程における教育研究に専念するための給付型支援経費である奨励金は設けず、補助金終了後の継続性を維持するため、学振の特別研究員への申請支援を強化している。その一環として、「博士課程教育リーディングプログラム履修者研究活動経費取扱要領」および「デザイン学大学院連携プログラム履修者研究活動経費に関する内規」に基づき、履修者が自発的に独創的な研究活動を行うために必要な経費の支援を目的として、応募制により、審査のうえ、研究活動経費を支給している。本経費は、全体予算を勘案し、海外での研究活動のための旅費を含めて1人当たり年間30万円（半期の場合は15万円）の範囲で募集人数と併せて上限を設けている。なお、募集に際し、申請額の上限および採択する受給者数の上限を明示し、併せて学外で実施されるデザイン学イベントのための旅費が必要な場合は、研究活動経費の一部として計上することとしている。また、平成27年度からは、博士課程後期学生に対しても研究活動経費の制度を適用し、学術振興会特別研究員の申請を前提に支給している。

平成30年度は1年次3名、2年次6名、3年次1名、4年次7名、5年次8名から応募があり、提出された研究活動経費申請書ならびに成績に基づいて、本プログラムが設置する選

考査委員会によって審査が行われた。審査にあたっては、プログラム研究活動としての研究目的の妥当性、研究課題の学術的重要性、研究課題の学術的な特色・独創性、研究計画・方法の妥当性、研究活動経費の妥当性の 5 つに関して評価を行った。

上記の研究活動経費に加えて、博士研究を行うリーディングプロジェクトを円滑に進められるように、国内外の多様な専門家による指導体制「学外アドバイザー制」を導入し、海外研究機関を受入組織とするリサーチインターンシップとともに必要な旅費について、それぞれ 15 万円を上限に支給している。

1.8 履修者キックオフ合宿

毎年恒例のキックオフ合宿を 6 月に行なった。この合宿は学生同士（学年内・学年間）、学生と教職員との交流を深めることを目的としている。特に新入生や編入生に対して、デザイン学の考え方や仕組みを伝え、体験してもらう。前年度までは机上で議論をするワークショップを主に行なってきたが、今年度はより身体的・即興的なデザインを体験してもらい、デザイン方法の幅を広げてもらうことを意図した。

1 日目に行なわれたインプロ（即興演劇）ワークショップでは、外部講師の絹川友梨先生に指導をいただきながら、学生・教職員の全員が体を動かした。「目をつぶったパートナーを手で導き、ぶつからないように歩く」「指定された文字をみんなの身体で表現する」といった、体と頭の両方を使い、即興性や協調性なども求められる 12 種類のワークが展開された。ワークは非常に盛り上がり、新入生も含めた全員がリラックスし、親睦を深めるよい機会となった。また導入されたワークはいずれもシンプルでありながら高い創造性を持つものであり、学生たちにとっては翌日のワークショップに向けた重要なヒントとなった。夜のバーベキューや懇親会でも、学年を越えて親交が深められた。

2 日目の"Design meets Sports"ワークショップでは、1 日目のインプロワークショップの要素を取り組みながら、各学年に分かれたグループで新しいスポーツをデザインした。付箋紙を使ったアイデア出しに始まりながら、デザインしたスポーツをすぐに試行してよりよいものに改善するという作業が繰り返し行なわれた。午後には、6 つのグループがデザインした 6 つのスポーツを、赤チームと白チームの対抗戦のかたちでプレイした。どのスポーツともに大きく盛り上がり、学生らの笑顔が見られた。身体を使ってデザインし、抽象的なアイデアに留まらず他者に実際にプレイしてもらうプロセスは、学生にとって貴重な経験となったと考えられる。

[概要]

京都大学デザインスクール キックオフ合宿 2018	
日程	2018 年 6 月 16 日（土）～17 日（日）
場所	グリーンパーク想い出の森（滋賀県高島市朽木）
幹事	北 雄介（デザイン学リーディング大学院） Kensuke Morris（情報学研究科／L3 編入生）
参加者	学生 29 名、教職員 9 名、外部講師 1 名

[プログラム]

1日目	2日目
11:30 京都駅集合 13:00 石田先生によるトーク アンケート記入 14:00 自己紹介 15:00 絹川先生によるインプロ（即興演劇） ワークショップ 18:00 終了後、バーベキュー 20:00 入浴、交流会	08:00 朝食 09:00 新しいスポーツをデザインするワークショップ "Design meets Sports" 15:30 現地を出発



絹川先生



インプロワークショップ



バーベキュー



交流会



Design meets Sports



体を使い試行するデザイン



デザインした競技をプレゼンし、実際にプレイ



1.9 履修者のネットワーキング

2018年の春にプログラムを修了した1期生にインタビューをすると、同期の仲間との分野の壁を越えたつながりが、プログラムで得られた最大の財産の一つだという意見が多く挙げられる。彼らは履修開始初年度から定期的に集まりをもつなどして絆を深め、修了時にも5年間の学びを振り返る合宿を開催したり、関係を継続するための同窓会を立ち上げるなどの活動を積極的に行なっている。

プログラム立ち上げ期に苦楽を共にした1期生に比べると、2期生以降の連帯は強いとは言えないが、彼らにとどまらず同学年の仲間とのつながりは学位取得に向けて、あるいは修了後にまで活きてくると考えられる。そこで本年度は、各学年の履修者間のネットワークを醸成するための試みを行なった。

同期生同士が膝を突き合わせ、フランクに語り合える場とすることを目指した。「デザイン学○期生 研究・一品持ち寄り会」と銘打って、平日の夜の時間帯にデザインファブリケーション拠点に集まり、互いの研究や活動を紹介しあいながら、それぞれが持ち寄った料理をつまみにお酒を飲むというスタイルとした。教員の参加は、幹事役の北特定講師と川上特定教授（いずれもデザイン学リーディング大学院）のみに限定した。

各学年ごとに、原則、年度内に3回を開催した。初回には幹事役教員より趣旨を説明した後、学生それぞれの研究紹介があった。3年次編入生も多いため、同学年でも互いに初対面のメンバーもいる中で、互いのことを知るよい機会となった。同学年メンバーのSNSグループもつくり、より気軽に連絡が取れるようにした。

また、今年度の同学年のネットワークづくりの集大成としての意味合いと、学年をまたいだ交流を深めることを目的として、3月のスプリングデザインスクール内に「デザインスクール全学生・修了生ミーティング」というイベントを開催する（3.2.2.にて後述）。各学年の3回目の持ち寄り会では、このミーティングに向けた準備も行なった。

開催日程と参加人数

	第1回		第2回		第3回	
	日程	人数	日程	人数	日程	人数
2期生 (L5)	7/24	6	(開催なし)		2/28	5
3期生 (L4)	6/7	6	11/29	5	2/21	2
4期生 (L3)	7/23	7	10/22	4	2/28	2
5期生 (L2)	7/25	4	10/5	3	2/20	4
6期生 (L1)	7/13	8	8/9	6	2/13	4



3期生の第1回



1期生の第1回

1.10 意識調査

2018 年度も、新たにプログラムに参加した履修者への質問紙調査を実施した。本意識調査は、教育プログラムの効果と課題を把握することを目的として、本プログラムで毎年実施しているものである。昨年度と同様に、新たに本プログラムへの履修を開始した、修士課程 1 年生 (L1) および博士課程編入生 (L3 相当) を対象として調査を行った。

本年度の調査は、2018 年 6 月 16~17 日に開催したデザイン学キックオフ合宿におけるプログラム初日の冒頭に、当該学生 14 名を対象として調査紙への回答時間を設け、実施した。回答時間はおおよそ 30 分である。また、キックオフ合宿に不参加だった該当学生には、後日メールにより依頼し、5 名から回答を得た。その結果、修士 1 年生 14 名、編入生 5 名、合計 19 名から回答を得た。質問紙の内容は、昨年度までと同一とし、選択式の 24 問と自由記述する 7 問から構成した。選択式の 24 問では、身につけたい力として、それぞれ、「1：是非獲得したい 2：できれば獲得したい 3：あまり興味はない」を回答してもらった。

回答結果から、新たにプログラムに参加した履修者が是非獲得したいと思っている力として挙げられた項目は、昨年までと同様に以下の項目が上位に並ぶ。

- 状況を観察し、データとして収集する力
- 状況を観察し、問題の本質を見抜く力
- 課題に対してクリエイティブにアイデアやアプローチを考え出す力
- 自分の研究を進めていく上で、不足している情報や資源を認識し、必要に応じて他者に頼る力

修士 1 年生のみの回答に限っても、上位に並ぶ項目には同様の傾向が見られる。

これに対して、編入生 (博士後期課程 1 年生) からの回答に限ると、以下の項目が上位に挙げられている。

- 状況を観察し、データとして収集する力
- 異文化の人たちと実際にうまく協働することができる力
- コミュニティとのつながりを作るために、効果的に表現し、聞き、他者に合わせるためのコミュニケーション方略を考えられるような力
- 自分の研究の意味や意義を、時間的に長いスパンで考える力

「状況を観察し、データとして収集する力」は、新入生、編入生共に、ぜひ獲得したい力として挙げられているのに対し、博士後期課程の学生は、コミュニケーション力や、異文化の人たちとの共創、また自らの研究の位置付けといった項目に、目的意識がより向いていることがわかる。これらの項目は、修士 1 年生の新入生の回答の中では獲得したい力の優先順位としては低く、彼らの目的意識の中ではあまり中心ではないことが示唆される。

また、獲得することに興味がない、と複数名が回答した力は、下記の 2 項目であった。

- 研究プロジェクトをマネジメントする力
- グループアクティビティにおいてリーダーシップをとる力

これらの調査結果から、大学院での学年が進行し自らの専攻での研究活動に携わるにつれ、学生が自ら獲得したいと考える力が変化していることが示唆される。従来の大学院教育に加えて、5 年一貫のデザイン学教育プログラムに関わることが、学生の成長にどのように貢献しているかを長期的に観察することが望ましいと考えられる。

1.11 参画専攻の変更（教育学研究科）

教育学研究科では、2018年度（平成30年度）4月の組織再編により、これまで進めてきた高度な専門知識及び研究能力の育成とともに、グローバルな視野で思考して活躍できる能力を備えた人材育成を目標とする教育研究拠点を形成するために、従来の教育科学専攻、臨床教育学専攻の2専攻11講座を発展的に解消・統合し、新たに1専攻5講座（教育・人間科学、教育認知心理学、臨床心理学、教育社会学、連携教育学）からなる「教育学環専攻」を設置した。これは、学問領域の多様化を意識した専攻名であり、日本で唯一の専攻名である。英語名称 *Interdisciplinary studies in Education* は、教育における学際研究を示している。

「環」は、教育学研究科の人間・心・社会に関わる複数の専門領域と、学内外の連携する組織や実社会が円環状に結びつく学際研究を意味している。

教育学環専攻には、専門領域に基づく9コースの体系的な高度専門科目と、専門領域を超えたコース共通の授業科目が設置されている。修士1年次においては、必修科目「教育科学基盤演習」（前期）、「学際総合教育科学」（後期）を通して、学際的・先端的な教育研究のためのスキルや知識を身につける。新設のグローバル教育展開オフィスが中心となり、海外の教育研究機関と連携して進める新たな授業科目「国際インターンシップ」「国際フィールドワーク」「国際合同授業」は、修士課程においてそのベーシック科目を履修するとともに、博士後期課程では、これらのアドバンスト科目を履修することができる。その目標は、自主的な探究力を養い、異分野交流、理論・実践融合型研究を通して新学術領域の創出を担う能力と、高度な語学力、国際的発信能力、学術論文や学会発表などにより国内外に研究成果を発信し、学界をリードしうる能力、また、社会的問題の解決のため、高度な教育学・心理学の専門能力とリサーチマインドを持ちながら、現実の社会の処方箋を描き、イノベーションを起こす知識とスキルを習得させることにある。

このように、教育学研究科教育学環専攻は、デザイン学における教育プログラムの成果を活かし、連携することによって、教育学・心理学を土台にして学際的領域から社会的問題にアプローチする人材育成と新しい学問領域を創出しうる教育・研究拠点を目指している。

2 科目と履修

2.1 修士教育の充実

2.1.1 教科書シリーズの出版

温暖化、災害、エネルギー、食糧、人口などの複合的な問題は、1つの専門領域だけで解くことはできない。専門の分化が進む大学は、横断的な教育研究を進める必要がある。そこで、異なる領域の専門家が協力するための共通言語としてのデザイン学テキストシリーズを出版することとした。執筆には、情報学、機械工学、建築学、心理学、経営学を専門とする多数の教員が参加している。

本テキストシリーズ第1巻の『デザイン学概論』は、30余名の執筆により、2016年4月に共立出版から発刊した。現在、6つのデザイン学共通科目に対応する以下の書籍の執筆、出版を進めている。

『デザイン方法論』：執筆中

『アーティファクトデザイン』：2018年4月刊行

『情報デザイン』：2018年5月刊行

『組織・コミュニティデザイン』：2017年10月刊行

『デザイン構成論』：執筆中

『フィールド分析法』：執筆中

以下、2018年度に出版した『アーティファクトデザイン』、『情報デザイン』の概要を示す。

『アーティファクトデザイン』 権木哲夫 編 / 権木哲夫・松原厚・川上浩司・堀口由貴男 著

人工物のデザイン対象を、技術的要因に加えて人的要因・組織的な要因が相互に複雑に絡む複合体と見なし、特に人工物自身の中身と組織である「内部」環境と、人工物がそのなかで機能する環境である「外部」環境、さらにそこにヒトがどのように人工物とかかわるかの「インターラクション」の3つの視点からのデザインを考える。ここに通底するのが、人工物の理解を可能にしているヒトの認知戦略であるが、本書では、ヒトの認知をどのように捉え、インターフェースの技術がそれをどのように支援するのか、それによりヒトの認知がどのように変容し、認知の対象はどこまで拡がりを見せるのか、について考える。そして人工物と環境ならびにヒトとの間で生み出されるインターラクションの諸相に着目し、ヒトが外界との連続的な相互のかかわりの中で見出している認知戦略について明らかにする。さらに、ヒトの活動を支える技術として、個人や社会にとって、光の部分のみならず、影の部分、すなわち新たな技術によって抱え込むことが予想される矛盾、へも配慮しながら、それへの解消に向けてどのような技術革新が求められるかについても明らかにする。



『情報デザイン』 田中克己・黒橋禎夫 編

情報デザインとは、情報を構造化して間にとって理解しやすい形に表現するための法論である。本書では、情報デザインとは何かについて述べると共に、多様なメディアによる情報表現の方法論——具体的には、情報の構造化のための情報の分類法や情報の関係の構造化法、理解しやすい情報表現を行うための方論——について詳述する。



2.1.2 問題発見型／解決型学習（FBL/PBL）の実施

本科目は、FBL（Field-Based Learning）を通して、与えられた実世界の状況から解決すべき問題を発見するプロセスをチームで体験することで、デザインの実践およびデザイン理論とデザイン手法の習得を行い、また、PBL（Problem-Based Learning）を通して、与えられた実問題をチームで解決するプロセスを体験することで、デザインの実践およびデザイン理論とデザイン手法の習得を行う。本科目で扱うテーマは、デザイン学に参画する各分野の教員が研究として取り組む実問題と、企業や自治体などから持ち込まれる実問題を実習化したものである。

平成30年度は以下のテーマを実施した。

[前期]

- MaaS（Mobility as a Service）時代のためのデータベース構築と分析
(情報学研究科 佐藤彰洋)
- 「法則」と「感性」に基づくデザインプロセス（工学研究科 小森雅晴）
- オフィスビルの快適空間設計のための映像を使ったLEDアートイノベーション
(工学研究科 富田直秀、総合生存学館兼任教授 土佐 尚子)
- 構成と分解によるアーティファクトの探求と展示
(デザイン学リーディング大学院 中小路久美代)
- 【部局】ブロックチェイン技術を用いた新しい社会システムの探索
(情報学研究科 石田亨)
- 【部局】福島の今と京都にいる自分（情報学研究科 大手信人）

[後期]

- 不便益なモノゴトのデザイン（デザイン学リーディング大学院 川上浩司）
- 【部局】ブロックチェイン技術を用いた新しい教育システムのデザイン
(情報学研究科 石田亨)
- 【部局】「新しい石油」としてのパーソナルデータとその市場（情報学研究科 吉川正俊）
- 【部局】「記憶に残る」ミュージアム鑑賞体験をもたらす情報アクセスシステム
(情報学研究科 山本岳洋)

※括弧内は筆頭実施責任者。【部局】は部局主導型テーマ。

FBL/PBL はデザイン学共通実習科目として参画専攻がそれぞれ提供している。前期、後期とも1単位で、本プログラムにおいてはQEの受験に必要な単位として認定される。選択科目であるが、社会に実在する問題発見、問題解決を異分野の学生がチームで取り組む最初の機会であり、QE前の受講が推奨されている。なお、プログラム非履修者（各専攻在籍の、本プログラムを履修していない学生）のうち情報学研究科社会情報学専攻の修士課程の学生は、平成28年度から修了単位としてFBL/PBLの単位が認定されるようになっている。

補助金終了後の本プログラムの継続性の確保を念頭に、平成30年度から、情報学研究科社会情報学専攻では FBL/PBL を専攻で独自に実施している（部局主導型テーマ）。学生にとっては本プログラムで実施するテーマ（プログラム主導型テーマ）と専攻で実施するテーマに違いはなく、従来どおり所属する専攻によらずいずれのテーマでも受講できる。

2.1.3 沖縄、香港でのデザインスクールの実施

(1) デザインスクール in アジア

本イベントでは、京都大学での FBL/PBL、サマーデザインスクール、デザインスクール in 沖縄などを経験した L2 を中心とした学生が、海外の学生と合同でデザインワークショップを行うことによって、修得したデザイン理論やファシリテーションの手法の定着を図る。英語でのワークショップである点、アジアの異なる環境を考慮した課題を対象とする点、初めて状況を理解する海外でも問題発見、解決を求められる点で難度が高い。博士課程でのフィールドインターンシップなど本格的な武者修行の前段としての位置づけるものである。

特に今回は、京都の資源を香港の問題解決に応用する "transfer" というテーマを設定し、各ラウンドにおいて各都市のリアルなフィールドに身を投じるプログラムを組むことで、両都市の文化の違いを深いレベルで学んでもらおうと意図した。また香港ラウンドでは社会実装を想定したテストを実施させ、アイデア出しよりも深いレベルでのデザインの理解を促す。フィールドワークの計画、取り組むテーマの選択や実装テストの計画などの段階を、学生の主体性を重んじて行なわせることで、何をどうデザインするかを自ら決定するメタデザインの能力や、自律的なプロジェクトマネジメント能力の養成を目指した。

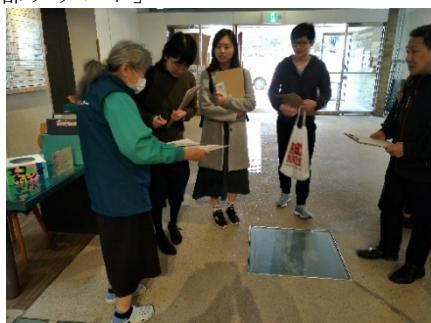
最初に、香港に transfer しうる京都の資源をなるべく多様に集めることを目的とし、京大的学生に事前に計画させた 6 つのフィールドワークを行なった。次に 6 グループが見つけた京都の資源と、香港の社会課題とを全て一つに集めてカテゴライズした後に、学生自ら取り組むテーマを選ぶことで、グループ替えを行なった。結果的に「教育」「都市デザイン」「環境」「ライフスタイル」「子供のケア」「遺産」というグループに分かれた。その後、京都から香港へと資源を transfer するための具体的なアイデアの生成と、そのアイデアをテストするための香港ラウンドの実装テスト計画の立案をさせた。

香港ラウンドでは、大学生のストレス解消のための施設の運営（「ライフスタイル」グループ）、香港の遺産を巡るツアーの実施（「遺産」グループ）、京都と香港の小中学校でのアンケート調査（「教育」グループ）など個性豊かな実装テストが行なわれた。学生自身がこのプロセスを楽しみ、真剣に考えており、主体性を重んじたワークショップ設計の効果があらわれていた。うまくいかなかつた部分も含めて省察し、学んでもらえたと感じている。

デザインスクール in アジア 2018 / Design School in Asia 2018	
共通テーマ	"transfer"
実行委員長	北 雄介（デザイン学リーディング大学院）
実行委員	石田 亨（情報学研究科）、十河卓司（デザイン学リーディング大学院）
〔京都ラウンド〕	
日程	2018 年 4 月 6 日（金）～8 日（日）
場所	京都大学デザインイノベーション拠点
プログラム	事前：京大生はフィールドワークを計画、香港バプティスト大の学生は香港の社会課題をリストアップと整理 4/6（金）夜 歓迎パーティと導入 4/7（土）グループごとにフィールドワーク、課題と資源の発見、グループ替え、アイデア生成 4/8（日）プレゼンテーション、香港ラウンドでの実装テストの構想、リフレクション

参加者数	学生 33 名（京都大学 13（本科 L3: 3, 本科 L2: 6, 予科 L2: 4） 香港バプティスト大学 15、台湾国立成功大学 5） 教員 7 名（京都大学 3、香港バプティスト大学 3、台湾国立成功大学 1）
[香港ラウンド]	
日程	2018 年 5 月 25 日（金）～28 日（月）
場所	香港バプティスト大学
プログラム	事前：各グループはオンラインで香港ラウンドを計画・準備 5/25（金）香港着 夜 歓迎パーティと導入 5/26（土）グループごとに実装テストを実施 5/27（日）アイデア洗練、最終発表、リフレクション、バンケット 5/28（月）帰国
参加者数	学生 38 名（京都大学 11、香港バプティスト大学 15、台湾国立成功大学 12） 教員 11 名（京都大学 3、香港バプティスト大学 7、台湾国立成功大学 1）

[京都ラウンド]



フィールドワーク（エコロジーセンター）



グループ替え

[香港ラウンド]



実装テスト（大学生のストレス解消）



最終プレゼンテーション



(2) デザインスクール in 沖縄

デザインスクール in 沖縄は今回で 6 回目となる。本スクールの対象は主に 1 年次の履修者であり、ファシリテーションの習得を一つの目的とし、琉球大学と合同でワークショップを行うことで、新しい問題の発見と解決策を見いだす機会としている。

今回は「沖縄の未来を創る観光施策」をテーマとして実施した。昨年同様、参加者がワークショップにおいてより効果的なファシリテーションを実践できるよう、事前にファシリテーション講習を実施した。

なお、過去のテーマは次のとおりである。第 1 回：「観光」、「おもてなし」、第 2 回：「健康」、「雇用」、第 3 回：「子どもの国の活性化」、「図書館と商店街の連携を通した活性化」、第 4 回：「普天間飛行場の跡地利用」、第 5 回：「子どもの貧困」。

(i) ファシリテーション講習（於 京都大学デザインイノベーション拠点）

沖縄での合同デザインスクールの実施前に、デザインプロセスとデザイン手法、ファシリテーション、インタビューについての基礎的な講習のほか、昨年と同様にフィールドワークについての講習も併せて実施した。本講習はデザインスクール in 沖縄の参加者は原則全員参加しているが、都合により 2 名が欠席。沖縄には行かないが本講習のみ参加の学生 1 名を含め、受講者は計 12 名であった。なお、今回も琉球大学側から計 11 名（内 3 名沖縄ビジネス外語学院）の受講希望者があり、テレビ会議システムで接続し遠隔で実施した。

【スケジュール】

11月 10 日（土）13:30～16:45

講義「デザインとは」

講義「フィールドワークについて」

講義「インタビューについて」

講義「ファシリテーションとは」

ワークショップのデザイン、テーマ概要



講義の様子

(ii) 京大－琉大合同デザインスクール（於 琉球大学地域創生総合研究棟 1 階）

近年、沖縄県を訪問する観光客は外国人を中心に急増している。しかし、沖縄の交通に関する満足度の低さ、沖縄本島内での観光客の訪問先の偏在などにみられるように、多くの課題も抱えている。本スクールでは、単にこれらの課題を解決するだけでなく、沖縄県や現地の出版社の方による 2 件の基調講演、フィールドワーク、ディスカッションを通して現状を理解した上で、沖縄の未来を創るための、沖縄県民、観光客、産業界にとって望ましい観光

施策をデザインした。参加者は5~6名で1チームとなり、計6チームに分かれてグループワークを行った。デザイン学履修者はファシリテータとして各チームの議論をリードした。

【スケジュール】

11月23日（金・祝）

午前 オープニング、基調講演、

午後 アイスブレイク、グループワーク、フィールドワーク

11月24日（土）

終日 フィールドワーク、グループワーク

11月25日（日）

午前 グループワーク、発表準備

午後 発表会、クロージング

【発表タイトル】

グループ1：オキコネ

グループ2：沖縄県幸福度upプラン

グループ3：ヤングが稼げるディープ沖縄ガイド

グループ4：スポーツリズム～海以外の沖縄～（優秀賞）

グループ5：幸せ沖縄ぐらし（優秀賞）

グループ6：win-win tourism



グループワークの様子



発表会の様子



終了後に参加者全員で

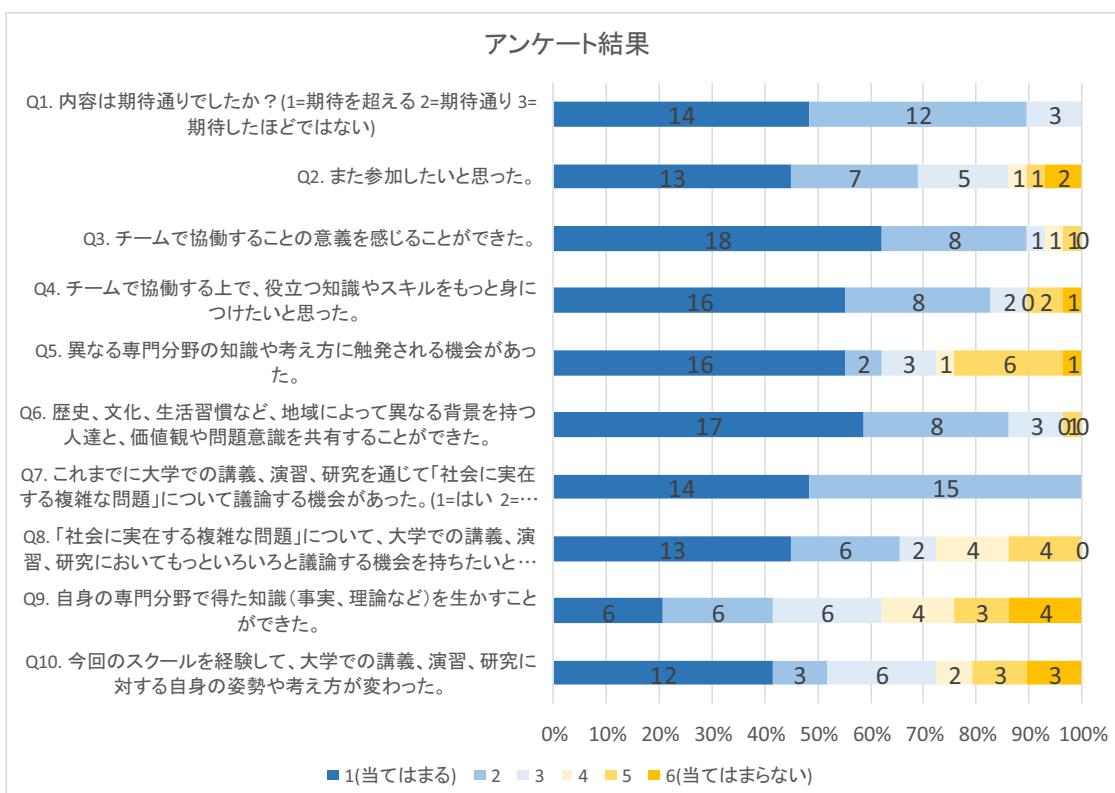
(iii) 参加者

- ・ 学生 29 名（京都大学デザイン学履修者 13 名、琉球大学大学院生 2 名（理工学研究科情報工学専攻 2）、琉球大学学部生 9 名（工学部情報工学科 2、工学部工学科知能情報コース 6、国際地域創造学部国際地域創造学科 1）、沖縄ビジネス外語学院生 5 名（ビジネス英語コース 5）。
- ・ 教職員 7 名（京都大学 4 名、琉球大学 3 名）
- ・ 社会人協力者（行政 1 名、企業（出版社） 1 名）

(iv) アンケート

琉球大学側の参加者も含め、全員を対象にアンケートを実施した。内容は「デザインイノベータインデックス」などに基づき、本スクール向けに新たに設計したもので、質問項目は昨年と同じである。結果も Q5 を除いて概ね同じ傾向となった。

Q5「異なる専門分野の知識や考え方方に触発される機会があった」については、4~6（どちらかというと当てはまらない～当てはまらない）と回答した参加者が昨年は約 5%であったのに対し、今年は約 30%であった。この理由として、昨年よりも低年次（学部 1~2 年生）の参加者の割合が増えたことが考えられる。実際、院生（有効回答数 15 名）の回答に限れば約 20%であったが、学部生（有効回答数 14 名。うち 2 名は 4 年生、12 名は 1~2 年生）の回答は約 40%であった。



2.2 博士教育の実施

2.2.1 オープンイノベーション実習の実施

本実習では、社会の実問題を発見し解決するデザイン活動のために、関係する専門家あるいはステークホルダに依頼し、オープンイノベーション（OI）のためのチームを構成し、ワークショップを連続的に実施することで目標を達成する。プログラム主導型、部局主導型、研究室主導型の3種類があり、いずれも異領域の専門家が加わるチームを受講者が構成し、マネジメントすることが要件である。

- プログラム主導型：デザイン学リーディング大学院のOI実習担当教員が実施責任者となり、デザインイノベーションコンソーシアムの会員組織の協力を得て実施する。テーマは原則として公開可能で知財に関わらないものとする。受講者は履修者の中から募集し、その役割は、専門家として問題解決や問題発見に参加するだけでなく、OIのためのチームを構成しマネジメントすることにある。
- 部局主導型：デザイン学参画専攻の教員が実施責任者となり、社会に存在する実問題、あるいは近未来に想定される実問題を課題とするほかは、プログラム主導型と同様である。
- 研究室主導型：デザイン学履修者の指導教員が実施責任者となり企画実施する。博士研究を構想するためのもので、他領域の専門家を招き研究テーマを検討するなど、主として履修者の所属する研究室で行う。

今年度はプログラム主導型1件、部局主導型2件、研究室主導型5件の計8件を実施した。下記に一部のテーマの概要を掲載する（括弧内は筆頭実施責任者）。

[前期]

非接触型センサによる生体情報計測から心的状態を推測する：ヒューマンモニタリング・デザインの構築に向けて

（部局主導型・教育学研究科 齊藤智）

概要：近年、さまざまなセンサ・デバイスによって生体情報を簡便に入手することができるようになってきている。非接触型センサによって、心的状態や心的過程が、その詳細な認知過程まで含めて推測可能となれば、自動車運転中、機器操作中、あるいは学習活動中のモニタリングを、運転、操作、学習に干渉することなく持続的に行うことができる。しかし、新しいセンサ・デバイスから得られた新しい指標の心理学的意味は必ずしも明確ではない。本実習では、特定の認知課題を設定し、非接触型センサ・デバイスによる生体情報の収集、解析方法の検討、課題遂行者の心的状態の推測を行う。センサ・デバイスの開発者・研究者との議論と共同活動を通じて、課題の選定、ターゲットとする心的過程の特定を行うとともに、その社会的意義を検討し、社会実装という展望を描く。

[後期]

空間を超えたコミュニケーションのデザイン

（プログラム主導型・デザイン学ユニット 十河卓司／課題提供者：（株）セック）

概要：インターネットのブロードバンド化が進展し、メール、TV会議システム、チャット等のコミュニケーション手段も多様になり、空間を超えた人と人との意思疎通は容易に

なっている。しかし、例えばビジネスの現場では、遠隔会議では臨場感が伝わらない、発言タイミングに戸惑うなど、Face to Face の会議に匹敵する環境にはなっていない。本実習では、システム全体をデザインしなおすことで、これらの課題を解決する新しいコミュニケーションのあり方を考える。

京都番組小学校における地域に依拠する価値の創造的持続としての利活用デザイン III

(部局主導型・工学研究科 神吉紀世子)

概要：京都では元学区と呼ばれる地域社会が明治以降自治基盤となり、現代まで地域住民により持続されている。そのため統廃合により学校としての機能が失われた元小学校の利活用は、その地域社会における位置づけと持続可能性を踏まえて考えられるべき課題である。元西陣小学校は平成 7 年に閉校され、その利活用を京都市と西陣学区の双方が検討している。後者には過去に二度、本実習も関わりデザイン案を提案しているが、その実現には課題が残る。本実習では引き続き西陣地域と連携し、元西陣小学校の活用という実課題を扱う。地域社会における元小学校という場の在り方を考え、地域と共有しているデザイン案を踏まえた利活用についての検討を行う。

2.2.2 フィールドインターンシップの実施

フィードインターンシップは、「現場の教育力」を活用する試みで、複数の専門領域に関する国際的・社会的課題に対して、フィールドにおける問題解決を通じてリーダーシップを養成するものである。本科目での到達目標は、初めて状況を理解するフィールドにおいて、適切に状況を構造化し、解決可能な問題として定義するとともに、限られた時間内で現場のステークホルダーや異なる専門領域のメンバーと円滑にコミュニケーションを取り協力して実現可能な解決策を立案することである。

平成 30 年度は、文化財保護を目的とした NPO 「Indonesian Heritage Trust」 を受入組織として、インドネシアのギャニヤール県およびカランガスム県を対象に「自然災害への備えのためのレジリエントなスバックシステムのデザイン」をテーマに取り組んだ。インドネシアのバリ島には、2012 年に UNESCO の世界文化遺産に登録された「トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスバック・システム」があり、最古の灌漑システムを含んだ棚田の景観が有名である。スバックとは、伝統的な水利組合であり、スバック構成員は農作業だけでなく、灌漑システムの維持に関わる費用負担なども行っている。このスバックが世界遺産に登録されたことで、棚田の商業化が進み、スバックの構成員である農民が離農し、スバックが弱体化しつつある。このような環境において、昨年アグン山が噴火しスバックにも大きな影響があったが、スバックの弱体化により早期の復旧が困難な状態となった。そこで、このような大規模な自然災害に備えるために、早期に自己復旧可能なレジリエントなスバックシステムのデザインが今年度の本インターンシップの課題である。この課題に向けて、農民、棚田、村という 3 つの観点からアプローチし、グループを 3 班に分けて臨んだ。

まず 1 日目は、スバックに関する基本知識を得るために、スバックの現地訪問と講義を受講した。具体的には、地元大学 (Dwijendra 大学) の Sedana 教授や名古屋大学の宮沢教授からスバックに関する最新の調査研究の結果について講義を受講した。さらに、フィールドサーベイとしてテガラランの棚田や、Nyuh Kuning 村周辺の水田を訪問し、灌漑システムへの理解を深めた。2 日目は、昨年のアグン山噴火によって被災したカラガスム県に場所を移し、

テラガワジャ川など土石流発生箇所の調査や、被災した村のリーダーへのインタビューなどをを行い、被害状況や復旧具合の把握に努めた。3日目は引き続きカラガスム県を訪問し、被災地域の灌漑システムの状態の調査を行った。また夜には、避難キャンプを慰問し、被災者へのインタビューを行い、被災者の生の声を収集した。特に印象的だったのは、被災してから1年経っているにもかかわらず、避難キャンプの環境整備がされておらず、必要なものが配給されていない状況であった。4日目は、これまでの気づきなども踏まえ、グループディスカッションを行い、現状の問題点を整理し、解決策のアイデアの具体化を行った。その結果、農民チームは農民の担い手を増やすことで自己復旧可能にするために、若者の農業へのイメージを変える農民リブランディングを、村チームは灌漑システムが川に沿って上流下流で依存関係があることに着目しバック間の連携を促進するスマートフォーラムを、棚田チームは棚田の状況をリアルタイムに把握できるスマートフォンを活用したスマート農業を解決策としてまとめた。その後、グループ間でアイデアを共有し、重複部分の切り分けや関連項目の整理などを行い、各アイデアが相互に補完し合うように内容をブラッシュアップした。最終日は、昨年度関わったスマート博物館において、ギャニヤール県およびカラガスム県の文化課の課長を招き、現地発表会を行った。



フィールドワークの様子



グループワークの様子



現地発表会の様子

2.2.3 リサーチインターンシップの実施

リサーチインターンシップは、主として国内外の研究機関の研究室に数週間から数ヶ月滞在し、受入先組織の研究員との共同研究を通じて、デザイン学の視点から既存の学術分野を横断する境界領域において真理を探求でき、新しい研究分野において研究チームを組織してリードできる能力の涵養を目指している。そのために、指導教員がインターンシップ先を決定した後、履修者が受入先組織と共同研究の提案、計画、滞在中の宿舎等についての協議を行い、実施計画書を作成する。関係教員による実施計画書の事前審査を受けた上でインターンシップを実施し、インターンシップ終了後にはレポートを提出し、報告会で発表することを必須としている。

平成 30 年度は、6 件実施計画書の提出があり、それぞれ次を受入先組織としてリサーチインターンシップを実施した。

- NTT 科学基礎研究所人間情報研究部
- Leibniz University Hannover (Germany)
- Humboldt University of Berlin (Germany)
- Faculty of Medicine, Public Health, and Nursing (FK-KMK) Universitas Gadjah Mada (Indonesia)
- Clinic to Cloud (Australia)
- University of Colorado Boulder (USA)

2.2.4 リーディングプロジェクトの実施

博士課程では、社会的課題に挑戦する産学（官公民）リーディングプロジェクトに参加し、複数アドバイザー制度の下で、高度な専門性と俯瞰力を要求する協働を通じて学位論文をまとめる必要がある。リーディングプロジェクトの要件は以下の通りである。

- 社会の実問題、あるいは近未来の問題の発見・解決のためのプロジェクトであること
- 博士の主な指導教員となる教員がプロジェクトチームに含まれていること
- 複数の専門領域による博士指導体制が構想されていること

平成 30 年度は、10 件のリーディングプロジェクト調書が提出され、3 年次履修者は学位研究を各自のリーディングプロジェクト内で進めている。以下に進行中のリーディングプロジェクトを示す。

[平成 30 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (教育学研究科)	
指導教員	齊藤 智 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	想起の意図的な抑制による忘却メカニズムに関する検討
[プロジェクトの概要]	
過去の不快な記憶が持続的に思い出されることは、PTSD やうつ病といった精神疾患につながる。そのため忘却は精神的な健康を保つために重要である。不快な記憶を意図的に考えないようにする（想起の意図的な抑制）ことで、我々はその記憶を忘れることができることが示されてきた。しかし、その忘却メカニズムはほとんど明らかとなっていない。そこで本プロジェクトは行動実験及び計算機シミュレーションによって意図的な抑制による忘却メカニズムを解明する。本プロジェクトは心理学の大きなテーマの一つである忘却メカニズムの一つを明らかにするという点で理論的意義が大きいだけでなくそのメカニズムの応用によって記憶に関わる精神疾患に対する支援の改善に貢献するという点で社会的な意義も大きいと考える。	

履修者 B (工学研究科 (マイクロエンジニアリング))	
指導教員	田畠 修 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	ナノ流体デバイスを用いた DNA ナノ構造体の形状変化のセンシング
[プロジェクトの概要]	
<p>近年、DNA の塩基の有する相補性に基づき、DNA を材料として機能性ナノ分子を作製する、DNA オリガミの研究が盛んでいる。特に、DNA オリガミでは設計によって多様な機械的な機構を持たせることができ、DNA は様々なナノ粒子との選択的結合を有する。そこで、DNA オリガミを用いると、多様な機能を持たせた DNA ナノ構造体の作製が可能になり、バイオや医学分野において幅広い応用が期待されている。特に、DNA を材料とする DNA ナノ構造体の人工抗体は、細胞の培養や動物の利用などが生産過程に必要である既存の抗体より安価であり、SELEX(Systematic evolution of ligands by exponential enrichment)法などの手法より任意の生体分子に選択性を持つ構造を容易に探せるという利点を持つことで、人工的な抗体としての幅広い応用が期待されている。</p>	
<p>このような DNA オリガミを人工的な抗体として用いた実用的な応用の際には、今まで主にゲル電気泳動や AFM(原子間力顕微鏡)又は FRET (Förster resonance energy transfer)などの既存の手法を用いることで、例えばターゲット分子と反応した DNA ナノ構造体の構造変化などを観察する必要があった。しかし、これらの手法では高価の装置の利用を必要とする、もしくは繁雑な操作を必要とするという問題があり、これは多様な分野における DNA オリガミ技術の応用に置いて一つの大きな障壁として挙げられている。</p>	
<p>その一方、マイクロフューディクスの分野では、マイクロ加工技術に基づいて、様々な形状のマイクロチャネルを作製し、その中で微小量の流体を精密に制御する様々な手法が活発に開発されている。これにより、マイクロフューディクスでは微少量のサンプルの分離、濃縮などの一連の複雑な処理を並列で素早く行うことが可能になり、様々な手法を総合的に用いることで、LOC(Lab on a chip)や POCT(Point-of-care testing)の概念が既に実現化されている。そこで、マイクロフューディクスの手法を、DNA ナノ構造体を用いたセンシング・プロセスに応用することで、サンプルの全処理、ターゲット分子との反応、構造変化した DNA ナノ構造体の分離・センシングなどの一連のプロセスを統合的に行い、よりシンプルで効率的な DNA ナノ構造体の応用が期待される。特に、本研究では、SNA(Slanted NanofilterArray)と呼ばれる微小量のサンプル中の生体分子をそのサイズ別に分離・濃縮するマイクロフューディクスの手法を用いることで、ターゲット分子と反応し、形状変化する DNA オリガミをサイズ分離し、センシングを行う新たなアプローチを提案する。</p>	
<p>又、このように既存のマイクロフューディクス分野の手法を DNA オリガミへ応用するためには、マイクロチャンネル中の DNA オリガミの流動の解析が必要になる。そこで、本研究では、機械的な機構を持つ DNA ナノ構造体のマイクロチャネル中の流動解析を剛体のブラウン運動力学のシミュレーションを用いて行い、それに基づいたマイクロ流体デバイスの持つ様々なパラメータの設計に取り組む。</p>	
<p>以上で記述したように、本研究の目標が達成できれば、DNA オリガミの技術とマイクロフューディクスの融合により、一つのチップ上で DNA オリガミとターゲット分子との相互作用のよりシンプルでより早いモニタリングが可能になると期待される。さらに、これによって、より多様な分野における DNA オリガミ技術の応用が加速化できると期待できる。</p>	
履修者 C (工学研究科 (航空宇宙工学))	
指導教員	藤本 健治 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	人間と機械が手をとりあう協働の実現のための制御手法の理論的検討
[プロジェクトの概要]	
<p>日本では現在少子高齢化社会が着々と進んでおり、工場での作業や農作業、物資の運送など、現在の日常を支える様々な場面で深刻な人手不足に陥る可能性がある。その解決策の一つとして人と機械とが手をとりあって協働する方法について制御理論の観点から検討を行う。本プロジェクトでは、指導教員の下での研究の遂行に加え、プロジェクトでの支援を活用して、建設業、Factory Automation、電機産業など、複数の産業界の方とワークショップや議論を行う場を設定し、理論的考察と社会での実現可能性について検討を進めていきたい。</p>	

履修者 D (工学研究科 (機械理工学))	
指導教員	榎木 哲夫 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	レジリエントな社会技術システムデザインのための安全解析
[プロジェクトの概要]	
<p>技術的、人的、社会的、管理上、組織上の要素の相互関係が複雑で動的に相互作用する社会技術システム (Socio-Technical Systems) を扱う学術分野として、レジリエンス・エンジニアリングの分野がある。本プロジェクトでは、京都大学工学研究科機械理工学専攻機械システム創成研究室 (榎木研究室) を中心に株式会社神戸製鋼所・有人宇宙システム株式会社の複数の企業との産学連携プロジェクトとして実施する。神戸製鋼所とはすでに共同研究契約を締結しており、青山学院大学の水山教授も加えた定期的会合を実施しており、この中で履修者 D は、鉄鋼生産の製造工程を模擬する離散事象システムモデルに基づいた物流シミュレータのためのモデル構築と、その上位層として機能間の相互作用により発生する混乱の発生やそれからの緩和を司るレベルでのシミュレーションを人間信頼性解析の手法を導入して実現している。さらに有人宇宙システム株式会社を定期的に訪問して企業技術者と協議を定期的に重ねてきており、航空・宇宙・自動車・鉄道・原子力・医療等のセーフティクリティカルシステムにおいて、要求定義段階から設計・製作・試験の各段階にわたって、開発者から独立な立場でチェックし機能要求の誤りを見つけだして、改善案を提供する手法の開発に取り組んでいる。</p>	
履修者 E (工学研究科 (建築学))	
指導教員	神吉 紀世子 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	跡形が集合的に形成する風景としての現代風景保全アプローチの開発
[プロジェクトの概要]	
<p>都市空間内には無数の物理空間的変更行為の「跡形」がある。多数の跡形が目立つことは都市の外観上の「調和」を乱すとして低評価されることが通例であった。しかし跡形の存在は都市空間の履歴を隠すことなく反映するものでもあり、風景の真実性とは何かを論じる上で再評価されるべきである。外観変更が発生しつつも真実性が認められ得るような風景保全の方法を獲得すべく、跡形の集積の中に過去から将来に及ぶ風景生成の仕組みを見出し、現代風景を評価するアプローチを得ることが本プロジェクトのねらいである。2007 年まで都市計画規制が比較的少なかった京都市伏見区中書島駅前商店街地域を研究対象地とし、跡形に着目し現在の風景に現れた地域形成史の調査と、一般来街者の風景認識及び地域形成史理解の評価実験を既に行ってきました。今後特に、店舗経営者、居住者、さらに多数ではないが一定数存在する中書島の現在風景を高く評価する有志の会合「中書島ファンミーティング」の参加者と研究組織をつくり、外観変更行為の発生元でもある研究組織メンバーの協力を得、住宅や店舗の空間に関して、さらには中書島の現代風景に関して彼らが有する評価構造を把握する。これと実際に集積している跡形の関係に着目し、地域内外で共通に評価され得る風景の特徴を見出し、その持続的な保全方法を提案する。プロジェクトの過程においては京都市のまちづくりアドバイザーにも逐次参加してもらうことで、より実践的な保全方法の提案を目指す。</p>	
履修者 F (情報学研究科)	
指導教員	黒橋 穎夫 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	知識に基づく構造的言語処理の確立と知識インフラの構築
[プロジェクトの概要]	
<p>テキストは、専門家によるデータの分析結果や解釈、ステークホルダーの批判・意見、種々の手続きやノウハウなどが表出されたものであり、人間の知識表現の根幹をなすものである。言語の計算機処理はウェブをはじめとする大規模テキストの活用によって長足の進歩を遂げつつあるが、本研究ではこれをさらに発展させ、知識に基づく頑健で高精度な構造的言語処理を実現し、これによって様々なテキストの横断的な関連付け、検索、比較を可能とする知識インフラを構築する。また、構築した注釈付与コーパス、辞書、言語解析システムの公開によって研究コミュニティによる一層の研究の加速を実現するとともに、これらの研究成果を企業のカスタマーセンター業務等の社会の実問題に適用し、その有用性を評価する。</p>	

履修者 G (情報学研究科)	
指導教員	黒橋 穎夫 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	Advanced NLP infrastructure for Japanese Language Learning
[プロジェクトの概要]	
<p>Language learning is time consuming. One of most time-consuming parts is learning vocabulary. Moreover, vocabulary learning should include the learning of correct word usage, which is more difficult. We propose to automatically extract high-quality example sentences, which contain enough context to guess the target word most of the times even if the target word would be omitted. We call such sentences representative of the target word.</p>	
<p>Additionally, we want to Improve infrastructure for Japanese language analysis using Juman-based segmentation standard which is closest to traditional grammars of Japanese. Finally, we want to improve automatic reading assignment for the Japanese text with this segmentation standard. The infrastructure would also be used by Kanji Ability Test Association.</p>	
履修者 H (情報学研究科)	
指導教員	黒田 知宏 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	Socio-Technical Design of Electronic Medical Record Systems
[プロジェクトの概要]	
<p>A common problem of modern clinics is the low level of usability and usefulness of Electronic Medical Record (EMR) systems. The aim of this research is to improve the usability and usefulness of EMR systems and integrate them better in the contexts where they are used. In this research, we view EMR systems as artifacts that have uses i.e., intended functions and roles i.e., unintended functions. The roles arise and evolve with time after the EMR system is implemented and used for a period of time and are usually unknown for the implementers. By understanding the different possible roles of EMR systems in their context of use, we can propose role-based redesign strategies. These proposed strategies will take into consideration the priorities and aspirations of the users regarding the roles of the EMR system. Furthermore, these strategies will describe strategic design targets that would lead to favorable cascade effects over the EMR system.</p>	
履修者 I (情報学研究科)	
指導教員	緒方 広明 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	Towards inclusive language learning environments: Understanding the learning experience of Syrian refugees using a ubiquitous informal language learning environment.
[プロジェクトの概要]	
<p>People are motivated to learn a new language for a variety of reasons: for work, as a hobby, for a new partner, etc. Many informal language learning applications support self-directed language learning and adapt to learners needs during their learning process. However, in the situation of refugees, learning a new language is an essential survival and integration tool as well as a cost in energy and time. Moreover, in some situations, learning the language of the new country may not seem like a priority for the refugees. Existing applications targeting or including refugees provide support to refugees in their early learning stages (beginners or children). However, learning a language is a long-term ongoing process. I propose to examine the experience of Syrian refugees having different levels of German while using a ubiquitous informal language learning environment.</p>	

履修者 J (情報学研究科)	
指導教員	石井 信 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	人間動作データから制御目的の学習
[プロジェクトの概要]	
<p>本プロジェクトでは、モーションキャプチャデータや動画情報等の人間動作データから、制御目的を学習するアルゴリズムの開発を行う。</p> <p>災害対応ロボット競技会(DARPA Robotics Challenge, 2015)は、福島第一原発事故をきっかけに行われた。こうしたロボットには、ドアの開閉や、不整地の走行、乗り物の乗降など、多様な動作を生成する能力が要求された。ロボットに多様な動作を生成するためには、動作パターン毎の制御目的を適切に設計する必要がある。しかし、この成否は、設計者の勘や経験に強く依存するため、設計者に多大な試行錯誤を要するという課題がある。本プロジェクトでは、この課題解決に取り組む。</p> <p>本プロジェクトの成果として、人型ロボットに代表される、汎用ロボットの活躍場面の拡大に向けて、必要とされる多様な動作生成の実現が期待できる。</p>	

[平成 29 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (教育学研究科)	
指導教員	齊藤 智 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	文脈情報がワーキングメモリに与える影響の心理学実験及び計算論的モデルによる検討
[プロジェクトの概要]	
<p>日常生活においては、単にものを覚えるだけでなく、何らかの作業をしながら、ものを覚えておく必要がある。このような場面で必要とされる記憶機能としてワーキングメモリが挙げられ、これまでワーキングメモリと様々な認知課題との関連が解明してきた。ところが、実際の社会的な活動の中では、我々はさまざまな作業を行い、その作業の内容は刻々と変化すると考えられる一方で、こうしたダイナミックな環境におけるワーキングメモリの働きは、これまでほとんど研究されてきていない。そこで、本プロジェクトは作業の内容が変化することが記憶成績に与える影響を検討する。この検討により、社会的な活動を含む日常生活における人の認知活動の特性を明らかにすることを目指す。</p>	
履修者 B (教育学研究科)	
指導教員	野村 理朗 (教育学研究科 准教授)
プロジェクト名	児童虐待のメカニズム解明に向けた心理・生理学的取り組み
[プロジェクトの概要]	
<p>児童虐待は子どもの心身の健全な発達に重篤ダメージを与え、死亡事例に至るケースも少なくない。日本においても児童虐待報告件数は年々増加しており、非常に重要度の高い社会問題の1つである(厚生労働省生労働省、2017)。児童虐待に関する取り組みは国内外において数多くあるものの、児童虐待が発生する心理・生理的機序に関する基礎的研究は必ずしも十分とはいえない。本プロジェクトでは、心理学だけでなく近接する他領域の分野の手法を包括的に利用し、児童虐待の発生に関わる学際的知見を得ることを目的とする。最終的には、その知見を他の様々な領域に還元し、児童虐待防止に向けた他分野融合型の取り組みを構築することを目指す。</p>	

履修者 C (工学研究科 (マイクロエンジニアリング))	
指導教員	松原 厚 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	工作機械使用環境のモデル化による加工性能の向上
[プロジェクトの概要]	
<p>工作機械において、熱変位は加工精度・加工効率を低下させる大きな要因である。工作機械に発生する幾何誤差のうち 7 割近くが熱変位によるものであるとされている。熱変位は機械要素や加工による発熱のほかに、工作機械の据付けられた環境の温度変化にも大きく影響される。現在の工作機械では熱変位の補正が行われている。しかし、温度環境の変化により、工作機械に発生する熱変位を機械上の補正により十分に抑制することは難しい。恒温室に機械を据付けることにより、温度環境の影響を予測しようという取り組みがなされている。しかし、環境温度分布の管理と工作機械自体の温度管理の両方を行い、工場全体の省エネを図るなどの取り組みは行われていない。そこで、工作機械にとって最適な工場全体の温度環境デザインを行う。</p>	
履修者 D (情報学研究科)	
指導教員	守屋 和幸 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	津波被害漁場における魚類の生息地利用の解明と漁業復興に関する研究
[プロジェクトの概要]	
<p>大地震や津波などの大規模な災害は予見が困難な上、被災地の人間社会・自然環境に多大な打撃を与える。特に水産業においては資源を有する漁場が破壊されることにより操業が困難になるため、その早期の回復が望まれる。本プロジェクトでは東日本大震災により被災した漁場が被った影響を学術的に解明する研究を背景とし、その成果は水産業復興に大きく貢献すると考えられる。また、現地の水産業に古くから関わる福島県水産試験場との協議によって問題・課題の明確化と解決法の模索を目指しており、デザイン学プログラムの目標とする取り組みを実践する。</p>	

[平成 28 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	食品リスク認知に関するリスクリテラシーのアセスメントと育成
[プロジェクトの概要]	
<p>現代は食品に対する安全・安心を求める声が大きく、食品のリスク（人の健康に悪影響を及ぼす可能性）に対応できる市民を育成することが求められる。本プロジェクトの目的は、(1) 食品リスク認知に関するリスクリテラシー（リスクに関わる科学的情報を理解する能力）を評価し、(2) リスクリテラシーを高める教育をデザインすることである。前者の目的を達成するため、本プロジェクトではリスクリテラシーの主要な構成要素であるニューメラシー（確率・統計を理解する能力）の日本語版尺度を作成する。また後者の目的のため、食品リスクの発生確率を理解するためのリスクリテラシー教育を行う。リスクリテラシー教育は、高大連携事業の一環であり、学生の主体性を引き出すためにアクティブラーニング形式で行う。本プロジェクトは、教育学・心理学・農学を専攻するメンバーによる学際的な研究である。</p>	

履修者 B (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	利他行動を促進する社会デザインの提案
[プロジェクトの概要]	
<p>利他行動・協力行動は円滑な社会生活に欠かせない人の営みである。また、日常のコミュニケーションだけでなく、途上国の貧困問題等の解決においても利他行動は重要な役割を果たしうる。こうした利他的なふるまいを促進する際に、利他的な人に与えられる評判情報が機能すると考えられる (e.g., Milinski, 2002)。本プロジェクトでは、利他行動に対してどのような評判が与えられるのか、評判を気にすることで人が利他的になるのはどのようなときかを調べる。その基礎的な知見をもとに、評判情報を活用することによって利他行動を促進する社会環境デザインの提案を目指す。</p>	
履修者 C (教育学研究科)	
指導教員	齊藤 智 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	系列順序表象の獲得と運用を支える発達メカニズムの検討
[プロジェクトの概要]	
<p>幼児期から児童期は、言語、行為、文字、数を自らのものとする重要な時期である。しかし、上記の各領域の関係は不明瞭であるだけでなく、各領域に困難を抱える子どもたちに対する教育方法も確立されていない。そこで、本プロジェクトは言語、行為、文字、数に共通する系列順序情報に着目する。特に、私たちは個々の順序情報を記憶するのではなく、より抽象的な系列表象を形成し、様々な状況で柔軟に運用することを可能にする発達メカニズムを明らかにすることを目的とする。本プロジェクトで得られた知見は教育実践に示唆を与えるだけでなく、各領域に困難を抱える子どもたちの障害像を発達的観点から見直すことも可能にする。なお、本プロジェクトは、上記の広範な領域を網羅できるように、各領域で世界最高峰の研究者と連携して研究を進める予定である。</p>	
履修者 D (教育学研究科)	
指導教員	野村 理朗 (教育学研究科 准教授)
プロジェクト名	瞑想を用いた医療従事者向けの燃え尽き防止プログラムのデザイン
[プロジェクトの概要]	
<p>現在、医療従事者などの燃え尽きが問題となっている。この問題に対応して、米国の Mind & Life Institute のボードメンバーであり禅の指導者でもある Joan Halifax は、医療者・瞑想指導者・認知神経科学者を中心としたメンバーによって、瞑想を用いた医療従事者向けの燃え尽き防止プログラム (GRACE) を開発し、米国を中心に運用している。</p>	
<p>Joan Halifax の呼びかけにより、日本でも、2015 年度に Being With Dying 研究会が発足し、日本の医療者・瞑想指導者・神経科学者を中心としたメンバーによって日本版 GRACE を開発中である。</p>	
<p>特に医療従事者向けに、仏教由来のメンタルトレーニングを提供するためには、認知神経科学の観点からメカニズムを解明するとともに、科学的に説明することが決定的に重要である。そこで、本プロジェクトでは、①fMRI を用いて瞑想の神経基盤を解明すること、②それらの知見を踏まえて、医療者や瞑想指導者とともに科学的なメンタルトレーニングを開発すること、③医療従事者向けに適切に伝達するためのワークショップをデザインすることを目的とする。</p>	

履修者 E (工学研究科 (機械理工学))	
指導教員	榎木 哲夫 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	ドライバと自動化による協調運転のデザイン (Design of Driver-Automation Co-Agency)
[プロジェクトの概要]	
<p>ドライバ（人）とクルマ（機械）が「自然」な形で協調できるシステムを実現するうえでデザインに求められる視点と課題抽出を目的に、京都大学工学研究科機械理工学専攻機械システム創成学研究室（榎木研究室）を中心に自動車メーカ・電機・情報通信企業の複数の企業との産学連携プロジェクトとして実施する。特に、人と自動化の間での「適応的機能配分」の課題や、人または自動化のいずれかが行っていたタスクを適当な時点で他方に譲り渡す「権限委譲」の課題をはじめ、ドライバの状況認識や心理学的側面、さらに社会の人々に心から受け入れられる自動運転の実現に向けた技術的課題と法制度のあり方を含めた幅広い未解決課題について取り組む。</p>	
履修者 F (工学研究科 (機械理工学))	
指導教員	小森 雅晴 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	全方向移動ロボットの機構の解析と総合
[プロジェクトの概要]	
<p>工場や倉庫での搬送作業は移動ロボットによる支援・代替が進められている。しかし、従来の機構は人のように高度な移動を行うことができず、適応可能な作業や環境が限られていた。そこで本プロジェクトでは、任意の方向に移動可能な全方向移動ロボットの研究を行う。種々の全方向移動ロボットを統一的に扱える理論を構築し、用途に適した機構を設計するための方法論を整備する。特に有用性の高い機構のプロトタイプを製作し、実験により実環境での振る舞いの調査を行う。提案する全方向移動ロボットは、高齢者用の移動装置やコンパクトシティにおける高効率な移動手段など様々なに応用できる。</p>	
<p>本プロジェクトの進行に際し、外部の企業である一志株式会社から機械の設計等の技術について現場視点でのアドバイスを受ける準備が整っている。</p>	
履修者 G (工学研究科 (建築学))	
指導教員	神吉 紀世子 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	大都市圏周辺地域の居住エリアにおけるスマートシェーリングモデルの構築－大阪府茨木市における立地適正化計画を通して－
[プロジェクトの概要]	
<p>人口減少社会に移行しつつある現在、大都市圏周辺地域の居住エリアでは、住民の生活環境を維持できるように、地域の実情に合わせて低密度化を図るスマートシェーリングモデルが模索されている。そのような社会的背景から、大都市圏周辺地域として代表的な大阪府茨木市を事例として、スマートシェーリングモデルを構築することが、本プロジェクトの目的である。そのために、昨年度は、茨木市に実在する工場跡地をケーススタディとしたアーバンデザインセミナーの実施に参画して、居住エリアのモデルを構築した。昨年度の成果を踏まえて、本年度からは、都市全体の観点から居住エリアのスマートシェーリングモデルを構築するため、茨木市立地適正化計画の策定に関わっている。具体的には、本年度、各居住エリアの実情を把握するために、茨木市民 3000 人を対象としたアンケートを実施している。その結果を踏まえて、来年度はスマートシェーリングモデルの構築に向けた市民ワークショップ等を実施する予定である。</p>	

履修者 H (情報学研究科)	
指導教員	石田 亨 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	Research on Multilingual Environment for Collaborative Ideation

[プロジェクトの概要]

Now a day, people from different country usually learn English or a shared language to collaborate. In this case, people with low shared language skill might not be able to contribute as much as it should be due to language barrier. This leads to inequality of chance to understand and speak up. In this project, we would like to create a supporting environment for multilingual collaboration based on the idea that people can communicate better, smoother, with better understanding, regardless their level of shared language skill. This project deals with collaboration problems with technology, including machine translation. However, not only information science, but also social science could be our tool to the solution we are looking for by taking the different cultural and language background into account.

[平成 27 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (情報学研究科)	
指導教員	吉川 正俊 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	文化的視座からの新たなサービスデザイン方法論の検討

[プロジェクトの概要]

人々のニーズや抱える問題が複雑化する現代社会において、その充足や解決だけに焦点を合わせた新規サービスや商品の開発は限界を迎える。一方で、それを乗り越えるような方法論や視座の提供はなされていない。この先の社会をデザインしていく上で、その基盤となるような方法論の確立は、企業の経済活動に留まらず、社会的な意義の高い案件である。本プロジェクトでは、履修者の研究の一貫したテーマである、サービスの文化性を切り口とした新規サービスデザイン方法論の確立を目指す。具体的には自身の研究やこれまで実施してきた企業との共同研究から得られた知見を元に、本プロジェクトにてさらなる議論、実践を重ね、「文化の構築」という視点から、サービス創出方法に新たな理論基盤を与えることを目指す。

履修者 B (情報学研究科)	
指導教員	黒橋 祐夫 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	知識に基づく構造的言語処理の確立と知識インフラの構築

[プロジェクトの概要]

テキストは、専門家によるデータ分析結果や解釈、ステークホルダーの批判・意見など、人間の知識表現の根幹をなしている。しかし膨大な知識が蓄積され、科学技術や社会構造が複雑化した現代では、専門家ですら関連する情報を網羅的に把握することが困難な状況が生まれている。本プロジェクトは、大規模言語資源に基づく言語処理、Web 情報分析、形式意味論・意味解析の理論研究を融合することにより、知識に基づく頑健で高精度な構造的言語処理を実現し、これによって様々なテキストの横断的な関連付け、検索、比較を可能とする知識インフラを構築する。工学的な観点に加え、認知心理学的な観点からもシステムの評価を行い、よりユーザ目線のシステム設計を目指す。また、構築したコーパスや辞書、言語解析システムを、不満買取センターなど企業のカスタマーセンター業務等の社会の実問題に適用し、その解決に役立てることを目標とする。

3 イベント

3.1 サマーデザインスクール 2018

日程：2018年9月12日（水）～14日（金）

場所：京都リサーチパーク アトリウム

主催：京都大学デザイン学大学院連携プログラム／京都大学大学院情報学研究科／京都大学経営管理大学院／デザインイノベーションコンソーシアム

共催：京都大学大学院工学研究科／京都大学大学院教育学研究科／京都大学学術情報メディアセンター／京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科／京都工芸繊維大学 工芸科学研究科

サマーデザインスクールは、京都大学の枠を越え、産業界、自治体、そして国内外の他大学から様々な分野の専門家や学生が集う3日間の集中ワークショップである。2011年の開始以来成長を続けてきたイベントであるが、博士課程教育リーディングプログラムの補助金が2018年度末で終了することに伴い、京都大学デザイン学大学院連携プログラムおよび参画専攻が中心となる現在の体制での実施は今回で最後となることが、サマーデザインスクール運営委員会で決定された。

運営は昨年までと同様、主に主共催団体からワークショップのテーマを募り、産学官から持ち込まれた23のテーマについて参加者募集を行った（表3-2）。ワークショップの実施スケジュールも例年と変わらず、1日目、2日目はテーマ毎に異なるプログラムに取り組んだ。全体でのオープニング後さっそくフィールドワークに飛び出すグループ、レクチャーやディスカッションを通してじっくりアイデアをまとめるグループ、プロトタイピングで実際にものを作るグループなど、多様なアプローチでそれぞれの課題解決に取り組んだ。最終日には各テーマが3日間の成果をまとめたポスター発表を行い、互いにアイデアを披露し議論を交わした。クロージング後の交流会では、様々なバックグラウンドを持つ他の参加者から大いに刺激を受けたという声や、現在の形での開催が今回で最後となることを惜しむ声が多く聞かれた。

表3-1 参加者・テーマ実施者・見学者数とその内訳

	参加者		テーマ実施者		見学者
大学職員	3 大学	6名	5 大学	24名	
	うち京大	4名		15名	
学生	8 大学	87名	0 大学	0名	
	うち京大	74名		0名	
企業	18 社	25名	22 社	66名	
行政	0 機関	0名	2 機関	4名	
その他	1 組織	1名	1 組織	2名	
合計		119名		96名	36名

表 3-2 実施テーマ一覧

1. 絵本教材「じんこうぶつのぼうけん」をデザインする	12. 伝統産業のデジタルトランスフォーメーション
2. 「恋に落ちる」をデザインする	13. 制約から生まれる新しいデザイン
3. 2030 年の京都大学を「ロジカル」にデザインする	14. 五感に訴えるモーメントのデザイン
4. 人類未踏領域を開拓せよ！	15. ～マイクロインテラクションから考える京都の観光～
5. これから就職する人たちとデザインする働き方改革	16. 続・京都でのユニバーサルデザインを考える
6. 京のマチナカに創るクイック＆スポット・ワークプレイスのデザイン ～10 Minutes Workplace～	17. 移動したくなるモビリティのデザイン
7. 人にやさしい鉄道車両メンテナンス	18. “イヌ” ベーション ～犬の目線で考える、犬のためのサービスデザイン
8. 心の病を抱える患者とその家族、そして地域社会の幸せをデザインする！	19. 「ロボットのいる街角」の将来像
9. 君たちはどう（一日を）生きるか～データからライフスタイルを眺めてみる～	20. デザインにおける集団と個人について
10. Industry 4.x - 「1/70 億の欲しい」をデザインする～	21. 通信販売を不便にしてみる
11. 先端テクノロジーによって、企業の顧客への「おもてなし」は、どのように進化しうるか？	22. 日本人の「たしなみ」をリ・デザインする
	23. 浮遊するモノのデザイナー感性と法則を用いたデザイナー
	24. 「電力の地産地消」をデザインする



会場全景



ディスカッション



プロトタイピング



ポスター発表

3.2 スプリングデザインスクール 2019

2019年3月19日から20日の2日間、2018年度のスプリングデザインスクールを、京都大学吉田キャンパスにおいて実施する。本年度のスプリングデザインスクールの構成は次の通りである。

(1) 国際デザインシンポジウム 2019

(2) デザインスクール全学生・修了生ミーティング

国際デザインシンポジウム 2019 は公開イベントとし、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、講演会を中心としたシンポジウムとした。デザインスクール全学生・修了生ミーティングは、非公開イベントとし、デザインスクールの履修生および修了生を対象として、履修生らのネットワーキングを目的としたイベント構成とした。なお、国際デザインシンポジウムの一部に履修生による研究発表フラッシュトークを組み込み、デザイン学プログラムの成果の一部として公開する。

3.2.1 国際デザインシンポジウム

2018年度の国際デザインシンポジウムは、6年間にわたる京都大学におけるデザイン学教育プログラムについての取り組みとその成果について、経緯と現状および課題と将来展望について論じ、デザイン学履修生による研究を概観することを目的とした。外部講師をお招きし、デザイン学専門家による産学での活躍の体験事例を紹介いただき、未来に向けてのデザイン学カリキュラムの展開を、教育科学の観点から解説いただく。

シンポジウムの概要は以下の通りである。

テーマ	デザイン学プログラムの経緯と展開
日時	2019年3月19日（火）13:00-17:00
場所	京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール I, II
主催	・京都大学デザイン学大学院連携プログラム ・デザインイノベーションコンソーシアム
共催	・京都大学大学院情報学研究科　　・京都大学大学院工学研究科 ・京都大学経営管理大学院　　・京都大学大学院教育学研究科
招待講演	“Bringing Human-Centered Design to Life in Industry” Daniel Fallman (Expert Principal, Innovation, Bain & Company) 概要：In this talk, I will first share some of my experiences, thoughts, and points of views around leaving an academic setting to pursue a career in industry. What are some of the similarities and differences? Why would one want to leave academia for industry? How does industry receive and treat academics? Second, and more specifically related to human-centered design, what is the state of the art in industry and how can experiences and learnings from academia be brought to life and come to have a strong impact in various industry settings, whether one is working in-house, for agencies, doing startups, or with consulting? 「アート遊び、アートで学ぶ：アート体験の導入による学習の深化 (Engagement with Art and Learning through Art SPEAKER)」 岡田 猛（東京大学大学院教育学研究科 教授） 概要：アーティストの創作プロセスや熟達化に関する理論的、実証的研究やアートワークショップや芸術授業における実践研究の成果を紹介しながら、大学やミュージアムなどの学習の場において、アート体験（アートの創造や鑑賞）を通して学ぶことの意義や効果についてご講演。

講演は日本語または英語とし、日本語講演の場合には、スライドに英語表現を取り入れることで、留学生等の参加者に配慮している。

以下にプログラムを示す。

International Design Symposium in Kyoto 2019

Date: March 19, 2019 (Tuesday)

Place: Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University

Program:

12:30-13:00 Registration

13:00-14:05 Part 1

Cooperative Graduate Program in Design: The Status Quo

デザイン学プログラムの経緯と現状

Toru Ishida (Professor, Kyoto University / Program Coordinator, Collaborative Graduate Program in Design, Kyoto University)

The Future and Visions of the Cooperative Graduate Program in Design

デザイン学プログラムの展開と展望

Tetsuo Sawaragi (Professor, Kyoto University / Program Planning Director, Collaborative Graduate Program in Design, Kyoto University)

Design Research Showcase

デザイン学リサーチショーケース

Students in the Kyoto University Design School

14:10-14:15 Short Break

14:15-15:15 Part 2

Bringing Human-Centered Design to Life in Industry

Daniel Fallman (Expert Principal, Innovation, Bain & Company)

15:25-15:45 Coffee Break

15:45-16:55 Part 3

Engagement with Art and Learning through Art

アートを遊び、アートで学ぶ：アート体験の導入による学習の深化

Takeshi Okada (Professor, Department of Education, University of Tokyo)

16:55-17:00 Conclusion

17:10-18:30 Related event: Session on Students' Individual Research

18:30-20:00 Banquet

3.2.2 デザインスクール全学生・修了生ミーティング

「1.9 履修者のネットワーキング」で述べたように、今年度は履修者間の人的ネットワークに注力している。そこで本年度の最後に、スプリングデザインスクール内で、このようなネットワーク醸成の集大成として、またこれまで 6 年間のプログラムの活動の総括的目的として、以下のようなイベントを行なう。イベントには 2018 年の春の修了生（1 期生）や、本科に進みながら諸事情で履修を中途終了した元履修生にも声をかけ、デザインスクールの新旧履修生が一堂に会する貴重な機会となる。

[概要]

デザインスクール全学生・修了生ミーティング (Year-End Meetings for Students and Graduates of Design School)	
日程	2019 年 3 月 19 日（火）、20 日（水）
場所	3 月 19 日：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール 3 月 20 日：京都大学デザインファブリケーション拠点
体制	実行委員長：北 雄介（デザイン学リーディング大学院） 副実行委員長：川上浩司（情報学研究科知能情報学専攻）
参加者	履修者 36 名（L5 : 10、L4 : 7、L3 : 6、L2 : 5、L1 : 8） 修了生・中途履修終了者 7 名 教職員 4 名（運営・オブザーバーとして） ※本稿執筆時には未開催のため、予定数

[プログラム]

3 月 19 日（火）@京都大学時計台記念館 国際交流ホール	
Session 1 13:30～14:05	デザイン学リサーチショーケース ※「国際デザインシンポジウム」の一部として実施 履修生の行なってきた研究を、各自がスライドを使って簡単にプレゼンテーションする。次の Part 2 でいろいろな意見をいただくための、フラッシュトークとなる。
Session 2 17:00～18:30	個人研究セッション 他の履修生・修了生や、教員、国際デザインシンポジウムの招待者などに向けて、ポスターを使って、個々の研究をプレゼンテーションする。それぞれ研究分野が異なるデザイン学履修生が互いの研究を紹介しあい、相互に研究交流を図るとともに、自分の研究や専門性のデザイン学における位置づけを確認し、考える機会である。教員からのフィードバックも行なう。
3 月 20 日（水）@京都大学デザインファブリケーション拠点	
Session 3 13:00～17:00	連携活動セッション デザインスクールにおける分野を越えた連携活動のこれまでとこれからについて、議論を行なう。2 日目は 1 日目と違って、ほぼ学生・修了生だけのミーティングとし、思いの丈を遠慮なく語り合う。 13:00 オープニング 13:10 各学年グループからのトーク 15:10 コーヒーブレイク 15:30 トークで挙げられたテーマについて、テーブルに分かれて議論 16:40 共有と総括
Session 4 18:00～	ポットラックパーティ 最後は懇親会でさらに交流を深める。現在学年ごとに実施している持ち寄り会の集大成として、各学年が料理を準備する。

3.3 デザインワークショップ

Design Shelter in Okutama Learning from Wood Joints

日時：2018年4月13日（金）9:00～18:00

場所：京都大学デザインファブリケーション拠点

Presentor and Coordinator : Katinka Temme (Augsburg University of Applied Sciences)

Christian Peter (Augsburg University of Applied Sciences)

Kentaro Takeguchi (Alphaville Architects)

Asako Yamamoto (Alphaville Architects)

Yosuke Komiya (Kyoto University)

プログラム：09:00-10:00 Warm-up Lectures

10:10-12:00 Design Wood Joints

12:00-13:00 Lunch Break

13:00-16:00 Design Shelter based on the Wood Joints

16:10-18:00 Presentaion and Critic

参加者：アウグスブルク大学：教員2名 学生12名、京都大学：教員4名 学生7名

日本は伝統的に金物を使わない継手・仕口といった技術を発展させ、木造の建築そしてそれによってできた街を引き継いできた。今回のワークショップでは木造の伝統的な継手・仕口について基礎を学んだ上で、これを応用した木造ジョイントを考案・模型作成した。そのうえでこのジョイントを使った架構によっておおわれたシェルターをデザイン、発表した。

まずはアウグスブルク大学のカティンカ先生・クリスティアン先生から敷地である奥多摩の自然について説明を受けた。続いて、アルファヴィル一級建築士事務所の竹口健太郎先生・山本麻子先生、京都大学の小見山陽介先生から、日本の伝統的な継ぎ手・仕口と、それらを意識した自身の建築作品についてレクチャーがあった。アウグスブルク大学と京都大学の混成チームは、3箇所のテーブルに分かれて早速アイデアを交わした。午前中は各チームが新しい継手・仕口をデザインし、レーザーカッターでプロトタイピング。昼食を挟んで、午後はその継手・仕口を使った空間を模型や絵で表現した。講評会には、木村俊明先生、神吉紀世子先生も駆けつけてくださり、3チームそれぞれの提案に対してじっくり意見を交わした。ワークショップには情報学を専攻する学生も参加しており、率先して提案内容を説明する場面も。建築は専門外ながらも短い時間で貴重な経験ができたようであった。



TDS+KDS International Workshop at Kyoto University : Designing KYOTO: Planning Human Environment

日時：2018年4月9日（月）～16日（月）

場所：京都大学総合9号館／北大路ハウス

ファシリテータ：Siwaporn Klinmalai, Supanut Dejnirattisai (Thammasat University)

Kiyoko Kanki, Akihisa Hirata, Sei Takeyama (Kyoto University)

Tomohiro Hata, Shigenori Uoya (Guest facilitator / Architect)

2018年4月9～16日にわたりタマサート大学デザインスクール（TDS）・京都大学デザインスクール（KDS）共同の国際ワークショップを、京都大学において開催した。TDSからは、学生8名、教員2名（Siwaporn Klinmalai先生（TDSスクール長補佐・講師・博士（京大）、Supanut Dejnirattisai先生（ランドスケーププログラム主査））が来日した。KDSからは参加学生12名（本科1名、予科1名）、教員4名（デザイン学3名、他1名）、ゲスト講師として魚谷繁礼氏（建築家・京都大学建築学専攻非常勤講師）が参加した。

8日に、Introductionミーティング、中小路先生の講義「デザイン構成論」に参加、10日に、京都市内・西陣地区のOI実習1、2の対象地調査（デザイン学修了生太田裕通助教が案内）、平田晃久研究室設計による「北大路ハウス」を訪問調査。11日は魚谷繁礼氏により東山区・下京区の市街地と建築物再生プログラムの実地見学。12日は3グループにわかれ、グループのワークテーマの確定を、吉田哲先生の指導のもとに行う。13～15日はグループワーク、16日は「北大路ハウス」にてプレゼンテーションとジュリー、の進行で開催され、ジュリーは平田晃久・魚谷繁礼・神吉紀世子・Siwaporn Klinmalai・Supanut Dejnirattisaiの5名に加え、アルファ・ヴィルの竹口健太郎氏も来場参加された。

3つの学生グループは、それぞれ市街地としての特徴をもつまとった建築群を抽出し、空間性の継承と新たな文化活動の誕生の可能性に関するリノベーション案を設計した。国際的にも評価が高い日本の建築家がかかわる建築教育ではコンピューターを用いたデザインだけではなく、手作業の模型スタディやスケッチスタディも重視しておりこまやかな検討を行うデザイン方法はTDSの学生には大きな影響を与えたとのTDS側の教員からの指摘があった。京都の市街地の特色を見出す着眼点は、TDS・KDSともに共通する部分が強くみられ、歴史都市京都をテーマにすることが国際的な着眼点でデザインワークショップを行う上で重要な対象となることも評価された。

タイ国でも歴史都市バンコクあるいはアユタヤ等の市街地や環境のデザインはデザインスクールの重要テーマの1つであり、次回にはタマサート大学がホストとなって共同ワークショップを開催したいとの話し合いも行いつつ終了した。



Design. A Creation Story for the Anthropocene / 米国でデザイン思考を実践するデザイナを囲む 90 分

日時：2018年4月26日（木）14:45～16:15

場所：京都大学デザインファブリケーション拠点

講演者：Mr. Neil Goldberg (Design researcher, Product designer, Innovation consultant, Entrepreneur and Educator)

参加者：6人（内デザイン学本科生2人）

話題提供者のNeil Goldberg氏は、シリコンバレーを拠点に、デザイン研究家、プロダクトデザイナ、イノベーションコンサルタント、起業家、そして教育者といういくつもの顔を持つ。話題は、欧州での大手デザインファームに在籍していた時の家具デザインから、現在手がけているプロダクトデザイン、そしてサービスデザインとして今日ではシェアリングオフィスという名で知られる方に至るまで、様々な分野における同氏のデザインが紹介された。また、それら広範な領域のデザインに通底する思想、あるいはデザインとは何かを理解する枠組みとして、デザインコンシャスネスと名付けられた概念が説明された。後半30分の質疑では、この難解で既存の概念とは境界線の異なる概念を平易な言葉で記述することが参加者全員で試みられた。

学生ワークショップ「景観資源としてのタテカンを考える」

日時：2018年7月30日（月）13:00-18:00

場所：京都大学デザインファブリケーション拠点

ゲスト講師：池田 剛介先生（アーティスト）

　　大庭 哲治先生（京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻 助教）

　　椿 昇先生（京都造形芸術大学 教授）

　　富家 大器先生（四天王寺大学・短期大学部生活ナビゲーション学科
　　ライフデザイン専攻 助教）

　　藤井 聰先生（京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻 教授）

　　藤本 英子先生（京都市立芸術大学美術学部美術研究科 教授）

参加者：学生11名（物理工学科2回生1名、大学院文学研究科1名、大学院工学研究科修士課程9名）、教員・講師7名

京都大学吉田キャンパス周辺に長年設置されてきた立看板（タテカン）は、京大の文化として親しまれていたが、市の景観条例違反であり、また歩行者に危害が及ぶ可能性があるという指摘を受け、2018年5月1日に大学当局により撤去された。この企画ではタテカンの撤去騒動を受け、京都大学の立看板（タテカン）を景観資源として考える、学生ワークショップを実施した。

本企画にあたり、市の委員として活動されている方や芸術家の方など、6名の多様な先生方にアドバイザー講師として参加していただき、学生と講師が2組に分かれて、問題共有・ディスカッション・制作・プレゼンテーションを行った。タテカンが京都大学の文化として、あるいは京都の景観として認められるために、どのようなデザインや制度が考えられるかを提案した。

問題共有やディスカッションでは、講師の方々への事前インタビューをもとにタテカンに関する条例や取り組みを共有し、各自それぞれの視点からタテカンの景観的・歴史的価値

や問題を捉え、どのように存続できるのかを議論した。

プレゼンテーションでは、グループごとの提案をパネルやスライドにまとめ発表した。最後に講師の方々から発表に対するコメントや講評をいただいた。

理系と文系、あるいは講師と学生が分野を横断して問題共有から提案までを行うことで、新たなデザイン思考を得ることができた。タテカン問題について学生・大学・地域・行政が対立するのではなく、安全性や景観条例を正しく理解し、魅力的なビジョンや制度を掲げた話し合いをすることが、互いに調和するために必要だと考えられた。



ディスカッション



プレゼンテーション

Designing Structures with Graphic Statics／絵を描くように構造をデザインする！

日時：2018年8月29日（水）、30日（木）10:00～17:00

場所：京都大学 デザインファブリケーション拠点他

講師：ポール・マイクール氏（MIT Digital Structures）

プログラム：

8/29 10:00-17:00	8/30 10:00-17:00
【デザインファブリケーション拠点にて】 ポール講師の研究紹介レクチャー 「木製梁の構造最適化とデジタルファブリケーション」 【製図室にて】 鉛筆と紙でグラフィック・スタティックスを体験	【コンピュータ室にて】 コンピュータ上で構造デザインを実践 【デザインファブリケーション拠点にて】 構造模型を作製し、結果を体感 ゲスト講師：平川 富実雄（24d-studio）

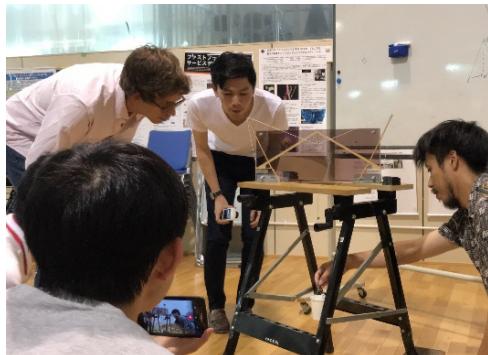
企画・進行：小見山陽介（京都大学建築学専攻 助教）

木村 俊明（京都大学建築学専攻 助教）

参加者：14名（内訳：学生9名（京都大学工学部4回生5名、京都大学大学院工学研究科修士課程3名、名古屋大学大学院環境学研究科修士課程1名）、教員2名（小見山陽介、木村俊明）、社会人3名（広島工業大学と京都精華大学から参加した教員を含む））

初日はポールさんからグラフィック・スタティックスが紹介され、MITでポールさんが授業に使っているワークシートを用いた演習が行われた。グラフィック・スタティックスは、構造力学の図式解法であり、数式を用いず、意匠設計者でも絵を描くように構造物の力の流れが把握できる手法であり、意匠と構造が協働するためのツールとしてスイスやアメリカで教えられているものだそうである。

2日目はワークショップの参加者を、意匠と構造それぞれの分野からバランスよく混ぜて計3つのチームをつくり、アーチ(圧縮)、ケーブル(引張)、トラス(圧縮・引張)から一つを選んで大スパン構造物をデザインする実習が行われた。各班は提案を模型化し、最後に載荷実験を行って構造物が壊れる様子を観察し、意図した通りに力の流れをデザインできているかを確認した。



載荷実験の様子



ワークショップ参加者たちと記念撮影

3.4 デザインエキシビション

西陣ベースメント TRIAL ‘CLASS’ (平成30年度学校跡地活用委員会 元西陣小活用実験)

日時：2018年11月17日（土）・18日（日）10:00～17:00

場所：元西陣小学校 教室棟1F教室（京都市上京区神立壳通堀川西入幸在町689）

企画・運営：山口 直人（京都大学工学研究科建築学専攻 D2（デザイン学履修生）

太田 裕通（京都大学工学研究科建築学専攻 助教（デザイン学修了生））

参加者：150名程度（内デザイン学本科生3名）

本イベントは、平成28年度から続く元西陣小学校活用実験イベント「西陣ベースメントTRIAL」の第4弾である。「西陣ベースメントTRIAL ‘CLASS’」と題し、教室棟のマルチ活用をコンセプトに、学びをテーマとして1階5部屋で企画を行った。学校跡地活用委員会の成果展示・元西陣小学校のオープンデイとしての位置づけに加え、今回は各企画の実施を上京区の若手実践者にお願いし、異なる活用が同時に開催される状態を目指した。

「学び教室」ではユニークな授業が行われ幅広い方々が訪れた。「言葉の教室」では言葉を使ったワークショップや体験型ギャラリーが開かれ、大人や大学生を中心に楽しんでいた。「こども教室」では親子向け製作ワークショップが行われ、いきいきとした子どもの声が響いていた。子どもを預け他の教室を見る大人の姿もあった。「演劇教室」では演劇づくりWSが行われ、他企画の参加者も集めての発表会が開かれた。「教室カフェ」は学校跡地活用委員会の成果展示を行うカフェであり、他の跡地活用の最新の動向も踏まえつつ元西陣小学校の将来を自由に語り合う場となった。

また当日は、教室棟内の別の部屋や木造本館、グラウンドの地域住民利用もあり、地域住民の普段利用と教室棟利活用が共存する空間体験が想像度高く行われた。

学区外・京都市外の企画参加者が多く、賑やかに利活用される様子を実現でき、更に企画者の方々から空間的・広報的課題も指摘いただけ充実したイベントとなった。



学び教室



こども教室



教室カフェ



演劇教室

西陣ベースメント TRIAL CLASS

平成 30 年度学校跡地活用委員会 元西陣小活用実験
活用実験第 4 弾!!

元西陣小学校の教室を
さまざまに
使ってみる
実験企画第 4 弾!

会場 | 元西陣小学校・教室棟 1 階 (裏面に地下鉄駅)
時間 | 10:00 - 17:00
入場無料

2018.11.17 | 土 | - 11.18 | 日 | 詳しくは裏面へ→

主催 | 京都大学デザイン学大学院連携プログラム
共催 | 西陣地域住民福祉協議会 学校跡地活用委員会
企画・運営 | 京都大学実行委員会

時間割 キーンコーン カーテンコーン				
教室カフェ	子ども教室	学び教室	演劇教室	言葉の教室
10:00-11:00 「学校跡地活用委員会の成果展示+「語るカフェ」」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	10:00-11:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	10:00-11:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 11:00-12:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	10:00-11:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 11:00-12:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	10:00-11:00 「言葉のレーニング」 主催:なごみオフィス 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★300円 11:00-12:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)
11:00-12:00 「学校跡地活用委員会の成果展示+「語るカフェ」」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	11:00-12:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	11:00-12:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 12:00-13:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	11:00-12:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 12:00-13:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	11:00-12:00 「言葉のレーニング」 主催:なごみオフィス 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★300円 12:00-13:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)
12:00-13:00 「学校跡地活用委員会の成果展示+「語るカフェ」」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	12:00-13:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	12:00-13:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 13:00-14:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	12:00-13:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 13:00-14:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	12:00-13:00 「言葉のレーニング」 主催:なごみオフィス 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★300円 13:00-14:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)
13:00-14:00 「学校跡地活用委員会の成果展示+「語るカafe」」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	13:00-14:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	13:00-14:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 14:00-15:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	13:00-14:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 14:00-15:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	13:00-14:00 「言葉のレーニング」 主催:なごみオフィス 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★300円 14:00-15:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)
14:00-15:00 「学校跡地活用委員会の成果展示+「語るカafe」」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	14:00-15:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	14:00-15:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 15:00-16:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	14:00-15:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 15:00-16:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	14:00-15:00 「言葉のレーニング」 主催:なごみオフィス 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★300円 15:00-16:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)
15:00-16:00 「学校跡地活用委員会の成果展示+「語るカafe」」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	15:00-16:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	15:00-16:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 16:00-17:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	15:00-16:00 「上空あやかし講習」 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★500円 16:00-17:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)	15:00-16:00 「言葉のレーニング」 主催:なごみオフィス 講師:立石葉子丸(植村直子先生)★300円 16:00-17:00 「おとぎの西陣の夜空をつくろう!」 リーダー:山口直人(京大) +田中直也(西陣地域住民福祉協議会) 内閣府:京都大学実行委員会(代表:大庭道隆)

元西陣小活用実験！5つの教室で様々な CLASS を実施！！

*印に関しては材料費・資料費等別途必要になります！

<注意> メール申込の際は、参加者のお名前、ご連絡先(電話番号)を記入してください！>

ABOUT

「西陣ベースメント TRIAL CLASS」は元西陣小学校舎の活用ビジョンを展示・研究する実験イベントの第4弾です。平成 27 年度の跡地活用委員会にて実現した「西陣ベースメント」構想を元にし、今日は西陣地域を中心で活動する気の方々と協力してモザイクの活用のあり方を実験します！

お問い合わせ先 | e-mail: archi.kyoto-u.ac.jp (大庭祐輔・京都大学)
公式 Twitter | @nishihibit_base

ACCESS

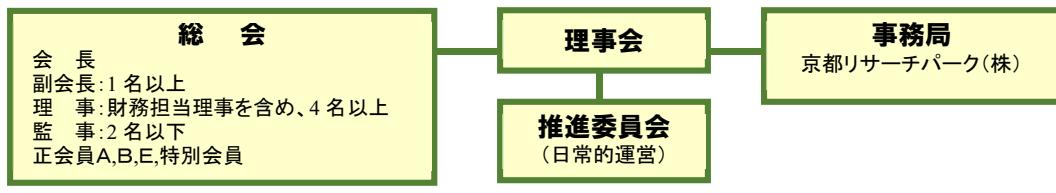


4 デザインイノベーションコンソーシアム

4.1 概要

本プログラムは、デザイン学を基礎に異分野の専門家と協働しながら、社会の実問題に取り組み、社会のシステムやアーキテクチャをデザインできる優れた人材を養成することを目指している。このような人材育成を、本プログラムを核とした密接かつ柔軟な産学官連携により推進するため、平成26年3月に産学官の組織で構成されたデザインイノベーションコンソーシアムが設立された。本コンソーシアムの組織、および現在の役員は以下に示すとおりである。

会長	門内 輝行	大阪芸術大学芸術学部建築学科 教授／京都大学 名誉教授（新任）
副会長	三浦 智康	株式会社野村総合研究所 理事（新任）
理事	守倉 正博 岩井 良行 川添 雄彦 黒橋 祢夫 樋木 哲夫 白井 博志 田中 健一 恒川 哲也 藤嶋 誠 牧 紀男 宮田喜一郎 松原 厚 徳賀 芳弘 大竹 伸一 山西健一郎	京都大学大学院情報学研究科通信情報システム専攻 教授 パナソニック株式会社 執行役員 エコソリューションズ社 副社長 日本電信電話株式会社サービスイノベーション総合研究所 所長 京都大学大学院情報学研究科知能情報学専攻 教授 京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻 教授 株式会社博報堂 常務執行役員 関西支社長（新任） 三菱電機株式会社 役員技監 東レ株式会社 常務取締役 研究本部長 基礎研究センター所長 DMG森精機株式会社 専務執行役員（新任） 京都大学防災研究所都市防災計画分野 教授 オムロン株式会社 代表取締役執行役員専務 CTO 兼技術・知財本部長 京都大学大学院工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授（新任） 京都大学経営管理大学院 教授 西日本電信電話株式会社 相談役 三菱電機株式会社 特別顧問（新任）
財務担当理事		
監事		
顧問		



デザインイノベーションコンソーシアムの組織

2018年5月開催の通常総会において、コンソーシアムの存続期間と会員種別に関する決議がなされた。存続期間については、本プログラムの補助金の終了に合わせて、当初2019年3月末までと規定されていた。しかし、設立から4年を経て約70会員まで規模が拡大し、経済的にも概ね自立していることから、補助金終了後の本プログラムの体制が明確になるまで、存続期間を2年間（2021年3月末まで）伸長することとなった。

会員種別については、正会員Eが新設された。京都大学の研究科や専攻等を対象とする会員種別で、特典は正会員Aと同等としつつ、会費を年間5万円に抑えたものである。これまでデザイン学リーディング大学院と情報学研究科社会情報学専攻が正会員Aであったが、より多くの研究科や専攻にとって入会しやすい条件とし、京都大学と本コンソーシアムの協力関係を強固なものとすることが目的である。

4.2 会員

2018年1月末現在、下記の計71組織が会員となっている。会員の区分は、規約において次の4種が規定されている。

- ・正会員A：コンソーシアムの事業の企画に参加し、受講することができる。
　　デザインイノベーション拠点を利用した活動ができる。年会費30万円。
- ・正会員B：コンソーシアムの事業の一部を受講することができる。年会費5万円。
- ・正会員E：京都大学の研究科、専攻等。正会員Aと同様の特典で、年会費5万円。
- ・特別会員：コンソーシアムの事業の企画に参加し、受講することができる（官公庁等）。
　　年会費無料

【正会員A】(31組織)	【正会員B】(36組織)
株式会社内田洋行	e-no 株式会社
大阪ガス株式会社	エニシア株式会社
オムロン株式会社	株式会社 NTT データセキュリティシステムズ
京都大学 デザイン学リーディング大学院	株式会社 mct
京都大学 情報学研究科社会情報学専攻	株式会社エンプラス
京都リサーチパーク株式会社	鹿島建設株式会社
サントリーMONOZUKURI エキスパート株式会社	川崎重工業株式会社
株式会社島津製作所	公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構
株式会社積水インテグレーテッドリサーチ	京セラ株式会社 中央研究所
ソニー株式会社	公益財団法人京都高度技術研究所
ダイキン工業株式会社	株式会社サクラクレパス
大日本印刷株式会社	JFE スチール株式会社
大和ハウス工業株式会社	シャープ株式会社
株式会社竹中工務店	住友重機械工業株式会社
田辺三菱製薬株式会社	住友電気工業株式会社
DMG 森精機株式会社	株式会社セック
株式会社電通	大成建設株式会社
株式会社電通テック	株式会社丹青社
東レ株式会社	株式会社デンソー
西日本電信電話株式会社	株式会社東芝
西日本旅客鉄道株式会社	ニチコン株式会社
株式会社日建設計	日本電気株式会社
株式会社日本総合研究所	日本ハムシステムソリューションズ株式会社
日本電信電話株式会社	株式会社ハイシンク創研
株式会社野村総合研究所	パーソル AVC テクノロジー株式会社
株式会社博報堂	株式会社不二越
パナソニック株式会社	株式会社フジタ
日立化成株式会社	株式会社堀場製作所
三菱電機株式会社	マルホ株式会社
ヤマハ発動機株式会社	三井物産株式会社
横河電機株式会社	村田機械株式会社
【特別会員】(4組織)	株式会社村田製作所 コンポーネント事業本部
京都府	株式会社 UACJ
京都市	株式会社横井製作所
京都商工会議所	ローツェ株式会社
独立行政法人情報処理推進機構	株式会社ワオ・コーポレーション

注：法人内の一組織として会員になっている場合、法人内組織名を記載している。

4.3 活動内容

4.3.1 プロフェッショナル・デザインキャンプ

今年で第5回目となるプロフェッショナル・デザインキャンプを2018年12月3日(月)～5日(水)の日程で、京都大学デザインノベーション拠点にて開催した。デザインイノベーションコンソーシアムが年に一度のペースで開催するもので、今年もデザイン学リーディング大学院が後援した。本デザインキャンプは、参加者同士の価値共創を通じて、未来に求められる新たな価値を生み出し、そのプロセスを学び合う場である。コンソーシアム会員を中心とした様々な企業から集う参加者でチームを組み、共通のテーマのもと、3日間で新たな価値の創出が試みられる。

今回の参加者は24名であり、4つのグループに別れてグループワークを実施した。実行委員会はコンソーシアム推進委員の3名によって構成され、その内の1名はデザイン学リーディング大学院の特定教員が含まれる。7月に実行委員会が発足し、日時や内容を決定した。

今回のテーマは、「変貌する日本の10年後をデザインする～インバウンドの急増と自然災害の常態化に適応するために～」であった。デザインイノベーションの方法論を学ぶ上で、現在注目されながらも対処リテラシーが追いつかない2つの非日常シーンとして「インバウンド」と「自然災害」に注目することは好適である。非日常を自分ごととして捉え、その対処リテラシーを上げていくことは時間がかかるものであるが、「インバウンド」と「自然災害」はこれから約10年を考える上で避けて通ることはできない。このような旧来のアプローチでは解くことが困難なテーマこそ、デザインイノベーションの力が試される格好のテーマであるとして、設定された。

ファシリテータは、コンソーシアムの会員企業である日本総合研究所のディレクターであり、デザイン学の拠点フェローでもある栗田恵吾氏が務めた。3日間を俯瞰する流れは、未来洞察と呼ばれる方法論が採用された。これは、現在の状況や事実からスタートして未来に起こるであろうニーズを予想するインサイドアウト発想と、スキヤニングマテリアルからスタートして現実問題に引き戻すアウトサイドイン発想を実施し、それらの掛け合わせを強制的に発想するものである。

現在の状況や事実のインプットは、以下の2つであった。

- ・インバウンド：「経営学的視点のイノベーションと観光」（京都大学経営管理大学院 前川佳一特定准教授）
- ・自然災害：「災害時避難の課題」（京都大学防災研究所 多々納裕一教授）

また、デザイン学の拠点フェローである三菱電機の中島康祐氏によって、フェローたちが設計した発想方法である「問い合わせメソッド」が紹介され、参加者たちが実践した。

3日間のプログラムは以下の通りである。

1日目	2日目	3日目
<ul style="list-style-type: none">・ガイダンス・インプット2件・問い合わせメソッド実践・インサイドアウト発想(未来イシューによる構造的な変化作成)	<ul style="list-style-type: none">・スキヤニングによる非連続な仮設生成・強制発想による機会領域アイデアの創発	<ul style="list-style-type: none">・機会領域アイデアによるシナリオ作成、・プレゼンテーション・リフレクション

終了後に参加者が回答したアンケートによれば、一様に大いに満足できる内容であった。



1日目の様子



2日目の様子



2日目の様子

4.3.2 デザインフォーラム

デザインイノベーションコンソーシアムと本プログラムが共同で主催するフォーラムは、大学・企業・行政から専門家を招き、最新トレンドを捉えたハイレベルなテーマの講演会やワークショップを実施している。フォーラムを構成するビジネスデザイン、政策デザイン、ファシリテーションデザインの3つのシリーズの内、ファシリテーションデザインは平成28年度後半の有償化に伴ってデザインイノベーションコンソーシアム単独主催となった。平成29年度に引き続き今年度は実施されていない。

(1) ビジネスデザインシリーズ

本シリーズは、当プログラムの特任教授である貫井孝氏（元シャープ株式会社常務取締役）によってプロデュースされており、産業界の一線で活躍している、または実績のある方を講師に招き、ビジネス現場の実態、抱えている課題、その突破口、戦略、そのための人材論など、ビジネスの現場を踏まえた講演をいただき、これを元に産・学・官の参加者が質疑を交わし、ビジネス価値やビジネスモデルをデザインする思考起点となっている。国の経済活動の中核を担う「産業・企業・グローバルビジネス」という切口から、様々な分野・バリューチェーンにおける解決課題の認識と方向性、それを可能とするイノベティブな人材要件などを語り合い、それぞれの立場の人々のモチベーションを高めるとともに、これからビジネスイノベーションにつながるシリーズである。

100年企業、変革への挑戦～「モノ」から「コト」へ 「コト」から「ユメ」へ～

日時：2018年6月4日（月）17:30～19:00

場所：京都大学デザインイノベーション拠点

講師：西島 剛志氏（横河電機株式会社 代表取締役社長）

参加者：83名

AI/IOT/Big Dataなどのデジタルテクノロジーは凄まじいスピードで日々進化し続けており、産業構造とビジネスのあり方を根本的に変えるほどの影響力を持っている。企業は、この破壊的な技術革新の波に飲み込まれてしまうのではなく、これを活用して自らの手でイノベーションを起こさなければならぬ。

横河電機株式会社は1915年の創業以来、社会や経済が変化する中で自らを変革し続け、計測から制御、情報へと領域

を拡げながら時代に必要な技術を届けることで産業の発展に貢献してきた。そして今、パラダイムシフトとも言える大変革期の真っただ中で、従来からの計測・制御機器の製造・販売というモノづくり志向から、お客様のビジネス課題の解決を通じてお客様の夢を叶えるサービス事業への変革に挑んでおられる。

本講演では、歴史を重ねた企業だからこそ直面する変革の困難さや苦労話も交えながら、現在進行中の手探りの取り組みの一端をご紹介いただき、VUCAと言われる近未来ですら予測不可能な世界で、企業がいかに勝ち残りへの道を探るべきかについてお話をいただいた。



西島 剛志氏による講演

農業機械製造から農業経営のソリューション提供へ向けて

日時：2018年10月9日（火）17:30～19:00

場所：京都大学デザインイノベーション拠点

講師：苅田 広氏（ヤンマー株式会社・技術顧問元 ヤンマーホールディングス株式会社・代表取締役）

参加者：58名

ヤンマーはディーゼルエンジン、農業機械、建設機械等の製造に従事し2012年に100周年を迎えた。これからのヤンマーは、農家の業務全般にわたるソリューションを提供することをめざしておられる。つまり、耕起、田植え、刈取りなどの農業機械を製造、販売するだけではなく、種苗の提供、土づくり支援、



苅田 広氏による講演

育成管理支援、収穫物の管理、加工、販路マッチングまで農業経営におけるバリューチェーン全体でソリューションを提供するための技術開発を行っておられる。具体的には、植物栽培そのものに関する研究、IoT を用いた栽培の高度化、減農薬への取り組み、農業残渣による資源循環の仕組み構築等様々な分野に取り組んでおられる。それらの取り組みのご紹介いただくとともに、これからヤンマーが期待する人材等についてもお話をいただいた。

田辺三菱製薬の取り組み ~デザイン思考で製薬業界の殻を破る~

日時：2018年12月20日（木）17:30～19:00

場所：京都大学デザインイノベーション拠点

講師：子林 孝司氏（田辺三菱製薬株式会社・代表取締役専務執行役員）

参加者：70名

不況に強い安定産業とみなされてきた医薬品産業だが、人口の高齢化による社会保障費の増加抑制や薬価制度の抜本改革による国内事業の収益性低下、ならびに創薬ターゲット特定の困難化や創薬成功率の低下など課題が山積している。こうした背景の下、医薬品産業の収益構造は、従来のハイリスク・ハイリターンから、ハイリスク・ミドルリターンの構図へと変貌しつつある。

このような環境変化の中で、田辺三菱製薬は「患者さん中心」の原点に立ち返り、医薬品というモノの提供から健康というコトの提供に頭を切り替えて、従来の枠を越えたビジネス展開に挑戦されている。

本講演では、医薬品産業の事業構造を紹介いただくとともに、実例を交えて会社の取り組みをお話をいただいた。



子林 孝司氏による講演

日本人と改革

日時：2019年3月18日（月）17:30～19:00

場所：京都大学デザインイノベーション拠点

講師：齋藤 健氏（衆議院議員 前農林水産大臣）

日露戦争から第二次世界大戦に至るまでの歴史は、実は、右は国家改造思想から左は共産思想まで、日本人自身が改革に奮闘した時代であった。にもかかわらず、最悪の結果を迎えた。それはなぜか。その背景には明らかに日本人の持つある特質が存在している。それは何か。しかもそのことを追及していくと、遠因は古代史にまでさかのぼる。独学での歴史研究、海外との厳しい交渉、そして日本の政界の中で見てきているもの、そういったものから見えてくる改革の時代の日本人のあるべき姿について率直にお話しいただく。



齋藤 健氏

4.3.3 デザインレクチャー

今年度から、デザイン学大学院連携プログラムの後援のもと、本コンソーシアム主催でデザイン学に関する一連の講義からなるデザインレクチャーを開始した。産業界で活躍する社会人が、自らとは異なる専門分野におけるデザイン理論・手法を学ぶことで、異分野・異業種協働による問題発見・問題解決の重要性や可能性に気付き、本プログラムやコンソーシアムの他のさまざまな活動に関心を持ち、参加する契機としていただくことを主な狙いとしている。これまで本コンソーシアムでは、デザインワークショップなど各種イベントの中でミニレクチャーとしてデザイン理論やデザイン方法の講義が行われることはあったが、デザイン学に関する講義が単独のイベントとして行われるのはこれが初めてである。

レクチャーは概ね月に1回、半期で4回程度開催され、1回あたり150分の講義をさまざまな専門分野のデザイン学構成員の教員が担当している。講義の内容はコンソーシアム独自のもので、デザイン学プログラムの講義体系とは独立したものである。受講対象者は広く一般から募集し、コンソーシアム会員の企業・大学・自治体等の構成員は無料、その他（非会員）は1回5,000円としている。

今年度は下記の講義を実施した。受講者は各回概ね30～50人程度（うち非会員は毎回10名程度。2回目以上の受講は毎回10～20名程度）で、アンケートでは、「デザイン学についてまとまった知見が得られた」「体系的に理解できた」「知らない専門の講義だったが分かりやすかった」「難しかったが新しい気付きの連続だった」といった声が聞かれた。

Season I (2018年前期)
第1回 人工物のデザイン 「人と機械の共創による社会技術系のデザイン」 榎木 哲夫（京都大学工学研究科 機械理工学専攻 教授）
第2回 サービスのデザイン 「価値共創の理論的視座とデザインの方法論」 山内 裕（京都大学経営管理大学院 准教授）
第3回 表現と認知 「デザインに関わる人の認知と特性」 中小路 久美代（京都大学デザイン学リーディング大学院 特定教授）
第4回まちづくり (matidukuri) 「国際研究者協力による『まちづくり』への直接貢献・研究の進展」 神吉 紀世子（京都大学工学研究科 建築学専攻 教授）
Season II (2018年後期)
第1回 情報のデザイン 「情報を効果的に伝えるための方法論」 黒橋 祐夫（京都大学情報学研究科 教授） 山本 岳洋（京都大学情報学研究科 助教）
第2回 フィールド分析法 「エスノメソドロジーと人間行動のデザイン」 平本 豊（京都大学経営管理大学院 特定講師）
第3回 防災のデザイン 「防災デザインの方法論」 牧 紀男（京都大学防災研究所 教授）
第4回 心理とデザイン 「なつかしい記憶による幸福感と社会的絆」 楠見 孝（京都大学教育学研究科 教授）



デザインレクチャーのポスター

4.3.4 社内教育プログラム

コンソーシアム会員企業からの依頼に基づき、本プログラムとの連携により、カスタマイズ型の社内研修を実施している。研修の内容は、デザイン思考の体験、創造的思考法などさまざままで、デザイン学構成員の教員を中心に協力を得て研修プログラムを企画・実施している。今年度は下記の3件の研修を実施した。

(1) A 社

実施時期：2018年8月（1日）

概要：若手・中堅社員十数名を対象とし、創造的な業務遂行のためのスキルの獲得を目的として実施した。創造的に業務を遂行する上での障害や課題についての気付き、対処方法を考えることで、社内全体の底上げを行った。

(2) B 社

実施時期：2018年10月（1日）

概要：若手・中堅社員十数名を対象とし、社内で別途実施している新規事業提案の企画と連動する形で、未来社会のニーズを描き出すための基礎的手法を学んだ。

(3) C 社

実施時期：2018年11月（2日）

概要：若手・中堅社員十数名を対象とし、デザインワークショップによりデザイン思考の基礎的考え方を学んだ。特に、フィールドワークの時間帯を設け、ターゲットユーザーの観察やインタビューを実践した。さらに、社内ファシリテータの養成を兼ねる研修とし、希望者3名に事前講習を実施した。講習受講者は当日のファシリテータ役を務めた。

4.3.5 デザインイノベーション拠点フェロー

本プログラムでは、デザインイノベーション拠点において、京都大学デザイン学と共に活動するデザインイノベーション拠点フェロー制度を創設している。デザインイノベーションコンソーシアムの正会員 A は、各組織から 1 名、当プログラム担当者からの推薦を付して、フェローを推薦することができる。2019 年 3 月現在、10 名のフェローが、京都大学学際融合教育研究推進センター（2018 年度から大学院横断教育プログラム推進センター）からの委嘱を受けて活動している。これまでにフェローが立ち上げた活動は下記などである。

- フェローの間で話題提供をしながら、本プログラムの履修者や構成員も迎え入れて定期的に情報交換をする場であるサロンの運営
- 本プログラムとコンソーシアムが共同で主催するデザインフォーラムにおいて、3 つのシリーズの内の一つである政策デザインシリーズの立ち上げと運営

サロンは毎月定例で開催されている。今年度は、昨年度に引き続いだフェローの所属企業、あるいは業界において暗黙的に実践されている、問題発見・問題解決における思考方法を持ち寄り、本コンソーシアムならではのデザイン手法を確立すべく議論を重ねた。そのアウトプットとして「問い合わせメソッド」と名付けた発想法をまとめ、ワークショップなどの実践を通して練り上げる段階に至っている。

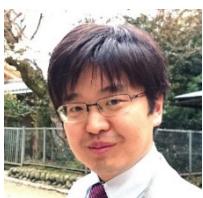
このほか、「オープンイノベーション実習」や「異分野・異業種企業訪問学習会」など、本プログラムとデザインイノベーションコンソーシアムが共同で実施している活動において、企業側の代表として関連部署を統括・調整するなど、文字通り産学連携のキーパーソンとして活動いただいている。



畠中哲夫さん
(株)竹中工務店
大阪本店 設計部
設計第 2 部門 部長



坂口剛さん
(株)野村総合研究所
社会システムコンサルティング部
プリンシパル



今井紘さん
オムロン(株)
イノベーション推進本部、SDTM 推進室
グループリーダー



栗田恵吾さん
(株)日本総合研究所
未来デザイン・ラボ
ディレクター



鉄川弘樹さん
ソニー(株)
技術戦略部
統括部長



山口義雄さん
(株)日建設計
設計部門
デザインパートナー



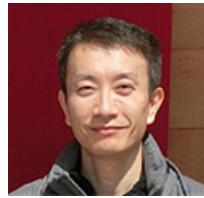
福田 卿也さん
(株)博報堂
関西クリエイティブ・ソリューション局開発
チームリーダー



中島 康祐さん
三菱電機(株)
デザイン研究所



木村 篤信さん
日本電信電話(株)
サービスエボリューション研究所
主任研究員



永井 隆行さん
京都リサーチパーク(株)
イノベーション
デザイン部
部長

4.3.6 デザイン学履修者の経済的支援

デザイン学履修者の経済的支援の一環として、「専攻研究とデザイン学に関する調査」を実施した。これは今年度初めて実施する施策で、履修者が、自らの博士研究を中心とした所属専攻の研究とデザイン学の関わりについて調査し報告書にまとめることに対して、コンソーシアムから委託金が支払われる。対象は、デザイン学博士後期課程在籍者のうち、応募時点での QE (博士論文研究基礎力審査) に合格しており、2019 年 4 月時点で引き続き在籍予定の者のうち、希望する者である。

プロセスは次のとおりである。

- (1) 支援を希望する履修者は、博士研究の概要を A4 で 1 枚程度にまとめ、コンソーシアム宛に応募する。(2018 年 12 月中旬)
- (2) コンソーシアム推進委員で構成される選考委員会において書類選考を行う。「コンソーシアム会員にとって関心のある研究内容であるか」を基準として委員が投票を行い、得票数上位者を委託先として採択する。(12 月末)
- (3) コンソーシアムと受託者（履修者）との間で業務委託契約を締結し、調査業務を委託する。(2019 年 1 月～3 月)
- (4) 受託者は A4 10 ページ程度で報告書を作成し、コンソーシアム事務局に提出する。検収後、委託金が支払われる。

今回は 1 人 50 万円、計 4 名に委託を行った。2019 年 4 月以降にはコンソーシアム会員を対象とする報告会を開催し、調査内容について 1 件 30 分程度での口頭発表を受託者に依頼する予定である。

5 プログラムの評価

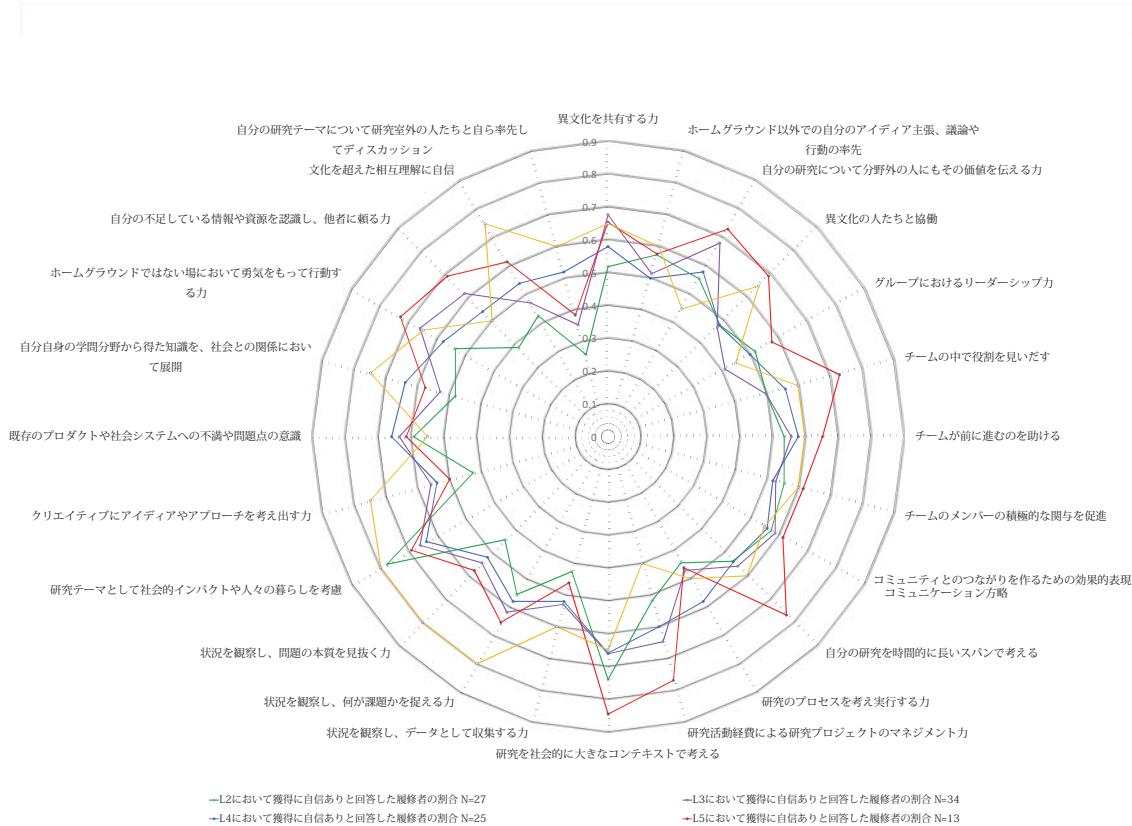
5.1 質問紙調査

デザイン学プログラムでは、デザイン学プログラムの効果を検証し課題を抽出することを目的として、2015年度より履修生等を対象とした質問紙調査を実施した。調査結果はデザイン学プログラムの評価と改善に利用するものとして位置付けるものとし、履修生個々人の評価を行うためのものではないことを明記した。

プログラム期間中に、2015年5月、2017年3月、2018年2月の3回調査を実施した。3回目の調査からは、プログラムの修了生として卒業後の進路が決定しているL5の存在も踏まえ、進路選択および今後への期待等に関する質問項目に変更した。

質問紙の主要な質問項目は、3回の調査すべて共通とした。これによって、履修者がプログラムに期待するところや履修者の学習効果の認識について、定点観測的に調査することを狙った。質問項目は、パートI,IIの2項目からなる。パートIは選択肢から選択するタイプの計38問であり、PartIIは定性的な把握のための自由記述形式の計10問である。PartIの設問のうちの24項目は、デザインイノベーションデックスを算出するにあたり使用している質問項目であり、「エンゲージメント（協働）：Outward 他者との関係に対する俯瞰力」「ガバナンス（管理運営）：Forward 研究遂行上の規範・計画・管理・運営・組織面での俯瞰力」「インテリジェンス（知的能力）：Metaknowledge 知識の活用に対する俯瞰力」「パーソナリティ（個人の資質）：Inward 自身の内面に対する俯瞰力」という4項目のいずれかに対応する。具体的には、「自分とは異なる文化的背景を持つ人たちと価値観や問題意識を共有する力」や「自分の研究を進めて行くまでのプロセスを考えそれを実行していく力」について、それぞれ、「大きく力がついたと思う」「力がついたと思う」「変わらない」といった3項目から選択する形式をとった。

下図に、これらの質問紙調査結果の累計をベースに、学年ごと（L2からL5まで）に、PartIの24の各設問に対応するそれぞれの力を獲得に対する自信についての回答結果を示す。参考として、2015年度に参官に対して実施した、博士課程における獲得を期待するとする調査結果を共に示す。全体の傾向として、学年進行に従って、それぞれの力の獲得に対する自信が増加していることがみてとれる。同時に、自己の研究に対する社会的な位置付けやインパクトに関しては、漠とした希望的観測から、より客観的な冷静な評価へと変化している様子も伺えた。創造性や洞察力といった参官が期待する力に対しても、学年進行に従つて獲得への自信が増加している様子を観察することができた。



5.2 デザイン学リーディング大学院協議会

デザイン学リーディング大学院では、その教育内容や運営方針を、産学官で議論するための協議会を毎年開催している。本年度も、昨年度同様、以下の日程で、国際デザインシンポジウムと同日開催する。議事内容は、デザインスクールの事後評価、および次年度以降の活動についてである。協議会に引き続き昼食懇談会を開き、忌憚のない意見交換を行う。

なお、今年度末で補助金が終了するため、本協議会が最後の開催となる。

日程：2019年3月19日（火）10:00～12:40

場所：京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホールⅢ

10:00～11:30 協議会

・デザインスクール事後評価報告

石田 亨（情報学研究科 教授／プログラムコーディネータ）

・次年度以降の活動内容について

榎木 哲夫（工学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院将来構想委員長）

・卓越大学院の申請について

黒橋 稔夫（情報学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院副コーディネータ）

11:40～12:40 昼食懇談会

協議会の構成員は以下の通りである。（敬称略）

石田 亨	(京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授)
神吉 紀世子	(京都大学工学研究科建築学専攻 教授)
榎木 哲夫	(京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授)
塚田 章	(京都市立芸術大学大学院美術研究科 教授)
松田 晃一	(独立行政法人情報処理推進機構 顧問)
澤田 宏	(日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所協創情報研究部 部長)
田中 健一	(三菱電機株式会社開発本部 技術統轄)
山田 敬嗣	(NEC ASIA PACIFIC 社 シニアバイスプレジデント)
梶本 一夫	(パナソニック株式会社イノベーション戦略室戦略企画部 主幹)
三浦 智康	(株式会社野村総合研究所 理事／野村マネジメント・スクール 学長)
上田 誠	(京都市産業観光局 局長)
谷脇 康彦	(総務省 総合通信基盤局 局長)
佐藤 高史	(京都大学情報学研究科通信情報システム専攻 教授)
黒橋 稔夫	(京都大学情報学研究科知能情報学専攻 教授)
小森 雅晴	(京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授)
藤本 健治	(京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻 教授)
吉川 正俊	(京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授)
太田 快人	(京都大学情報学研究科数理工学専攻 教授)
田中 利幸	(京都大学情報学研究科システム科学専攻 教授)
齊藤 智	(京都大学教育学研究科教育学環専攻 教授)
山内 裕	(京都大学経営管理研究部 准教授)
松井 啓之	(京都大学経営管理研究部 教授)

楠見 孝	(京都大学教育学研究科教育学環専攻 教授)
松原 厚	(京都大学工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻 教授)
西脇 真二	(京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授)
守屋 和幸	(京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授)
林 康裕	(京都大学工学研究科建築学専攻 教授)
三浦 研	(京都大学工学研究科建築学専攻 教授)
富田 直秀	(京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授)
泉田 啓	(京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻 教授)
西田 豊明	(京都大学情報学研究科知能情報学専攻 教授)
守倉 正博	(京都大学情報学研究科通信情報システム専攻 教授)
川上 浩司	(京都大学情報学研究科知能情報学専攻 特定教授)
佐藤 彰洋	(京都大学情報学研究科数理工学専攻 特定准教授)
多々納 裕一	(京都大学防災研究所社会防災研究部門 教授)
中村 裕一	(京都大学学術情報メディアセンター 教授)
須永 剛司	(京都大学デザイン学リーディング大学院 特任教授)
中小路 久美代	(京都大学デザイン学リーディング大学院 特定教授)
十河 卓司	(京都大学デザイン学リーディング大学院 特任准教授)
北 雄介	(京都大学デザイン学リーディング大学院 特定講師)

5.3 事後評価

(1) プログラムオフィサー現地訪問

日時：平成 30 年 5 月 23 日（水）13:30～16:10

場所：総合研究 8 号館 会議室 1

訪問者：桂 晃洋先生、文部科学省同行者 1 名、日本学術振興会事務局随行者 2 名

対応者：北野正雄（理事（教育担当）・副学長／プログラム責任者）、石田亨（情報学研究科教授／プログラムコーディネータ）、樋木哲夫（工学研究科教授／デザイン学リーディング大学院将来構想委員会 委員長）、神吉紀世子（工学研究科教授／デザイン学リーディング大学院教育委員会 委員長）、松井啓之（経営管理研究部教授／デザイン学リーディング大学院 副コーディネータ）、黒橋禎夫（情報学研究科教授／デザイン学リーディング大学院 副コーディネータ）、楠見孝（教育学研究科教授／デザイン学リーディング大学院将来構想委員会 副委員長）、中小路久美代（デザイン学リーディング大学院 特定教授）、川上浩司（デザイン学リーディング大学院 特定教授）、十河卓司（デザイン学リーディング大学院 特定准教授）、佐藤彰洋（情報学研究科 特定准教授）、北雄介（デザイン学リーディング大学院 特定講師）

スケジュール：

13:30-13:40 事前打ち合わせ（桂先生、文科省・学振随行者のみ）

13:40-15:10 授業見学

FBL/PBL 「構成と分解によるアーティファクトの探求と展示」

（実施責任者：中小路久美代先生）

14:10-15:10 学生との意見交換

15:10-16:10 プログラムの進捗状況等の説明・質疑応答

(2) 事後評価

デザイン学大学院連携プログラムの事後評価は、2018年6月に提出した調書（付録4）と、11月に実施したプレゼンテーション（付録5）を基に行われ、結果としてA評価を得た（付録6）。評価項目は、リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築（1割）、修了者の成長とキャリアパスの構築（5割）、事業の定着・発展（4割）であった。デザイン学大学院連携プログラムは、部局横断型のプログラムであるので、博士研究と就職は部局にその多くを委ねている。また、事業の継続性は大学の施策によるところが大きい。このため、評価対象のかなりの項目に100%の当事者能力がない状態で、最善を尽くさざるを得ない状態であった。

幸い、履修者は汎用力において大きな伸びを示すと同時に、キャリアパスを広げていた。また、サマーデザインスクールやデザインイノベーションコンソーシアムの活動など、産学官連携の実績は顕著であった。こうした点を中心にプログラムの成果をまとめることで、中間評価で得たA評価を維持することができた。一方、事後評価を通じて、部局横断型のプログラムを実施し継続することの困難さを改めて痛感することになった。本学においては、全てのリソース（教員、学生、運営費、施設）が部局に割り当てられている。本来、横断型のプログラムを実施するのであれば、プログラムにリソースを割り当てる制度設計が必要であるが、現状では、プログラムのリソースは補助金に頼っている。その構造が変わらないのであれば、補助金が終了する時点で、横断型プログラムの講義や演習を部局に定着させ、部局連合でプログラムを維持するしかないのだが、その制度設計も十分ではない。

事後評価でA評価が得られたことは幸いではあるが、今後の継続性に関しては難しい状況が続くであろう。大学教育の社会的価値を高めるためにも、部局横断型プログラムの制度設計が進むと同時に、デザイン学などのプログラムで得られた新たな教育体験が、参画部局に定着していくことを期待したい。

6 将来構想活動

6.1 将来構想委員会の活動

今年度よりデザイン学教授会との同時開催でこれまで 7 回開催した（今年度の予定としては 8 回の開催予定）。将来構想委員会の担務としては以下の通りである。

- デザイン学リーディング大学院顧問会議
- 卓越大学院への継承
- デザインイノベーション拠点の継続性
- デザインファブリケーション拠点の継続性
- デザインイノベーションコンソーシアムの継続性
- 補助金終了後の組織体制
- 補助金終了後の予算
- 京都大学デザインスクール基金

以下、将来構想委員会の担務の各々の項目について述べる。

なお、本部規程の京都大学大学院横断教育プログラム推進センター要項（平成 30 年 3 月 28 日総長裁定）により、補助金終了後も博士課程教育リーディングプログラムを実施することを確認し、大学院横断教育プログラム推進センターのもとに設置される「デザイン学リーディング大学院」の組織のもとでプログラムを継続することとなった。

6.1.1 顧問会議

2018 年 4 月 19 日に顧問会議を開催した。

参加者は、以下の通りである。（敬称略）

[デザイン学リーディング大学院顧問]

中村 佳正（情報学研究科長）
大嶋 正裕（工学研究科長）
稻垣 恭子（教育学研究科長）
原 良憲（経営管理大学院長）
中村 裕一（学術情報メディアセンター長）
守倉 正博（情報学副研究科長）

[デザイン学リーディング大学構成員]

石田 亨（情報学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院コーディネータ）
榎木 哲夫（工学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院将来構想委員長）
松井 啓之（経営管理大学院 教授／デザイン学リーディング大学院副コーディネータ）
黒橋 穎夫（情報学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院副コーディネータ）
楠見 孝（教育学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院将来構想副委員長）
林 康裕（工学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院将来構想委員）
松原 厚（工学研究科 教授／デザイン学リーディング大学院将来構想委員）

まずコーディネータより、デザイン学大学院連携プログラムの事後評価に向けた準備の概要について報告が行われた。次に、卓越大学院申請に向けて将来構想委員会委員長より、

資料に沿って、4月6日に開示された平成30年度大学教育再生戦略推進費卓越大学院プログラムの公募要領等の概要について説明。その後、現在のデザイン学リーディング大学院を中心に後継として申請を検討している案「データセントリック・デザインイノベータ人材育成プログラム（仮称）」について説明を行った。平成30年度卓越大学院プログラム申請に関しては、京都大学からは2拠点の申請を行うことが決定され、いずれもが工学研究科が主幹部局として申請することになることから、来年度の申請分については、この点を留意し、主幹部局の学内バランスを思量しておくべきとの意見が出された。申請案の概要是大学本部の理解を得やすい内容になっているとは思うが、京都大学らしさをどの部分に出せるかのさらなる検討をすべきであるとの意見が出された。継続予定のリーディング大学院プログラムとの相互乗り入れを可能にする構想は歓迎すべきだが、育成する人材として、何を突破できる人材を育成するのかの人材定義が新たに必要となる。

平成31年度の卓越申請に向けて、各参画部局に対して、卓越申請公募要領の内容に沿つて参画できるか否かの再度の意思確認が行われ、主幹部局の決定を早急に進めたいことについての確認と、卓越大学院申請WGへの各参画部局からの委員の推薦が依頼された。

6.1.2 卓越大学院への継承

前項での顧問会議での議論を受けて、平成30年6月に情報学研究科からコーディネータを出す形でデザイン学成果を活用する卓越大学院申請を行ってほしい旨を将来構想委員長から中村情報学研究科長に申し入れ、平成30年7月13日開催の情報学研究科教授会にて平成31年度卓越大学院申請を情報学研究科が主幹部局となって行うことが承認された。引き続き、情報学研究科研究科長・副研究科長とデザイン学参画部局代表者の間で2回の協議で、9月に6部局参加による卓越準備WGを設置し、12月までの間に6回のWGを開催してプログラムについて検討を行った。

- 申請予定プログラム名：統合情報学卓越大学院プログラム
- 予定プログラムコーディネータ：情報学研究科・教授・黒橋禎夫
- 学内連携部局：情報学研究科、工学研究科、教育学研究科、経営管理大学院、農学研究科、理学研究科で、申請区分としては、②社会において多様な価値・システムを創造するような、文理融合領域、学際領域、新領域、で申請することとした。

6.1.3 デザインイノベーション拠点の継続性

事後評価調書の提出に際して、プログラム責任者の北野理事からの指示により、大学本部の意向として、デザインイノベーション拠点（京都リサーチパーク（以下KRP）内）を補助金終了後も引き続き維持すべきとの申し出を受け、平成30年度内での拠点撤収は取りやめ、平成31年度以降は拠点の規模を縮小しつつも大学本部教務企画課の管理のもとに移し、引き続き拠点機能を維持することとした。本件について、2018年4月11日付けで京都大学教育担当理事・副学長 北野 正雄 氏（博士課程教育リーディングプログラム責任者）から将来構想委員会委員長宛の『「デザインイノベーション拠点（KRP内）の継続に係る交渉記録に係る確認書」について』の文書において、デザインイノベーション拠点の継続について、2019年度以降の拠点管理を現在のプログラムによる管理から、京都大学の教育等の共用施設として京都大学の管理に移行することについて合意した。

上記の合意に基づき、北野理事の指示のもと、教育推進・学生支援部教務企画課教育プロジェクト推進室と拠点貸主の京都リサーチパーク株式会社の間で協議が進められている。なお、これに伴い、現在の拠点に配置されている設備関係の管理替え等の必要が生じた場合は、教育プロジェクト推進室とデザイン学将来構想委員会委員長との間での協議により進めることとした。

6.1.4 デザインファブリケーション拠点の継続性

補助金終了後のデザインファブリケーション拠点（以下ファブ拠点）（吉田キャンパス内）維持に向けて、学内組織への照会を試みたものの、現状設備のままでのデザインファブリケーション拠点維持は、主に維持のための原資調達の困難さから、今年度中で撤収することを決定した。なお、出来るだけ現在のファブ拠点機能を継続できることをガイドラインとして、現有設備の移設先を検討することとした。その結果、機器の保全要員配置を必要とする工作機械等の設備については、現在のファブ拠点に隣接し工学研究科（工学部）の管理下にある物理系校舎 2 階 205CAD 室に移設し、保全要員は工学研究科技術部の技術職員が兼ねることとした。これらの機器以外も含めて、ファブ拠点に配置されている設備・什器類の移設先の決定をほぼ完了している。

6.1.5 デザインイノベーションコンソーシアムの継続性

プログラム継続に伴い、2018 年 5 月 31 日に開催されたデザインイノベーションコンソーシアムの理事会・総会において、引き続き、デザインイノベーションコンソーシアムの活動を 2 年間継続することを決議し、補助金終了後のプログラムへの協力内容について承認を得た。協力内容としては、補助金終了後の履修者への RA 経費の補填、産学協働教育必要経費の補填、である。さらにデザインイノベーションコンソーシアムで新たにプロフェッショナルネットワークを構築し、コンソーシアムとプログラム参画部局との間でより緊密な产学研連携のチャンネルを維持・拡充するための活動を展開していくことを確認している。

6.1.6 補助金終了後の組織体制

大学院横断教育プログラム推進センターのもとに設置される「デザイン学リーディング大学院」の組織のもとでプログラムを継続する。このために、デザイン学リーディング大学院教授会を組織し、この組織において、

- プログラムコーディネータを当該組織の教授会において選出すること
- プログラムに参画する研究科等から 1 名以上の教授で教授会を構成すること

とした。さらにこの組織のもとで、

- (1) 教員人事、予算その他管理運営に関する重要事項
- (2) 教育課程に関する事項
- (3) プログラムを履修する学生の選抜に関する事項
- (4) プログラムを履修する学生の進級、修了その他の学生の在籍に係る審査に関する事項
- (5) その他プログラムの実施に関する重要事項

の事項を審議する。

なお補助金終了後に上記のプログラム運営を支援する事務組織として、情報学研究科事務局のもとにデザイン学リーディング大学院事務室（分室）を設置し、プログラム運営を支援していくことについて、将来構想委員会委員長より情報学研究科長に申し入れを行い、了承されている。

6.1.7 補助金終了後の予算

補助金終了後の予算について、

- 学生支援経費
- TA・RA 経費の補填
- 産学連携教育の補填
- 基礎盤的経費（主に事務室運営に係る経費）

等の項目について、必要となる予算額を算定し、大学本部からの支援経費、参画部局からの支援経費、参画専攻群等での支援経費、デザインイノベーションコンソーシアムからの支援経費、プログラムとして獲得する外部資金、等による充当について審議を行っている。

6.1.8 京都大学デザインスクール基金

デザイン学大学院連携プログラムの補助金終了後の教育プログラムとしての継続について、将来構想委員会で終了後の履修者支援や組織運営について検討を重ね、そのための方策の一つとして、京都大学基金として京都大学デザインスクール基金を設置することとし、本プログラムの推進への賛同者を広く求め、財政支援をお願いすることにした。すでに設置を完了している。基金の使途としては、教育支援として、プログラム履修者の研究・経済的支援、インターンシップ、フィールド実習等の実施に関わる経費、国際機関からの招へい講師に係る経費等を、また環境整備として、拠点等のスペースチャージに係る経費やその他運営費等に充てる。

6.2 教育委員会によるカリキュラムの改定

平成 30 年度をもって、本プログラムにかかる補助金が終了となることに伴い、次年度以降のカリキュラムについて、プログラムの骨格を維持しつつ、参画部局を中心として実施可能なよう修正し、学生の履修を容易とするため、各専攻の教育プロセスに埋め込まれたものとすることとして、年度当初より検討を重ねてきた。

検討結果については、全学の教育制度委員会の承認が必要で審査中であるが、概要は以下のとおりとなっている。

(1) デザイン学共通科目 (QE 前)

- 申請書に記載したデザイン学共通科目（デザイン方法論、アーティファクトデザイン論、インフォメーションデザイン論、組織・コミュニティデザイン論、フィールド分析法）については継続して提供する。
- 申請書に記載した演習（問題発見型/解決型学習 1、2）を、参画部局でそれぞれ開講する。部局間の情報共有を図り、学生が他部局の演習を受講可能とする。なお、ワークショップ運営の習得を兼ねた問題発見型/解決型学習 L（前後期各 2 単位）を新設し、従来の科目は同 S（前後期各 1 単位）とする。
- 異分野の指導教員による研究指導認定が定着し、履修者は研究指導認定に向け、デザイン学の視点で修士研究を準備するようになった。これに伴い、共通科目履修に係る QE 要件を、現行の 8 単位から 6 単位に変更する。

(2) デザイン学共通科目 (QE 後)

- オープンイノベーション実習、リサーチインターンシップ、フィールドインターンシップは、1 単位又は 2 単位科目として参画部局でそれぞれ開講する。
- 博士研究は、複合的な課題に挑戦するリーディングプロジェクトの中で行うこととしており、履修者のプロジェクト提案・実施が行われるようになった。これに伴い、共通科目履修に係る修了要件を、現行の 10 単位から 6 単位に変更する。

(3) 領域概論科目

- 他研究領域の学習を容易にするために導入した領域概論科目は、各領域で 1 科目を維持する。
- デザイン学と各専攻の教育の中で位置づけるため、領域科目の追加登録を行う。

(3) スキル科目、コミュニケーション科目

- QE や修了の要件に含まれないスキル科目、コミュニケーション科目は廃止する。

7 その他の活動

7.1 広報活動

プログラム全体の広報活動は「デザイン学ユニット広報小委員会」を設置して行なっている。これまでにロゴマークの策定や各種紙媒体、ウェブページの作成を行なった。平成 30 年度は既に定常活動に入っており、web ページの更新や「デザイン学論考」の継続発行などを例年通り行なった。ただし補助金終了となる次年度以降にも対応できるよう、諸媒体の見直しを行なった。

なお各種イベントなどの広報はイベントの担当者が個別に行なっている。これらの主要なものについては付録に掲載する。

7.1.1 Program Overview の改定

カリキュラムや活動の紹介冊子として、「Program Overview」を以前から継続的に使用しているが、プログラムに対する補助金終了後にも対応できるよう、内容や体裁の改訂を行なった。

7.1.2 デザイン学論考

デザイン学に関する持論展開や議論の場として、「デザイン学論考」という小冊子の発行を行なっている。平成 26 年度に創刊した年 3 回の定期刊行物であり、デザイン学構成員、プログラム履修生や修了生、また学内外のデザイン学に関心を寄せる方に対して配布、および原稿募集をしている。学術論文誌とはせず、自らの研究や実習での経験などについて自由に書けるものとしている。

平成 30 年度は 3 回発行し、あわせて 20 本の論考が掲載された。そのうち 12 本がプログラム履修者、1 本が修了者の執筆したものである。また 6 本が留学生による英語の論考となった。いずれの数も、過去最多となつた。

なお本誌は、本年度をもって発行を終了する。



「デザイン学論考」vol.14 表紙

平成 30 年度発行「デザイン学論考」掲載リスト

[vol.13]

1. Towards Transferring a Borderless Aspect: Freedom (Kensuke Abu Kargbo Morris : 情報学・L3)
2. インタビュー：地面について（北雄介：デザイン学・教員）
3. 第 2 回スマートディスティネーション国際会議参加報告（笠原秀一：学術情報メディアセンター・教員）

[vol.14]

1. レイヤー思考とパースペクティブ思考（松原厚：機械工学・教員）
2. リサーチインターンシップ in ドイツ（森幸太郎：機械工学・L4）
3. 福島の今と京都にいる自分：FBL/PBL での覚書（大手信人：情報学・教員）
4. “The Value of Human Rights on the Camino de Santiago” に参加して（笠原秀一：学術情報メディアセンター・教員）
5. 日本におけるグラフオロジー成立の背景に対する考察（佐伯和香：経営管理・L1）

[vol. 15]

1. つくりないスタジオ（大倉 裕貴：機械工学・L5／岸本 裕大：情報学・L5／寺川達郎：機械工学・L5／森田 瑞穂：学外）
2. 柳川堀割「ウナギ物語」にみる、地域活動コミュニティについての考察（堀友彌：情報学・L5）
3. 観光データでデザインするための営み（佐藤彰洋：情報学・教員／笠原秀一：学術情報メディアセンター・教員）
4. Designing to improve student completion rates: Preliminary qualitative investigation into causes of drop-out (Agustina Lucía Yohena : 教育学・L1)
5. Organizing a Competition on Tackling Youth Unemployment (Samar El Helou : 情報学・L5)
6. コ・ファシリテーションの試行—実践の中で他のファシリテーターから学ぶ—（北野清晃：情報学・修了生）
7. 冰山の一角に最大の表現力を—『乃木坂って、どこ？』から考える伝え力のある番組の作り方—（周文卿：情報学・L2）
8. 書字方向が定着した背景についての考察—中国語、ヒンディー語、英語—（佐伯和香：経営管理・L1）
9. Reflections on the invisible (Luciano Henrique de Oliveira Santos : 情報学・L5)
10. 「木津川探究ワークショップ」から考えた子ども向けワークショップのデザイン（安藤 悠太：機械工学・L3）
11. 『デザイン学論考』全 15 号を振り返って（北雄介：デザイン学・教員）

7.2 デザイン学白書

中間評価を受けて、デザイン学の国際標準のカリキュラムについて検討し、デザイン学白書（ホワイトペーパー）を編纂する事業を進めている。今年度は、デザイン学からの予算配当が叶わなかつたことから、参画部局の経費負担により、来たるべき卓越大学院の申請を見込んだ交流活動を実施した。

工学研究科機械理工学専攻並びにマイクロエンジニアリング専攻では、米国のミシガン大学（University of Michigan）との交流をこれまで行ってきている。同大学では 2005 年より、“ A Rackham Interdisciplinary Doctoral Program in Design Science” と称するデザイン科学の博士課程教育プログラムが実施されている。“ Artifact creation will be placed closer to the user and his/her social context” をモットーに、従来のリベラル教育やエンジニアリング教育のカリキュラムを見直すプログラムとして位置付けている。

今年度は、機械理工学専攻の西脇教授のお世話により、5 月 3~4 日の両日にわたり、ミシガン大学を訪問し、“ Kyoto University – University of Michigan Design Science Program Planning Workshop”を実施した。

参加者は、次のとおりある。

Kyoto University – University of Michigan Design Science Program Planning Workshop

[京都大学の参加者]

Tetsuo Swaragi, Professor, Dept. Mechanical Engineering Science
Atsushi Matsubara, Professor, Dept. Mirco Engineering
Masaharu Komori, Professor, Dept. Mechanical Engineering Science
Shinji Nishiwaki, Professor, Dept. Mechanical Engineering Science
Kazuhiro Izui, Associate Professor, Dept. Mechanical Engineering Science

[日本産業界からの参加者]

Toru Matsushima, Project General Manager, Toyota Motor Co.

[ミシガン大学の参加者と提供話題]

- Design Science Program History
Prof. Panos Papalambros - Mechanical Engineering
- Design Science Program Current Status
Prof. Matthew P. Reed - Ergonomics and Safety Research
- Design Science Perspective: Art and Design
Prof. Panos Papalambros - Mechanical Engineering
- Design Science Perspective: Engineering
Prof. Diann Brei - Mechanical Engineering
- Design Science Perspective: Marketing
Prof. Feinberg, Fred - University of Michigan Law School)
- Design Science Perspective: Psychology
Prof. Seifert, Colleen - University of Michigan School of Education)
- Design Science Perspective: Systems
Assoc. Prof. Luke Hyde - College of Literature, Science, and the Arts Department of Psychology
- 提供科目の概要説明 Michigan Design Science Core Courses:
 - DESC1 501 Analytical Product Design
Prof. Panos Papalambros
 - DESC1 502 Design Process Models
Prof. Jeff Hartley
 - DESC1 790 and 791 Design Science Colloquium
Prof. Diann Brei, Prof. Matthew Reed

ミシガン大学のプログラム履修生 5 名との面談もセットされ、有意義な研究交流の機会となった。同プログラムのその他の詳細については、デザイン白書で取りまとめる予定である。なお、今年度末の 3 月 25~26 日の両日には、工学研究科長裁量経費の受給を受けてミシガン大学から複数の教員が参加し、工学研究科機械理工学専攻並びにマイクロエンジニアリング専攻からの教員が参加して、本年度 2 回目のジョイントワークショップの開催が京都大学桂キャンパスで予定されている。

なお上記以外に、オランダのデルフト工科大学 Industrial Design Engineering 研究科、シンガポールの国立シンガポール技術デザイン大学 (SUTD: Singapore University of Technology and Design)、イタリアのミラノ工科大学 (Politecnico di Milano)、デンマークの Copenhagen Business School 等についてのデザイン白書執筆も隨時進めている。

7.3 海外調査・交流

7.3.1 京都大学—リーズ大学国際シンポジウムの開催

京都大学の総長裁量経費の受給を受けて、2018年9月17日～19日に英国リーズ大学にて、京都大学国際シンポジウム「自然災害の監視・軽減・防止・復興のための工学の最先端」が開催された。本学からは、稻葉カヨ理事・副学長をはじめ、教員、職員19名が参加し、両大学の工学研究科を中心に、研究・教育交流のより実質的な進展を図るために本シンポジウムを企画し、開催に至った。シンポジウムでは、榎木哲夫副工学研究科長が京都大学の概要説明を行い、併せて、「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」も紹介された。さらに社会基盤工学専攻立川康人教授からは、自然災害の監視・軽減・防止・復興に関する学際的な教育・研究に関する発表がされた。シンポジウムの締めくくりでは、リーズ大学との今後の教育研究両面での連携について協力していくことが確認された。2020年6月に両大学院はシンポジウムを開催予定している。

このシンポジウムでは、研究者間の関係を深めるために、4つのグループに分かれ、初日夕方から2日目午前中まで、研究発表と討議が行われた。4つのグループテーマは以下の様であった。

- (1) Data-centric & human-centric design of resilient socio-technical systems using participatory systems approach and AI,
- (2) Robotic innovation for disaster management and human-robot collaboration,
- (3) Advancement of structural and geotechnical engineering for natural disaster identification, mitigation, prevention and response,
- (4) Interdisciplinary approach to mitigate/prevent water-related disasters

これらのグループセッションでは、(1) それぞれの分野の最先端は何か、(2) 研究と社会的要請のギャップは何か、(3) 社会実装のための研究の必要性の順位付け、(4) 学際的研究の必要性、を共通テーマとして議論がなされ、さらに共同研究のテーマやワークショップの計画が議論された。また、京都大学で実施中のリーディング大学院や申請準備中の卓越大学院プログラムをはじめとする学際教育プログラムにおけるリーズ大学との今後の連携についても協議していくことが確認された。

上記の(1)のグループテーマでは、卓越大学院申請に向けたリーズ大学との協議が進められ、京都大学からは、Dr. Yusuke Takahashi、Prof. Norio Maki、Prof. Sadao Kurohashi、Prof. Hiroyuki Matsui、Prof. Tesuo Sawaragi の5名が、リーズ大学からは、Prof. Alison McKay、Dr. Katy Wright、Prof. Anthony (Tony) G Cohn、Dr. Natalie Van Der Wal、Dr. Bill Murphy の6名が参加し、次のテーマについて議論を行った。

- Discussed about a concept of Resilience from multiple disciplines (Sociology, Socio-Technical Systems, Safety-Engineering, Disaster Mitigation, …): “avoiding downward trajectories”
- Personalities of the aged people (O/C/E/A/N), and social loneliness of aged people
- Community Resilience for Disaster Management and Aging Society
- Tools: Automated Reasoning (DSS), Multi-agent simulation, AI for NL, “Chatbot” enabling social communication contributing to connecting people and Gaming.



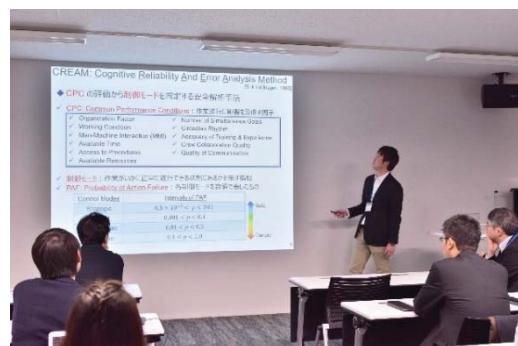
京都大学一リーズ大学国際シンポジウムでのグループセッション参加者

7.4 学学連携

7.4.1 東北大学電気通信研究所－京都大学デザインスクール合同ワークショップ

昨年度に引き続き 2 回目の開催となる東北大学電気通信研究所と京都大学デザインスクールによる「デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ」(東北大学電気通信研究所平成 30 年度共同プロジェクトによる経費で実施：研究代表者 植木哲夫教授、通研対応教員：北村喜文教授) が 2019 年 1 月 23 日にデザインイノベーション拠点にて開催された。

東北大学電気通信研究所では、1935 年の設置以来、アンテナ、磁気記録、半導体・光通信をはじめとし、現代の情報通信の基盤となる多くの研究成果を先駆けて挙げ、世界をリードする活動を続けてきた。しかし、このような技術シーズを基にするボトムアップ的なものづくりの手法には、その限界が見え始めてきており、最近では人間性豊かなコミュニケーションを実現するという目標から、要素技術をトップダウンで統合することにより、どのような体験をさせるかという最上位の目標から環境設計が有効であることが明らかとなりつつある。一方で、デザイン学にとって未知の電気通信システムという分野にこれまでの経験に基づいてチャレンジすることにより、新たな問題発見と解決法を見出すことができるとともに、デザイン学に基づいたコミュニケーション環境の技術や設計方法論に対する新たなブレークスルーおよび産業展開が期待される。このような背景を受けて、東北大学電気通信研究所が有する電気通信分野における要素技術に対して、デザイン学の知見を活用することで、これまでのデザイン学の視野を深め、より一層発展させることで、相乗効果が期待できる。今年度の発表は、京都大学から 5 件、東北大学から 7 件の発表がされた。参加者は 14 名であった。



デザイン学履修生による発表

下記に合同シンポジウムのプログラムを示す。

第2回デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ

日時：2019年1月23日（水）13:45～18:05（18:30～懇親会）

場所：京都大学デザインイノベーション拠点

プログラム

(1) 13:45-13:50 開会挨拶

京都大学工学研究科機械理工学専攻 樋木 哲夫（京都大学工学研究科）

(2) 13:50-15:10 セッション1

「注意による情報選択と行動選択」

東北大学電気通信研究所所長 塩入 諭 教授

「時系列体験データのオンラインメントによるセンスメイキングとストーリー生成」

京都大学デザイン学リーディング大学院 中小路 久美代 特定教授

「ストカスティック演算に基づく省エネルギー脳型LSIの展望」

東北大学電気通信研究所 鬼沢 直哉 助教

「ワイヤレスポンプとその医療応用」

東北大学電気通信研究所副所長 石山 和志 教授

(3) 15:15-16:35 セッション2

「車輪式移動装置用の全方向移動機構と統合型モータ機構の研究」

京都大学工学研究科 機械理工学専攻

小森 雅晴 教授・寺川 達郎 氏（博士デザイン学履修生）

「磁気式3次元モーションセンサシステムの試作とそのさまざまな分野への応用」

東北大学電気通信研究所副所長 北村 喜文 教授

「デザインプロセスの複合的・構造的記述の試み」

京都大学デザイン学リーディング大学院 北 雄介 特定講師

「空間連動する2つのカメラ視点を用いたドローン操縦インターフェースの拡張」

東北大学電気通信研究所 高嶋 和毅 准教授

(4) 16:40-18:00 セッション3

「Interpersonal Communication on the Japanese Concept “MA”」

東北大学電気通信研究所 曾 加蕙（Chia-huei Tseng）准教授

「アナログゲームに関する大規模調査結果分析」

京都大学経営管理大学院 松井 啓之 教授

「多様な働き方に対応する空間ユーザインタフェース」

東北大学電気通信研究所 藤田 和之 助教

「機能共鳴分析手法に基づく社会・技術システムの安全評価シミュレータの開発」

京都大学工学研究科 機械理工学専攻

樋木 哲夫 教授・廣瀬 貴之氏（博士デザイン学履修生）

(5) 18:00-18:05 閉会挨拶

東北大学電気通信研究所副所長 北村 喜文 教授

(6) 18:30- 懇親会

7.5 博士課程教育リーディングフォーラム 2018

「博士課程教育リーディングフォーラム」は、全国の博士課程教育リーディングプログラムの学生や教員間の情報共有、また産業界の人々との交流の場として、毎年開催されている。2018年度は東京工業大学と一橋大学が主催、日本経済団体連合会が後援して12月4日に開催された。既に補助金が終了した第1期のリーディングプログラムにも参加が呼びかけられており、各リーディングプログラムで蓄積された様々な資産の共有を今後も継続していくことが主な目的の一つであった。本プログラムからは履修者1名（情報学研究科社会情報学専攻L1）と教員1名が参加した。

フォーラムは例年よりコンパクトな形で開催された。冒頭の特別講演のほか、セッションAでは「社会に新しい価値を実装する」をテーマに、学生チームによるポスター発表、ファイナリストによるプレゼンテーションなどが行われた。また、セッションBでは「リーディングプログラム資産を将来に活かすために」をテーマに、学生や教員による分科会やパネルディスカッションが行われた。



パネルディスカッションの様子

付録1 プログラムの教員

デザイン学リーディング大学員構成員（プログラム担当者含む）（2019年3月時点）

石田 亨 プログラムコーディネータ／情報学研究科 社会情報学専攻 教授
楠見 孝 教育学研究科教育学環専攻 教授
齊藤 智 教育学研究科教育学環専攻 教授
Manalo, Emmanuel 教育学研究科教育学環専攻 教授
野村 理朗 教育学研究科教育学環専攻 准教授
林 康裕 工学研究科建築学専攻 教授
神吉 紀世子 工学研究科建築学専攻 教授
三浦 研 工学研究科建築学専攻 教授
竹脇 出 工学研究科建築学専攻 教授
原田 和典 工学研究科建築学専攻 教授
竹山 聖 工学研究科建築学専攻 教授
平田 晃久 工学研究科建築学専攻 教授
榎木 哲夫 工学研究科機械理工学専攻 教授
西脇 真二 工学研究科機械理工学専攻 教授
富田 直秀 工学研究科機械理工学専攻 教授
松野 文俊 工学研究科機械理工学専攻 教授
小森 雅晴 工学研究科機械理工学専攻 教授
松原 厚 工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
田畑 修 工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
泉田 啓 工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
藤本 健治 工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
西田 豊明 情報学研究科知能情報学専攻 教授
黒橋 祐夫 情報学研究科知能情報学専攻 教授
熊田 孝恒 情報学研究科知能情報学専攻 教授
河原 大輔 情報学研究科知能情報学専攻 准教授
中澤 篤志 情報学研究科知能情報学専攻 准教授
川上 浩司 情報学研究科知能情報学専攻 特定教授
守屋 和幸 情報学研究科社会情報学専攻 教授
吉川 正俊 情報学研究科社会情報学専攻 教授
大手 信人 情報学研究科社会情報学専攻 教授
松原 繁夫 情報学研究科社会情報学専攻 准教授
馬 強 情報学研究科社会情報学専攻 准教授
Adam Jatowt 情報学研究科社会情報学専攻 特定准教授
山本 岳洋 情報学研究科社会情報学専攻 助教
林 冬惠 情報学研究科社会情報学専攻 特定准教授
太田 快人 情報学研究科数理工学専攻 教授
梅野 健 情報学研究科数理工学専攻 教授
佐藤 彰洋 情報学研究科数理工学専攻 特定准教授

田中 利幸 情報学研究科システム科学専攻 教授
佐藤 高史 情報学研究科通信情報システム専攻 教授
守倉 正博 情報学研究科通信情報システム専攻 教授
五十嵐 淳 情報学研究科通信情報システム専攻 教授
新熊 亮一 情報学研究科通信情報システム専攻 准教授
松井 啓之 経営管理大学院 教授
原 良憲 経営管理大学院 教授
若林 直樹 経営管理大学院 教授
山内 裕 経営管理大学院 准教授
平本 豪 経営管理研究部附属経営研究センター 特定講師
多々納 裕一 防災研究所社会防災研究部門 教授
牧 紀男 防災研究所社会防災研究部門 教授
中村 裕一 学術情報メディアセンター 教授
緒方 広明 学術情報メディアセンター 教授
笠原 秀一 学術情報メディアセンター 特定講師
喜多 一 国際高等教育院／学術情報メディアセンター 教授
永田 素彦 人間・環境学研究科共生人間学専攻 教授
黒田 知宏 医学部附属病院医療情報企画部 教授
条 直人 医学研究科 特定准教授
土佐 尚子 大学院総合生存学館 特定教授
阿久津達也 化学研究所 バイオインフォマティクスセンター 教授
塩瀬 隆之 総合博物館 准教授
高橋 雄介 白眉センター 特定准教授
古本 淳一 生存圏研究所生存圏診断統御研究系 助教
市村 賢士郎 国際高等教育院附属データ科学イノベーション教育研究センター 特定助教
中小路久美代 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特定教授
十河 卓司 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特任准教授
北 雄介 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特定講師
山本 恭裕 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特定教授
田中 克己 情報学研究科 非常勤講師／名誉教授
村上 陽平 工学研究科 非常勤講師／情報学研究科 非常勤講師／
立命館大学情報理工学部 准教授
野崎 優樹 教育学研究科 非常勤講師／甲南大学文学部 講師
須永 剛司 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特任教授／
東京藝術大学 美術学部 教授
貫井 孝 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特任教授
寺田 知太 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 非常勤講師
／株式会社 NRI デジタル デジタルビジネス企画部 部長
中川 智絵 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特任助教
白石 晃一 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 非常勤講師
／京都造形芸術大学芸術学部 情報デザイン学科 講師

辰巳 明久 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 非常勤講師
／京都市立芸術大学美術研究科 教授

木村 千恵子 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特任教授

大島 裕明 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特任准教授
／兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科 准教授

富山 哲男 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特命教授／
クラシフィールド大学 客員教授

濱口 秀司 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特命教授／
monogoto Inc. CEO／Ziba Design Inc. エグゼクティブフェロー

中津 良平 大学院横断教育プログラム推進センター デザイン学リーディング大学院 特命教授／
株式会社 NT アソシエイツ 代表取締役社長

付録2 業績リスト（講演・出版）

1. デザイン学構成員

(1) 教育活動にかかる講演（抜粋）

※下線はデザイン学履修者

(i) デザイン学主催イベントでの講演

1. 中小路久美代. 時系列体験データのアライメントによるセンスマイキングとストーリー生成. 第2回デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ, 京都大学デザインイノベーション拠点, 2019.1.23
2. 北雄介. デザインプロセスの複合的・構造的記述の試み. 第2回デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ. 京都大学デザインイノベーション拠点, 2019.1.23
3. 松井啓之. アナログゲームに関する大規模調査結果分析. 第2回デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ. 京都大学デザインイノベーション拠点, 2019.1.23
4. Toru Ishida. Cooperative Graduate Program in Design: The Status Quo (邦題: デザイン学プログラムの経緯と現状). International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
5. Tetsuo Sawaragi. The Future and Visions of the Cooperative Graduate Program in Design (邦題: デザイン学プログラムの展開と展望). International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.

(ii) その他の講演

6. 石田亨. デザインスクールとその人材育成. 立命館大学理工学研究所学術講演会, 2018.11.28
7. 楠見孝. 福島第一原発事故による食品の放射線リスクへの態度: 8 波パネル調査データによる 3 地域差と 7 年間の推移の検討. 第 31 回日本リスク研究学会年次大会, コラッセふくしま, 福島市. 2018.11.11.
8. 楠見孝. 叡智知識と好奇心, Grit, 加齢との関係. 日本心理学会第 82 回大会, 東北大学, 仙台市. 2018.9.27.
9. 楠見孝. 人と AI 協働社会の認知に及ぼすコンピュータ経験と不安の影響. 日本認知心理学会第 16 回大会, 立命館大学, 高槻市, 2018.9.1.
10. 齊藤智. Statistical Learning for working memory functioning. The 4th NTU-Kyoto University International Symposium of Understanding Self and Its Interaction with Social and physical Environments, Kyoto University (Inamori Foundation Memorial Hall), Kyoto. 2018.12.9.
11. 齊藤智. ワーキングメモリと長期的知識. 第 44 回 全国英語教育学会京都研究大会・課題研究フォーラム, 龍谷大学 大宮キャンパス, 京都市, 2018.8.25.
12. 齊藤智. ワーキングメモリを鍛えることができるのか?. 全国スクールリーダー育成研修 E.FORUM 2018, 京都大学, 京都市. 2018.8.17.
13. 野村理朗. 「無心」と「乱心」からみるポジティブ心理学. 第 2 回ポジティブ心理学研究会, 東洋大学白山キャンパス, 東京 2018.2.17. (特別招待講演)
14. 野村理朗. シンポジウム「『無心』の心理学」(企画・司会) 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター. 2018.9.26.

15. 野村理朗. 畏敬の念、あるいは”心の迷い”から見る人間本性と可塑性. 人工知能と倫理・社会研究会, 国際高等研究所. 2018.6.9. (招待講演)
16. Yusuke Takahashi. Psychological contributions for the resilient super-elderly society. Kyoto University-The University of Leeds International Symposium. Weetwood Hall Estate, Leeds, UK. 2018.9.17-19.
17. Yusuke Takahashi. Direction of causation modeling on the links between Conscientiousness and psychopathology during adolescence. Annual Conference of the British Society for the Psychology of Individual Differences, Edinburgh, UK. 2018. 7.12.
18. Yusuke Takahashi & Jean-Baptiste Pingault. Genetic and environmental bi-factorial contributions on depressive symptoms. Workshop on the analysis of twin data in health research. Odense, Denmark. 2018.5.14-17.
19. Tetsuo Sawaragi. Data- & Human-Centric Design of Resilient Community and Aging Society Using Gaming and AI, University of Leeds-Kyoto University International Symposium, University of Leeds, UK, Leeds, UK. 2018.9.17.
20. 樋木哲夫. Human- and Data-Centric Innovations for “Society 5.0”, 日本設計工学会関西支部第 193 回・研究・イノベーション学会関西支部第 13 回合同研究会, 大阪電気通信大学駅前キャンパス, 寝屋川市 2018.8.27.
21. 樋木哲夫. 国際自動制御連盟世界大会 2023 への展望. NPO 法人シンビオ社会研究会主催シンビオ 20 周年記念講演会, 京都大学百周年記念時計台会館, 京都市. 2018. 4.27.
22. Naoya Hatano, Masaya Higaki, Yohei Otsu; Tatsuya Otsu, Shinji Mikami, Mitsuhiro Matsumoto, Daisuke Kono, Atsushi Matsubara, Naohide Tomita. Destruction Energy Index (DEI) of vitamin E-blended UHMWPE. International Society for Technology in Arthroplasty – ISTA, Queen Elizabeth II Centre, London. 2018.10.11.
23. Yohei Otsu, Shinji Mikami, Masaya Higaki, Tatsuya Otsu, Naoya Hatano, Mitsuhiro Matsumoto, Daisuke Kono, Atsushi Matsubara, Naohide Tomita. Start-up friction testing for evaluating tribological performance of cartilage. International Society for Technology in Arthroplasty – ISTA, Queen Elizabeth II Centre, London. 2018.10.11.
24. Shoji Tatehata, Naohide Tomita, Yasushi Tamada, Akira Tatsumi, Rin Hiraiwa, Yusuke Arima. Chondrocytes on CH3-SAMs form cell aggregation as on the fibroin substrate. International Society for Technology in Arthroplasty – ISTA, Queen Elizabeth II Centre, London. 2018.10.11.
25. Masaya Higaki, Yohei Otsu, Naoya Hatano, Shinji Mikami, Tatsuya Otsu, Mitsuhiro Matsumoto, Atsushi Matsubara, Daisuke Kono, Naohide Tomita. Proposal of Destruction Energy Index for evaluating tribological performance of joint. International Society for Technology in Arthroplasty – ISTA, Queen Elizabeth II Centre, London. 2018.10.11.
26. Tatsuya Akutsu. Algorithms for Analysis and Control of Boolean Networks. 5th International Conference on Algorithms for Computational Biology, The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, China. 2018.6.25-26.
27. 山内裕. サービスの相互主観的闘争とデザインへの含意. 経営情報学会全国研究発表大会. 近畿大学東大阪キャンパス. 東大阪市. 2018.10.21. (特別講演)
28. 黒田知宏. 医療情報の活用からデジタルヘルスへ. 日本乳癌学会学術総会, 国立京都国際会館, 京都. 2018.5.16.

29. Tomohiro Kuroda. Future Direction of Medical Record due to Introduction of IoT. Japanese-German EHRS Symposium. University of Applied Sciences and University of Osnabrück – HealthCampus, Osnabrück/Germany, 2018.9.3.
30. Tomohiro Kuroda. Healthcare of IoT Age, International Conference of u-Healthcare, Kyoto University, Kyoto/Japan. 2018.12.13.
31. Tomohiro Kuroda. Healthcare of IoT Age, International Conference of u-Healthcare, Kyoto University, Kyoto/Japan. 2018.12.13.
32. 川上浩司. デザインスクールとモノづくり. 第 62 回システム制御情報学会研究発表講演会, 京都テルサ, 京都市. 2018.5.16. (招待講演)
33. 川上浩司. 不便益とは? -新たな価値のデザイン. 日本機械学会 2018 年度年次大会 市民フォーラム, 関西大学, 高槻市. 2018.9.9.
34. 川上浩司. あらためて Human Centered Design の意味を考える. 人間中心設計推進機構 フォーラム 2018, 東海大学, 東京. 2018.11.30. (基調公演)
35. 北雄介. デザインを志向するワークショップの設計に関する試論と事例. 第 65 回日本デザイン学会研究発表大会, 大阪工業大学梅田キャンパス, 大阪市. 2018.6.24.
※グッドプレゼンテーション賞受賞
36. 北雄介. 外部空間における人間行動の記録と分析 一外部空間の連担した郊外住宅地「サトヤマヴィレッジ」の研究(1). 2018 年度日本建築学会大会学術講演会, 東北大大学川内北キャンパス, 仙台市. 2018.9.4.
37. 須永剛司. 社会を形づくること : デザインが社会的なプロセスになること, 第 5 回デザイン基礎学セミナー「社会を形づくること : デザインが社会的なプロセスになること」, 九州大学大学院芸術工学研究院, 福岡市. 2019.1.25
38. 佐藤彰洋. ストリーテリングに用いる方法 : ペルソナデザインとジャーニーマップ. データ活用講座～データストーリーテリング 入門編～, 京都アカデミアフォーラム in 丸の内, 東京. 2018.12.17.
39. 佐藤彰洋. 日常生活をデータから見てみる～社会生活基本調査を用いて～. データ活用講座～データストーリーテリング 入門編～, 京都アカデミアフォーラム in 丸の内, 東京. 2018.12.17.
40. 佐藤彰洋. ペルソナ設計と日常生活のジャーニーマップの作成. データ活用講座～データストーリーテリング 入門編～, 京都アカデミアフォーラム in 丸の内, 東京. 2018.12.17.
41. 佐藤彰洋. ビッグデータ参照モデルからみるビッグデータ統合利活用 : 統計情報可視化システム MESHSTATS の事例. 京都ビックデータ活用プラットフォーム第 2 回会議、京都ガーデンパレス、京都. 2018.12.26.
42. 土佐尚子, Pan Yunian, 中津良平. Looking for Japankara～日本の美しい光を探して～ 第 148 回微小工学研究会, 2018.5.18. (特別講演)
43. 中津良平. 音声研究からアート&テクノロジー研究へ, 光感性専門委員会講演. 2018.7.5.
44. 中津良平. アジア化する世界～21 世紀の潮流～, 日本学術会議 in 京都講演, 2018.12.22.
45. 土佐尚子, 中津良平. 選手の声や観客の声援のアートによる可視化, レーザー学会学術講演会 第 39 回大会講演予稿集. 2019.1.12.
46. 中津良平. 可動型プロジェクションマッピング 技法. LED 総合フォーラム in 徳島講演. 2019.2.23.
47. 土佐尚子. Invisible Beauty : 陰翳礼讃, LED 総合フォーラム in 徳島講演. 2019.2.23.

(2) 教育活動にかかる出版（抜粋）

(i) 図書

1. 楠木哲夫（編），楳木哲夫，松原厚，川上浩司，堀口由貴男（著）.『アーティファクトデザイン』（京都大学デザインスクールテキストシリーズ3巻），共立出版，2018.4.21.
2. 田中克己，黒橋禎夫（編），『情報デザイン』（京都大学デザインスクールテキストシリーズ4巻），共立出版，2018.5.
3. 田中克己，楠見 孝. 情報信頼性，田中克己，黒橋禎夫（編）『情報デザイン』9章. 共立出版. 2018.5.
4. 楠見孝（編）.『教育心理学』（教職教養講座 第8巻），協同出版，2018.6.
5. 高橋雄介. 教育と個人差. 楠見孝（編）『教育心理学』（教職教養講座 第8巻），第3章，pp.43-54). 協同出版. 2018.6.
6. 高橋雄介. 人の行動はどこまで遺伝の影響を受けているのか. 大渕 憲一（編著）『こころを科学する—心理学と統計学のコラボレーション』（クロスセクショナル統計シリーズ9），第5章, pp. 116-151. 共立出版. 2019.3.
7. 楠木哲夫.“人を中心とした”システムとの共創. 横幹〈知の統合〉シリーズ編集委員会編，『ともに生きる地域コミュニティ：超スマート社会を目指して』（横幹〈知の統合〉シリーズ）第7章，東京電機大学出版局. 2018.10.
8. Yamauchi, Y. Service as Intersubjective Struggle, In Maglio, P. P., Kieliszewski, C. A., Spohrer, J. C., Lyons, K., Patricio, L. & Sawatani, Y. (Eds.). Handbook of service science, Volume II. New York: Springer, pp. 811-837. 2018.
9. Holt, R., & Yamauchi, Y. Craft, Design and Nostalgia in Modern Japan—The Case of Sushi. In E. Bell, G. Mangia, S. Taylor, & M. L. Toraldo, The Organization of Craft Work Identities, Meanings and Materiality. Routledge, London. (in press, 2018)
10. Aki-Hiro Sato (ed.), Applications of Data-Centric Science to Social Design: Qualitative and Quantitative Understanding of Collective Human Behavior, Springer, Singapore, 2019 (in press), DOI: 10.1007/978-981-10-7194-2

(ii) 論文・解説

1. 當間愛晃，山田孝治，遠藤聰志，十河卓司，石田亨. 社会課題に取り組むワークショップとその効果—琉球大学・京都大学合同デザインスクールの経験—. 電信情報通信学会 - IEICE会誌, Vol.102, No. 2 pp. 172-178, 2019.2.
2. 楠見孝. 批判的思考への認知科学からのアプローチ. 認知科学 25(4), pp.461-474, 2018.12.
3. 楠見 孝. リテラシーを支える批判的思考：読書科学への示唆. 読書科学 60(3) pp.129-137, 2018.9
4. 楠見 孝, 米田 英嗣. “聖地巡礼”行動と作品への没入感：アニメ、ドラマ、映画、小説の比較調査, コンテンツツーリズム学会論文集 5, 2-11, 2018.
5. Maehara, Y., Saito, S., & Towse, J. N. Joint cognition and the role of human agency in random number choices. Psychological Research (in press)
6. Tanida, Y., Nakayama, M., & Saito, S. The interaction between temporal grouping and phonotactic chunking in short-term serial order memory for novel verbal sequences. Memory (in

- press)
7. Morita, A., & Saito, S. Homophone advantage in sentence acceptability judgment: An experiment with Japanese kanji words and articulatory suppression technique. *Journal of Psycholinguistic Research* (in press)
 8. Manalo, E., & Kapur, M. (Guest Editors). The role of failure in promoting thinking skills and creativity: New findings and insights about how failure can be beneficial for learning. *Thinking Skills and Creativity*, Volume 30, pp.1-6, December 2018.
<https://doi.org/10.1016/j.tsc.2018.06.001>
 9. Oyama, Y., Manalo, E., & Nakatani, Y. The Hemingway effect: How failing to finish a task can have a positive effect on motivation. *Thinking Skills and Creativity*, Volume 30, pp.7-18. 2018.12.
<https://doi.org/10.1016/j.tsc.2018.01.001>
 10. Chen, O., Manalo, E., & She, Y. Examining the influence of expertise on the effectiveness of diagramming and summarising when studying scientific materials. *Educational Studies*, Volume 45, Issue 1, pp.57-71. 2019. <https://doi.org/10.1080/03055698.2017.1390444>
 11. Sheppard, C., Manalo, E., & Henning, M. Is ability grouping beneficial or detrimental to Japanese ESP students' English language proficiency development? *English for Specific Purposes*, Volume 49, pp. 39-48. 2018.1. <https://doi.org/10.1016/j.esp.2017.10.002>
 12. Keisuke Fukuda, Tetsuo Sawaragi, Yukio Horiguchi. Double-Looped Safety Analysis for Organizational Accidents Combining Activity Theory and Functional Resonance Analysis Methods and its Application to Railway Incidents, *Proceedings of 3rd International Workshop on Functional Modelling for Design and Operation of Engineering Systems*, pp. 26-29, 2018.
 13. Jiarui Li, Yukio Horiguchi, Tetsuo Sawaragi, Refining Fuzzy c-Means Membership Functions to Assimilate A Priori Knowledge of Cluster Sizes, *Proceedings of 2018 Joint 10th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 19th International Symposium on Advanced Intelligent Systems*, pp. 654-659, 2018.
 14. Naoya Hatano; Masaya Higaki; Youhei Otsu; Tatsuya Otsu; Shinji Mikami; Mitsuhiro Matsumoto; Daisuke Kono; Atsushi Matsubara; Naohide Tomita. Destruction Energy Index (DEI) of Vitamin E blended UHMWPE for artificial joints. *Biosurface and Biotribology*, 2019.1.24. DOI:10.1049/bsbt.2018.0027
 15. Weiqi Shen, Naohide Tomita, Miho Niikura, Takuma Sugino. Amount of TNF- α released from macrophages reacting with polyethylene particles showed dose-dependent relationship to the total surface area of added particles. *Biosurface and biotribology*, Volume 4, Issue 4, pp. 122-127, 2018.12. DOI:10.1049/bsbt.2018.0026
 16. Avraham A. Melkman, Xiaoqing Cheng, Wai-Ki Ching, Tatsuya Akutsu. Identifying a Probabilistic Boolean Threshold Network From Samples. *IEEE Transactions on Neural Networks and Learning Systems*, 29, 4, pp. 869-881, 2018.4.
 17. 藤田健一郎, 谷口陽平, 木下善皓, 岡本和也, 竹村匡正, 黒田知宏. システム横断的な抽出・表示機能を備えた医療カンファレンス支援システムの構築. *生体医工学*, vol.56, no.1, pp.1-7. 2018.
 18. 黒田知宏, 黒田佑輝, 陳和夫. 遠隔モニタリングを支える情報システムのあり方について. *日本遠隔医療学会雑誌*, vol.14, no.2, pp.98-100. 2018.
 19. 黒田知宏. システム・デバイスを活用した看護業務を実現するための情報基盤整備の動向. *インナーナビゲーション*, no.38, pp.24-26. 2018.

20. 川上浩司. 建築における不便益, 日本建築学会誌, 2018-9, pp.8-9, 2018.8.
21. Ryohei Nakatsu, Ningfeng Yang, Hirokazu Takata, Takashi Nakanishi, Makoto Kitaguchi, Naoko Tosa, Dynamic Projection Mapping on Multiple Non-rigid Moving Objects for Stage Performance Applications. Entertainment Computing – ICEC2018, LNCS 11112, Springer, pp.3-15. 2018.9.

(3) 教育活動にかかる受賞（抜粋）

1. 王隆基, 楠見孝. 公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞. 「広告画像と商品の覚醒度の一致が購買意図に及ぼす影響：恐怖と懐かしさ画像に基づく検討」, 公益社団法人日本心理学会. 2019.1.11.
2. 齊藤智, 日本ワーキングメモリ学会賞. 日本ワーキングメモリ学会, 2018.12.1.
3. 田中麻未, 高橋雄介. 第27回大会優秀発表賞. 日本パーソナリティ心理学会, 2018.8.26-27. <https://jspp.gr.jp/award-presentation/#27>
4. 平岡 敏洋, 林 乗譽, 川上 浩司. ヒューマンインターフェース学会 論文賞. 「ドライバの潜在的な安全運転態度を測定する改良版日本語 Implicit Association Test」, ヒューマンインターフェース学会, 2018.3.6. <https://www.his.gr.jp/office/gakkaisyou.html#awardpaper2018>

2. デザイン学履修者

(1) 口頭発表

※下線はデザイン学履修者

(i) デザイン学主催イベント

1. 寺川達郎, 小森雅晴. 車輪式移動装置用の全方向移動機構と統合型モータ機構の研究, 第2回デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ, 京都大学デザインイノベーション拠点, 2019.1.23
2. 廣瀬貴之, 楠木哲夫. 機能共鳴分析手法に基づく社会・技術システムの安全評価シミュレータの開発, 第2回デザイン学に基づく電気通信システムの革新ワークショップ, 京都大学デザインイノベーション拠点, 2019.1.23

(ii) 学会、国際会議等

1. 伊川 美保・楠見 孝. 高校生の統計リテラシーと批判的思考態度の育成—知識の習得と活用をうながすアクティブ・ラーニングの実践— 日本心理学会第82回大会, 仙台国際センター, 2018.9.25-27.
2. 市村 賢士郎, 河村 悠太, 木田 恵, 伊川 美保・高橋 雄介・楠見 孝. 仕事における目標・動機づけが働きがいに及ぼす影響: ブルーカラーとホワイトカラーの比較, 日本心理学会第82回大会, 仙台国際センター, 2018.9.25-27.
3. 綾部 宏明・マナロ エマニュエル・野村 理朗・横山 悟・久富 望・伊川 美保. 図表が数学問題解決段階の認知負荷に与える影響, 日本教育工学会第34回全国大会, 東北大学, 2018.9.28-30.
4. 伊川 美保, 楠見 孝. 統計リテラシーの自己効力感尺度の作成, 超異分野学会大阪フォーラム2018, アートホテル大阪ベイタワー, 2018.10.13.
5. 伊川 美保, 楠見 孝. 食品リスクリテラシーと食品選択動機の関係, 日本リスク研究学会第31回年次大会, コラッセふくしま, 2018.11.9-11.
6. 河村悠太・楠見孝. 過剰な利他主義者は評判を獲得できるか(3)－社会的規範の日米文化差に着目して－. 日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会, 神戸, 2018.9.8-9.9.
(口頭発表)
7. Imoto, Y., Fujino, M., Kawasaki, Y., Hu, H. (2018). Emerging Scholars' Panel. International research institute, Kyoto Japan, 4th September 2018. (査読なし)
8. 藤野正寛. 認知神経科学における瞑想研究の可能性. 越川房子・司会, マインドフルネスの新しい地平を拓く 日本心理学会第82回大会, 東北大学, 2018.9.27. (査読有)
9. 藤野 正寛, 上田 祥行, 井上 ウィマラ, 大石 悠貴, 北川 智利, 野村 理朗. 集中瞑想と洞察瞑想が妨害刺激の価値低減効果に与える影響. 日本心理学会第78回大会, 東北大学, 2018.9.26. (査読なし)
10. 藤野正寛. 認知神経科学が示すマインドフルネスのメカニズム. 越川房子(企画代表者) 大会委員会企画シンポジウム『子どもの発達を支えるマインドフルネス』, 日本発達心理学会第30回大会, 早稲田大学, 2019.3.18. (招待講演)
11. 藤野正寛. 「身体の声に気づくことの大切さ」, 市民公開講座第22回ひと・健康・未来シンポジウム 2019 京都, 公益社団法人ひと・健康・未来研究財団, ひと・まち交流館, 京都, 2019.2.16. (招待講演)
12. 藤野正寛. 「身体の声に耳を澄ます」, Zen2.0, 建長寺, 神奈川, 2018.9.8. (招待講演)

13. Yanaoka, K., & Saito, S. Repeated sequential action by young children: Representational flexibility of task context and goal availability. The Korean Society for Cognitive and Biological Psychology, Pusan National University, Korea, 2019
14. Haruka KATO, Kiyoko KANKI *Effectiveness of Walkable Design Indicator from the perspective of Subjective Evaluation on Streets in Sprawl Urban Areas - Toward Smart Shrinking for Sprawl urban areas in North Osaka Metropolitan Region -*, Proceedings of the International Conference on Asian-Pacific Planning Societies 2018, University of Architecture Ho Chi Minh City. 2018.8.23-25.(査読有)
15. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, and Yuya Morita. Motion Analysis and Experiments of Reducer-integrated Motor Using Strain Wave Gearing System. ASME 2018 International Design Engineering Technical Conferences & Computers and Information in Engineering Conference (IDETC/CIE 2018), Quebec City, Canada. 2018.8.29
16. 寺川達郎, 小森雅晴, 森田悠也. 波動歯車装置を用いた減速機構内蔵モータの剛性に関する研究. 日本設計工学会関西支部平成 30 年度研究発表講演会, 大阪電気通信大学, 大阪. 2018.12.15
17. 寺川達郎, 小森雅晴, 阪本充, 河戸祐二. 前後左右への移動が可能な省モータ電動車椅子の開発. 日本設計工学会 2018 年度春季大会研究発表講演会, 東京大学, 東京. 2018.5.27
18. 大倉裕貴, 藤本健治, 斎藤暁生, 池田英俊. 人と機械とのインタラクションを考慮した作業データに基づく経路追従制御について: ベイズ推定を用いたポートハミルトン系の経路追従制御, 第 62 回システム制御情報学会研究発表講演会, 京都, 2018.5.17.
19. Takayuki Hirose, Tetsuo Sawaragi, Yukio Horiguchi: Numerical Simulation of Complex Supply-Chain Systems with an Extended Model of Functional Resonance Analysis Method; Third International Workshop on Functional Modelling for Design and Operation of Engineering Systems, pp. 39-42 Kurashiki Japan, 2018.5. (査読あり)
20. Takayuki Hirose, Tetsuo Sawaragi, Yukio Horiguchi: Numerical Safety Analysis of Complex Supply-Chain Systems Integrating Functional Resonance Analysis Method and Cellular Automaton; The 12th FRAMily meeting/workshop, Cardiff Wales UK, 2018.6. (査読あり)
21. 広瀬貴之, 岩見一樹, 楠木哲夫, 堀口由貴男 : 機能共鳴解析手法を用いた生産工程サプライチェーンのゆらぎ解析 ; 第 62 回システム制御情報学会研究発表講演会, 京都テルサ, 2018.5.
22. 広瀬貴之, 楠木哲夫 : レジリエントな社会・技術システムのデザインのための拡張型機能共鳴解析手法を用いた鉄鋼生産ラインのゆらぎ解析. 日本鉄鋼協会第 176 回秋季講演大会, 東北大学川内キャンパス, 2018.9.
23. 広瀬貴之, 楠木哲夫 : A Quantitative Approach of FRAM: How to Implement the Numerical Simulation ; FRAM 勉強会 2018, IPA: 独立行政法人 情報処理推進機構, 2018.11.
24. 広瀬貴之, 楠木哲夫 : 機能共鳴分析手法 (FRAM) に基づく社会・技術システムの安全評価シミュレータの開発, 平成 30 年シンビオ社会研究会 第 2 回研究談話会, KRP, 2018.12.
25. Kotaro Mori, Daisuke Kono, Atsushi Matsubara, Hidenori Saraie. Implementation of jack bolts with built-in preload sensors for level condition monitoring of machine tool, 8th HPC 2016 – CIRP Conference on High Performance Cutting, Budapest, Hungary, 2018.6.

26. 安藤悠太, オケヨケネディ, 安達泰治. メッシュ構造基板を用いて培養したマウス ES 細胞の始原生殖細胞様分化, 日本機械学会第 31 回バイオエンジニアリング講演会, 郡山中央公民館, 郡山, 2018.12.14-15.
27. 安達真永, 上村知也, 青井伸也, 松野文俊. 横断面上のシンプルモデルを用いた Pace · Trot 歩容の数理解析, 第 62 回システム制御情報学会研究発表講演会, 京都テルサ, 京都, 2018.5.18.
28. 加藤裕樹, 小森雅晴, 堂内貞夫. アクティブオムニホイールの構造と回転伝達機構に関する研究, ロボティクス・メカトロニクス 講演会 2018 in Kitakyushu, 北九州国際コンベンションゾーン, 福岡県北九州市, 2018.6.5.
29. Yudai Kishimoto, Yugo Murawaki , Sadao Kurohashi. A Knowledge-Augmented Neural Network Model for Implicit Discourse Relation Classification. 27th International Conference on Computational Linguistics (COLING2018), Santa Fe Community Convention Center, Santa Fe, New Mexico, USA, 2018.8.21.
30. Tolmachev Arseny, 河原大輔, 黒橋禎夫. 大規模な自動解析データが形態素解析器をどこまで小さくできるか, 言語処理学会第 25 回年次大会 (NLP2019) 名古屋大学 東山キャンパス, 2019.3.13.
31. Mondheera Pituxcoosuvarn, "Machine Translation Usage in a Children's Workshop." In International Conference on Collaboration Technologies, Lisbon, Portugal. September 5-7, 2018
32. Luciano Santos. Pervasive Game Design to Promote an Active Lifestyle among Older Adults Using Social Interaction, 第 153 回ヒューマンインターフェース学会研究会「高齢者、障がい者支援技術および一般 (SIG-ACI-21)」, 京都工芸纖維大学, 京都. 2018.03.27.
33. S. Helou, Understanding the Roles of EMR Systems in Japanese Antenatal Care Settings. Proceedings of the 16th International Conference on Informatics, Management and Technology in Healthcare (ICIMTH), Athens, Greece, 2018.7.
34. S. Helou, G. Yamamoto, and T. Kuroda, "A Socio-Technical Approach to Understanding Electronic Medical Record Systems in their Context of Use." Proceeding of Ubiquitous Healthcare (Uhealth2018), Kyoto, Japan, 2018.12.
35. Kensuke Morris, Goshiro Yamamoto, Shusuke Hiragi, Shosuke Ohtera, Michi Sakai, Osamu Sugiyama, Kazuya Okamoto, Masayuki Nambu, Tomohiro Kuroda. "Designing an Authorization System based on Patient Privacy Preferences", Medical Informatics Europe 2018 (MIE 2018), Gothenburg, SWEDEN, 2018.4.25.
36. 炭谷翔悟. 人を以て鏡と為す逆強化学習, 京都大学第 13 回 ICT イノベーション, 京都大学百周年時計台記念館, 京都. 2019.2.20.
37. Shengyu Liu, Jun Shiomi, Tohru Ishihara, Hidetoshi Onodera. A Software Implementation of Minimum Energy Point Tracking Algorithm for Microprocessors, DA シンポジウム, 山代温泉 ゆのくに天祥, 石川県加賀市. 2018.8.30.

(iii) その他活動

1. 柳岡開地.「乳幼児と他者が目標を共有するまでの発達的変遷」を再検討する. 心理科学研究会近畿地区例会, 龍谷大学, 2018.12.9. (口頭発表)
2. 柳岡開地. スクリプトの柔軟な遂行を支える認知発達メカニズムの解明. 関西認知発達

研究会, 京都教育大学, 2018.9.29. (口頭発表)

3. 柳岡開地. スクリプトの柔軟な遂行を支える認知発達メカニズムの解明. 京都大学鼎会総会, パレスホテル東京, 2018.9.14. (口頭発表)
4. 柳岡開地. スクリプトの柔軟な遂行を支える発達メカニズムの解明. 第3回若手科学者サミット, 日本学術会議・講堂, 2018.6.4. (口頭発表)
5. 柳岡開地. スクリプトの獲得と柔軟な遂行を支える発達メカニズムの解明. 第1回 Cognitive Control 研究会, 京都女子大学, 2018.6.2.
6. 河村悠太. 「他者の目」は利他行動を促進するのか. 第34回広島社会心理学研究会, 広島大学, 2018.6.9. (口頭発表)
7. 藤野正寛. 「マインドフルネスを日常に-セルフケアの進化をデザインする-」, シスマックス創立50周年イベント, シスマックス株式会社技術戦略本部, 2018.10.15.
8. 藤野正寛. 「瞑想の脳科学～身体の声とともに生きる～」, Yogacco ワークショップ, Yogacco, 仙台, 2018.9.29.
9. 藤野正寛. 「瞑想の脳科学」, わにのにわ トーク&ワーク, 神戸, 2018年7月22日.
10. 藤田一照・藤野正寛 (2018). 「仏教を感じる」, 蘇りの地熊野における死と再生ワークショップ, 世界遺産熊野本宮館, 和歌山, 2018.7.13.
11. 藤野正寛. 「苦と向き合うための神経科学」, 蘇りの地熊野における死と再生講演会, 世界遺産熊野本宮館, 和歌山, 2018.7.12.
12. 藤野正寛. 「身体知の可能性」, LDC イノベーション講座II, 株式会社ラーニングデザインセンター, 東京, 2018.6.29.
13. シンダラシュトン・アンソニーバック・藤田一照・藤野正寛. 「GRACE プログラム2018-GRACE 普及のための指導者研修会-」 Being with Dying ワークショップ, 大阪, 2018.6.9.
14. ジョアンハリファックス, 中野民夫, 藤田一照, 藤野正寛, 「AWARE for transformational Leadership」マインドフルリーダーシップインスティテュート ワークショップ, 東京, 2018.4.21-22, 5.26, 6.30.
15. 加登遼, 「「流れ」に着目したスマートコミュニティとしての居住エリアのデザイン手法に関する研究」立命館大学地域情報研究所「重点プログラム アジア都市論研究会」, 立命館大学大阪茨木キャンパス, 2018.11.30
16. 楊媛媛. セルフディレクションスキルを向上することで社会人の学習と健康を支援するシステム, 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2018. 一橋講堂, 東京, 2018.12.4

(2) ポスター発表

(i) デザイン学主催イベント

1. Shengyu Liu. A Voltage Scaling System Enabling Minimum Energy Operation of Processors, ICT イノベーション, 京都大学百周年記念館, 京都, 2019.2.20
2. Samar El Helou. Redesigning Electronic Medical Record Systems. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
3. Mondheera Pituxcoosuvarn. Intercultural Collaboration Support System. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University,

- 2019.3.19.
4. Luciano Santos. Evaluating design of pervasive games to promote active lifestyles among elderly people: a social interaction study. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 5. Miho Ikawa. Measurement and development of statistical literacy (邦題：統計リテラシーの測定と育成) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 6. Masahiro Fujino. Design the secure mindfulness (邦題：安心感のあるマインドフルネスをデザインする) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 7. Haruka Kato. Study on urban evaluation indicator focused on walkability in sprawl areas in metropolitan areas. (邦題：大都市圏スプロール市街地におけるウォーカビリティに着目した都市評価指標に関する研究) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 8. Yudai Kishimoto. A Knowledge-Augmented Neural Network Model for Implicit Discourse Relation Classification. (邦題：一般常識を用いた非明示的な談話関係解) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 9. Tolmachev Arseny. Improving fidelity of Japanese basic analysis. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 10. Tetsuro Terakawa. Omnidirectional Mobile Mechanisms and Integrated Motor Mechanisms for Wheeled Locomotion Devices (邦題：車輪式移動装置用の全方向移動機構と統合型モータ機構の研究) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 11. Yuki Okura. A Young Engineer's Rambling Note on Control Engineering and "Design" (邦題：制御工学と「デザイン学」についての一考察) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 12. Kaichi Yanaoka. Repeated Sequential Action by Young Children: Representational Flexibility of Task Context and Goal (邦題：幼児期におけるルーティン獲得メカニズム：文脈情報と目標利用性の観点から) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 13. Victoria Abou-Khalil. Identifying the vocabulary learning needs of Syrian refugees in different stages of their journey. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 14. Coleman YU. Time Series Mining and its application. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 15. Lukman Heryawan. Cognitive-efficient user interface for the template based progress note in the Electronic Medical Record (EMR). International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 16. Kensuke Morris. Designing a Patient Information Transfer System within Emergency

Departments. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.

17. Yohei Kiyoyama. Design for Dynamism of Contemporary Landscape / Region with Vestiges (邦題:「跡形」に着目した創造的变化を許容する现代風景/地域デザイン—京都市伏見区中書島を事例として) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
18. Kotaro Mori. Modeling of machine tool level adjustment operation (邦題:工作機械レベル調節作業のモデル化) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
19. Takayuki Hirose. Building FRAM Model on the Basis of Complex Adaptive Systems (邦題:複雑適応系を模した機能共鳴解析手法のモデル構築) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
20. Naoto Yamaguchi. Hidden Environment for Children Active Play in Historical City Area (邦題:歴史的市街地に潜む子どもの活動的遊び環) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
21. Weiya Chen. Measurement of driver's mental workload in partial autonomous driving. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
22. Feiqi Wang. Comparison of Pseudo-knotted RNA Secondary Structures based on a New Data Transformation Algorithm. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
23. Shogo Sumitani. Optimal Control and Inverse Optimal Control as EM (邦題:EM アルゴリズムとしての順・逆最適制御) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
24. Huiyong Li. LET's GOAL: Toward to Goal Oriented Active Learner. LET's GOAL: (邦題:健康・学習データを用いて、自主学習支援システム) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
25. Satoru Nishiyama. Retrieval Stopping Can Reduce Arousal of Aversive Memories (邦題:記憶検索の抑止は不快な記憶によって感じる覚醒度を低下させる) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
26. Mau Adachi. Torsional body flexibility affects on quadrupedal pacing and trotting : mathematical analysis using a simple dynamical model. (邦題:四足歩行における体幹のねじり柔軟性と歩容の関係性 — シンプルモデルを用いた数理解析) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
27. Shengyu Liu. A Voltage Scaling System Enabling Minimum Energy Operation of Processors (邦題:最小のエネルギーでプロセッサを稼働させる電圧制御システム) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
28. Kanako Akagi. The influence of "expectation" between married couple on career design (邦題:夫婦間の「期待」がキャリア・デザインに与える影響) . International Design Symposium

- in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
- 29. Miho Nishiguchi. The effect of visual information on sentence production (邦題：単文産出過程に及ぼす視覚情報の影響) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 - 30. Yuan Yuan Yang. GOAL: A System to Support College Students' Learning and Health By Promoting Their Self Direction Skills. International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.
 - 31. Kohei Abe. Constructing corpus with Predicate Argument Structure annotation by crowdsourcing (邦題：クラウドソーシングを用いた日本語述語項構造コーパスの構築) . International Design Symposium in Kyoto 2019 (IDS Kyoto 2019), Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University, 2019.3.19.

(ii) 学会、国際会議等

- 1. 河村悠太, 楠見孝. 過剰な利他主義者は評判を獲得できるか (2) 一社会的規範の調整効果一. 日本心理学会第 83 回大会, 仙台, 2018.9.25-9.27.
- 2. 河村悠太, 楠見孝. 規範の厳格さと教室秩序の関連 一PISA2015 年調査・社会調査データの二次分析による検討一. 日本社会心理学会第 59 回大会, 大阪, 2018.8.28.-8.29.
- 3. 市村 賢士郎, 河村 悠太, 枡田 恵, 伊川 美保・高橋 雄介・楠見 孝. 仕事における目標・動機づけが働きがいに及ぼす影響：ブルーカラーとホワイトカラーの比較, 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター, 2018.9.25-27.
- 4. Yanaoka, K., Moriguchi, Y., Saito, S. Goal neglect and inhibitory control in preschoolers Society for Research in Child Development, Baltimore, USA, 2019
- 5. Ishiguro, S., Saito, S. The organization effect in the reading span task: When and how it occurs?, Psychonomic Society's 59th Annual Meeting, New Orleans, U.S.A. 2018.
- 6. 石黒翔, 齊藤智. 日本語のモーラ数を計数するシェルスクリプトプログラムの提案. 認知心理学会第 16 回大会, 大阪, 2018.9.1.
- 7. 平岡大樹, 野村理朗. 乳児泣き声の制御困難性がストレス反応に与える影響, 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター, 宮城, 2018.9.27.
- 8. 平岡大樹, 王隆基, 岩城帆乃花, 大坂陽子, 小島七海, 野村理朗. 連続したストレス場面における共感とストレスの双方向, 日本社会心理学会第 59 回大会, 追手門学院大学, 大阪, 2018.8.28.
- 9. Nishiyama, S., Saito, S. An experimental attempt to facilitate memory retrieval through inhibition of competing items. 30th Annual Convention of the Association for Psychological Science, 2018.5.24-27.
- 10. Nishiyama, S., Nishiguchi, M., Sakata, C., Watanabe., T., Aoki, T., Shimazu, N., Mizuno, R., Saito, S. Retrieval stopping can reduce arousal of aversive memories. International Convention of Psychological Science, 2019.3.7-9.
- 11. 西山慧, 齊藤智. 記憶の検索は競合する記憶の抑制によって促進されるか, 日本認知心理学会第 16 回大会, 立命館大学, 2018.9.1-2.
- 12. 西山慧, 齊藤智. 抑制による記憶の活性速度の低下—逐次サンプリングモデルを用いた検討—, 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター, 2018.9.25-27.

13. 西口美穂, 楠見孝. 単文産出過程における視覚情報の役割. 日本心理学会第 82 回大会, 仙台国際センター, 宮城, 2018.9.25-27.
14. 寺川達郎, 小森雅晴, 阪本充, 河戸祐二. アクティブオムニホイールを用いた省モータ前後左右移動パーソナルビークルの開発. 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018, 北九州国際コンベンションゾーン, 福岡. 2018.6.2
15. 森幸太郎, 河野大輔, 松原厚, 支持荷重の測定誤差が工作機械のレベル誤差推定に与える影響, 2018 年度精密工学会秋季大会学術講演会, 函館, 2018.9.
16. Yuta Ando, Kennedy Okeyo, Taiji Adachi. Adhesion-restricted microstructured mesh sheets induce spontaneous differentiation and cyst formation by mESCs, 8th World Congress of Biomechanics (WCB2018), Convention Centre Dublin, Dublin, Ireland, 2018.7.8-12.
17. Yuta Ando, Kennedy Omondi Okeyo, Taiji Adachi. Spontaneous differentiation to primordial germ cell-like cells and cyst formation from mES cells with microstructured mesh culture, 5th TERMIS World Congress 2018, Kyoto International Conference Center, Kyoto, Japan, 2018.9.6.
18. Yudai Kishimoto, Shinnosuke Sawada, Yugo Murawaki, Daisuke Kawahara, Sadao Kurohashi. Improving Crowdsourcing-Based Annotation of Japanese Discourse Relations. 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC2018), Phoenix Seagaia Resort, Miyazaki, Japan, 2018.5.11.
19. Arseny Tolmachyev, Daisuke Kawahara, Sadao Kurohashi. Juman++: A Morphological Analysis Toolkit for Scriptio Continua, Proceedings of EMNLP 2018: Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing, System Demonstrations, pp.54--59, Brussels, Belgium, 2018.11.3.
20. Coleman YU. Aligning gene expression time series with invariance to uniform scaling with multiple scaling factors, Bioinformatics and Systems Biology (IBSB), 2018.7.16-18.
21. 王菲琪. A New Method for Transforming Pseudo-knotted RNA Secondary Structures into Trees, 第 7 回生命医薬情報学連合大会 (IIBMP2018) , 荘銀タクト鶴岡, 鶴岡アートフォーラム, 鶴岡市, 2018.9.20.

(3) 出版

(i) 図書

1. 藤野正寛. 2 つの瞑想技法と 4 つの心理的過程 佐渡充洋・藤澤大介 (編著) マインドフルネスを医学的にゼロから解説する本, 日本医事新報社. 2018
2. 藤野正寛. chapter 6 瞑想の神経科学と体験的理解の重要性 飯塚まり (編) 進化するマインドフルネス: ウエルビーイングへと続く道, 創元社. 2018

(ii) 論文・解説

1. 伊川 美保, 楠見 孝. 食品リスク認知の感情ヒューリスティックに及ぼすニューメラシーの抑制効果. 心理学研究 89 (4), pp.367-375, 2018.10.25. (査読有)
doi.org/10.4992/jjpsy.89.17034
2. 伊川 美保, 楠見 孝. ニューメラシーがリスク情報提供後の不安変化に及ぼす影響—食品中の放射性物質と首都直下型地震を題材として—, 日本リスク研究学会誌 28 (1),

- pp.23-30, 2018.9.25. (査読有)
3. 市村賢士郎, 河村悠太, 高橋雄介, 楠見孝. ラーニングコモンズの環境要因と創造性課題の成績との関連. 日本教育工学会論文誌, 42(1), pp. 55-64, 2018. doi:10.15077/jjet.42015
 4. Fujino, M., Ueda, Y., Mizuhara, H., Saiki, J., & Nomura, M. Open monitoring meditation reduces the involvement of brain regions related to memory function. Scientific Reports, 8, 9968. 2018
 5. Yanaoka, K., Saito, S. Repeated sequential action by young children: Developmental changes in representational flexibility of task context. Developmental Psychology. (In press). (査読有)
 6. Moriguchi, Y., Shinohara, I., Yanaoka, K. Neural correlates of delay of gratification choice in young children: Near - infrared spectroscopy studies. Developmental Psychobiology. (In press). (査読有)
 7. Yanaoka, K., Nakayama, M., Jarrold, C., & Saito, S. Determining the developmental requirements for Hebb repetition learning in young children: Grouping, short-term memory, and their interaction. Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition. 2018. (査読有)
 8. 柳岡開地. 乳幼児と他者が目標を共有するまでの発達的変遷: 実行機能研究の暗黙の前提を超えて. 人間発達研究所紀要, 31, pp.2-21. 2018.8. (査読有)
 9. 柳岡開地・津田彩乃・西村知紗. 3歳児のスクリプト獲得過程: “朝の用意”場面の短期的縦断観察を通して. 発達心理学研究, 29 (2), pp.84-94. 2018. (査読有)
 10. 柳岡開地. 城戸奨励賞受賞して. 教育心理学年報. 2018
 11. Ishiguro, S., & Saito S. Person-based organisation in working memory. Quarterly Journal of Experimental Psychology. (in press)
 12. Hiraoka, D., Miyasaka, M., & Nomura, M., Spousal Presence Modulates Salivary α -Amylase Responses to Infant Cry in Mothers with High Attachment Insecurity, Parenting, Special Issue: Parenting and Infant Crying, 19(1-2), pp.5-21, 2019.
<https://doi.org/10.1080/15295192.2019.1555416>
 13. Hiraoka, D., Miyasaka, M., & Nomura, M., A possible Mechanism of Stress-Relieving Effects of Spousal Presence and Implications for Future Infant Cry Research, Parenting, Special Issue: Parenting and Infant Crying, 19(1-2), pp.34-38, 2019.
<https://doi.org/10.1080/15295192.2019.1555424>
 14. Hiraoka, D., & Nomura, M. Maternal Childhood Adversity, OXTR Genotype and Cognitive Load Impact on Perceptual and Behavioral Responses to Infant Crying. Psychoneuroendocrinology, <https://doi.org/10.1016/j.psyneuen.2019.03.005> (in press).
 15. 西口美穂, 楠見 孝. 単語を手がかりとした單文産出における知覚的シミュレーション, 心理学研究, 89 卷 5 号, pp. 459-468, 2018.12.
 16. 加登遼, 神吉紀世子. スプロール市街地における主観的街路評価からみたウォーカビリティ指標の有効性- 北大阪都市計画区域のスプロール市街地におけるスマートシュリンクングに向けて -, 都市計画論文集, Vol. 54, No. 1, 2019. (査読有)
 17. 加登遼, 神吉紀世子. スプロール市街地における主観的街路評価からみたウォーカブルデザイン指標の有効性 - 北大阪都市計画区域のスプロール市街地におけるスマートシュリンクングに向けて -. 日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系, No.7050, 大阪保健医療大学.2018.6.23-24.

18. 加登遼, 神吉紀世子. スプロール市街地における主観的街路評価からみたウォーカブルデザイン指標の有効性 - 北大阪都市計画区域のスプロール市街地におけるスマートシエリキンギングに向けて -. 日本建築学会大会学術講演梗概集, No.7034, 東北大学. 2018.9.4-6.
19. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, Kippei Matsuda, and Shinji Mikami. A Novel Omnidirectional Mobile Robot with Wheels Connected by Passive Sliding Joints. IEEE/ASME Transactions on Mechatronics, Vol. 23, No. 4, pp. 1716–1727, 2018.5
20. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, Mitsuru Sakamoto, Yuji Kawato, Yuya Morita, and Hugo Nishida. Two-Wheel-Drive Vehicle That Is Movable in the Longitudinal and Lateral Directions with a Small Number of Motors. Journal of Japan Society for Design Engineering, Advance Publication, 2018.10
21. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, and Kenji Fujimoto. Control of an Omnidirectional Mobile Robot with Wheels Connected by Passive Sliding Joints. Journal of Advanced Mechanical Design, Systems, and Manufacturing, (in press).
22. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, and Yuya Morita. Motion Analysis and Experiments of Reducer-integrated Motor Using Strain Wave Gearing System. Proceedings of the ASME 2018 International Design Engineering Technical Conferences & Computers and Information in Engineering Conference (IDETC/CIE 2018), Vol. 5B, DETC2018-85299, 2018.8
23. 大倉裕貴, 藤本健治, 斎藤暁生, 池田英俊. 一般化正準変換を用いたポートハミルトン系の経路追従制御のためのポテンシャル関数の設計. 計測自動制御学会論文集, 54巻, 11号, 2018.
24. Y. Okura, K. Fujimoto A. Saito, H. Ikeda. "On Path Following Control of Port-Hamiltonian Systems by Bayesian Inference with Training Trajectory Data", The 57th IEEE Conference on Decision and Control, Miami Beach, FL, USA, pp1955-1960, 2018.12.
25. Y. Okura, K. Fujimoto. "Passive Nonlinear Impedance Control for Port-Hamiltonian Systems", 2018 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS2018), Madrid, Spain, pp7983-7988, 2018.10.
26. Kotaro Mori, Daisuke Kono, Iwao Yamaji, Atsushi Matsubara. Model-based installation of viscoelastic damper support for reduction of residual vibration, International Journal of Automation Technology, Vol. 12 No. 5, pp. 650-657, 2018.
27. 安達真永, 上村知也, 松野文俊. 3次元四脚モデルを用いたPaceおよびTrot歩容の動力学解析, システム制御情報学会論文誌, vol. 31, no. 12, pp.428-436, 2018.12.
28. Hori, T., Noda, T., Wada, T., Iwasaki, T., Arai, N., Mitamura, H. Effects of water temperature on white-spotted conger Conger myriaster activity levels determined by accelerometer transmitters. Fisheries Science, 85(2), 295-302, 2019
29. Mondheera Pituxcoosuvarn, Toru Ishida. "Multilingual Communication via Best-Balanced Machine Translation." New Generation Computing 36, no. 4 pp. 349-364, 2018.
30. Mondheera Pituxcoosuvarn, Toru Ishida, Naomi Yamashita, Toshiyuki Takasaki, Yumiko Mori. "Machine Translation Usage in a Children's Workshop." In International Conference on Collaboration Technologies, pp. 59-73, Lisbon, Portugal, 2018.9.
31. Luciano H O Santos, Kazuya Okamoto, Shusuke Hiragi, Goshiro Yamamoto, Osamu Sugiyama,

- Tomoki Aoyama, Tomohiro Kuroda. Pervasive Game Design to Evaluate Social Interaction Effects on Levels of Physical Activity among Older Adults. 12th International Conference on Disability, Virtual Reality & Associated Technologies (ICDVRAT 2018), pp.157-164, Nottingham University, Nottingham, UK, 2018.9.4-6.
- 32. S. Helou, G. Yamamoto, E. Kondoh, H. Tamura, S. Hiragi, O. Sugiyama, K. Okamoto, M. Nambu, T. Kuroda. Understanding the Roles of EMR Systems in Japanese Antenatal Care Settings. Studies in health technology and informatics 251 (2018): 257.
 - 33. S. Helou, G. Yamamoto, T. Kuroda, A Socio-Technical Approach to Understanding Electronic Medical Record Systems in their Context of Use. Proceeding of Ubiquitous Healthcare (Uhealth2018), Kyoto, Japan, 2018.
 - 34. Morris K, Yamamoto G, Hiragi S, Ohtera S, Sakai M, Sugiyama O, Okamoto K, Nambu M, Kuroda T. Designing an Authorization System Based on Patient Privacy Preferences in Japan. Studies in health technology and informatics. 247, pp.71-75, 2018.1 (PMID:29677925)
 - 35. Victoria Abou Khalil, Toru Ishida, Masayuki Otani, Brendan Flanagan, Hiroaki Ogata, Donghui Lin, "Learning culturally situated dialogue strategies to support language learners", Research and Practice in Technology Enhanced Learning, Vol.13, No.10, pp.1-20, 2018.
 - 36. Hiroaki Ogata, Kousuke Mouri, Noriko Uosaki, Mohammad Nehal Hasnine, Victoria Abou-Khalil, Brendan Flanagan, "SCROLL Dataset in the Context of Ubiquitous Language Learning", Proceedings of the 26th International Conference on Computers in Education (ICCE2018), pp. 411-416, 2018.11.26.
 - 37. Victoria, Abou Khalil, Brendan Flanagan, Hiroaki Ogata, "Word meaning disambiguation in an online language learning environment", 研究報告教育学習支援情報システム CLE, 2018-CLE-25(5), pp.1-4, 2018.6.8.
 - 38. 早川慶朗, 林ジュンタク, 奥拓郎, 高比良健太郎, 李慧勇, 河盛亮介, 佐藤彰洋, 觀光分野における MaaS 型サービスデザイン. 横幹連合コンファレンス予稿集, 2018 卷, A-2-3, 2018.11.
 - 39. Rwitajit Majumdar, Yuan Yuan Yang, Huiyong Li, Gökhan Akçapınar, Brendan Flanagan, Hiroaki Ogata. GOAL: Supporting Learner's Development of Self-Direction Skills using Health and Learning Data. Proceedings of the 26th International Conference on Computers in Education (ICCE2018), pp.406-415, 2018.11.
 - 40. Huiyong Li, Brendan Flanagan, Shin'ichi Konomi, Hiroaki Ogata. Measuring Behaviors and Identifying Indicators of Self-Regulation in Computer-Assisted Language Learning Courses. Research and Practice in Technology Enhanced Learning, Vol.13, No.19, pp.1-12, 2018.12.
 - 41. Arseny Tolmachev, Daisuke Kawahara and Sadao Kurohashi. Shrinking Japanese Morphological Analyzers with Neural Networks and Semi-Supervised Learning, Proceedings of NAACL-HLT 2019: Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics, Minneapolis, US, 2019.6.

(4) 受賞

1. 河村悠太. 平成 30 年度 京都大学 総長賞 (分野 : 学業)
2. 河村悠太. 平成 30 年度 京都大学大学院教育学研究科長賞 (分野 : 学業)
3. 河村悠太. 第 9 回 (平成 30 年度) 日本学術振興会 育志賞
4. 加登遼. 2018 International Conference of Asia-Pacific Planning Societies /Award for the Best Presentation “Effectiveness of Walkable Design Indicator from the perspective of Subjective Evaluation on Streets in Sprawl Urban Areas - Toward Smart Shrinking for Sprawl urban areas in North Osaka Metropolitan Region - ,” 2018.8.3.
5. 清山陽平, 山口直人, 渡辺美帆子, 太田裕通, 中村景月. 京都大学学際着想コンテスト 2018 総長賞. 「柔らかい都市を目指して一見えない空間秩序を関係性から共創する『柔貸』に着目した研究・実践のプラットフォーム」. 京都大学鼎会. 2018.12.21.
<http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/contest/>
6. 小森雅晴, 松田吉平, 寺川達郎, 竹岡郁, 西原秀明, 大橋啓生. 日本機械学会賞 (論文), ”Active omni wheel capable of active motion in arbitrary direction and omnidirectional vehicle,” 一般社団法人日本機械学会, 2018.4.19.
<https://www.jsme.or.jp/archive/award/shou95detail.pdf>
7. 寺川達郎, 小森雅晴, 森田悠也. 奨励賞, 波動歯車装置の原理を利用した減速機構内蔵モータ, 公益社団法人日本設計工学会, 2018.5.26.
8. 大倉裕貴. 第 62 回システム制御情報学会研究発表講演会 (SCI'18), 学生発表賞, 「人と機械とのインタラクションを考慮した作業データに基づく経路追従制御について: ベイズ推定を用いたポートハミルトン系の経路追従制御」. システム制御情報学会. 2018.5. https://sci18.iscie.or.jp/public/_site/award/
9. LUKMAN HERYAWAN他, サマーデザインスクール 2018 最優秀賞, 「通信販売を不便にしてみる」(テーマ 20), 京都大学 デザイン学大学院連携プログラム, 2018.9.14
10. 炭谷翔悟. 京都大学第 13 回 ICT イノベーション優秀研究賞. 「人を以て鏡と為す逆強化学習」, 京都大学第 13 回 ICT イノベーション実行委員会, 2019.2.20.
11. 赤城賀奈子. クリエイティブ賞, 「夫婦間の「期待」がキャリア・デザインに与える影響」, 京都大学経営管理大学院 サービス&ホスピタリティプログラム, 2019.1.27.

付録3 業績リスト（メディア）

（1）新聞

1. 藤野正寛, 野村理朗. 「瞑想している脳、MRIで一部解明 心の状態、過去から自由に」. 京都新聞. 2018.7.6. <https://www.kyoto-np.co.jp/environment/article/20180706000106>
2. 小森雅晴, 寺川達郎. 「変・減速機」. 日刊工業新聞, 26-28面. 2018.8.28.
3. 黒田知宏. 「テルモと京大, IoT対応ポンプを使った薬剤投与ワークフローに関する共同研究を開始」. 日本経済新聞. 2018.11.12.
4. 川上浩司. 「手間と不便は似て非なるもの、公立の中で不利益を再考」, 輸送経済新聞, 特集&コラム. 2018.3.20.
5. 川上浩司. 「生活を豊かにする選択肢」, 中国新聞, オピニオン. 2018.6.6.
6. 川上浩司. 「不便にも益がある」, 京都新聞, オピニオン・解説. 2018.12.1.

（2）ラジオ

1. 川上浩司. 「トーキング ウィズ 松尾堂」, NHK FM. 2018.5.6. 2時間

（3）雑誌

1. 黒田知宏. 「オンラインでできること、できないことを切り分ければ、可能性は限りなく増える」. ドックマガジン, vol.2, pp.3-5. 2018.5.20.

（4）Web

1. 小森雅晴, 寺川達郎. 「活躍領域広がる変・減速機」. 2018.8.31. <https://www.nikkan.co.jp/articles/view/00486496/0/14768>
2. Yutaka Yamauchi. "Service Design Show, Great services should be a struggle" <https://www.youtube.com/watch?v=oIdLZjYhTR0>
3. 黒田知宏. 「医療従事者の働き方改革と、医療の未来像を語ろう」. 日経デジタルヘルス. 2018.5.14. <https://tech.nikkeibp.co.jp/dm/atcl/feature/15/051400164/051400002/?ST=health>
4. 川上浩司. Think About 「効率や利便性だけでは企業は大きく成長しない」. 2018.4.27 <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1754/>

付録4 プログラムの概要（事後評価調書より）

【公表】

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】

国際社会は今、温暖化、災害、エネルギー、食糧、人口など複合的な問題の解決を求めており、そこで本プログラムでは、異なる分野の専門家との協働によって「社会のシステムやアーキテクチャ」をデザインできる博士人材の育成を提案する。またそのために、情報学や工学の基礎研究を結集し、複雑化する問題を解決するための、新たなデザイン方法論を構築する。これによって、Cyber(情報学など)とPhysical(工学など)の専門家が、経営学、心理学、芸術系の専門家と協働し問題解決が行えるよう教育を行う。要するに専門家の共通言語としてデザイン学を教育し、社会を変革する専門家を育成する。こうした人材を、ジェネラリストを意味する「T字型人材(T shaped people)」と対比させ、専門領域を超えて協働できる突出した専門家という意味を込めて「十字型人材(+ shaped people)」と呼び、本プログラムにより養成すべき人材像とする。

こうした人材を育てるために、5つの専門領域(情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学)の協力によって、俯瞰力と独創力を育むデザイン学の学位プログラムを構成する。学生は俯瞰力を鍛えるために、博士前期課程でデザイン学の共通科目と領域科目を履修し、一般性のあるデザイン理論とデザイン手法を学ぶと共に、専門に根差した教育を受ける。さらに博士後期課程では、副領域科目を履修すると共に、海外やフィールドでのインターンシップを経験し視野を広げる。一方、独創力を培うために、博士前期課程で、異なる専門領域の学生と共に問題発見型学習(FBL: Field-Based Learning)や問題解決型学習(PBL: Problem-Based Learning)に取り組む。博士後期課程では、実問題を解決するオープンイノベーションのマネジメントを経験した後、社会の大きな課題に挑戦する産学官連携のリーディングプロジェクトに参加し、複数アドバイザ制度の下で博士論文をまとめる。

【特色】

本プログラムでのデザイン概念は、意匠を意味するものではなく、「与えられた環境で目的を達成するために、様々な制約下で利用可能な要素を組み合わせて、要求を満足する人工物を生み出すこと」を意味する。ここでの人工物は製品を表すのではなく、社会のシステムやアーキテクチャを意味する。仮に、環境、目的、制約、要求などを定式化することができれば、情報学や工学の基礎理論は力を発揮するはずである。

しかし、人や社会をデザインの対象とするには、デザイン学を先導し構造物から環境のデザインへと進化を遂げた機械工学や建築学に学ぶとともに、経営学、心理学、芸術系の協力を得ることが必要である。本プログラムの強みは、京都大学の情報学研究科、工学研究科、教育学研究科、経営管理大学院、並びに京都市立芸術大学が連携し、デザイン学の教育を担当することである。しかしながら、デザインの対象領域は防災、医療などを含むさらに広い領域となる。また、社会の実問題を大学だけで解くことはできない。そのため、リーディングプログラムの実施組織を3層構成とする。即ち、デザイン学の5年一貫教育を担当する「デザイン学大学院連携プログラム」(情報学、建築学、機械工学、心理学、経営学)、デザインの対象領域と協業する「デザインスクール」(防災学、農学、看護学、医学など広範な専門領域を含む)、デザインの主体が結集する「デザインイノベーションコンソーシアム」(国内外の企業、非営利団体、自治体など)からなる3層の連携体制を構成する。こうした連携の推進を目的として、本学の吉田、桂、宇治キャンパスと京都市立芸術大学のハブとなる「デザインイノベーション拠点」を設立し、リーディング大学院を可視化する。さらに、本拠点を産学官により運営し、リーディングプロジェクトや問題発見型/解決型学習を常時社会に開放する。このように、リーディングプログラムを対外的にオープンにし、社会と共に教育研究を行う姿勢を広く世界に伝える。

【優位性】

我が国では過去10年間に、専門領域に特化したデザイン専攻(機械システムデザイン専攻や環境デザイン専攻など)が多数生まれてきた。既存専攻が、自らの技術を社会に適用しイノベーションを起こすという意思表示である。これに対し本プログラムは、我が国で初めて、専門領域に特化しない一般性のあるデザイン学博士教育を行うもので、欧米を含む世界的な潮流とも合致し、かつ十分に競争力を持つものである。また、国際連携では、学生に多様な交流の機会を提供するために、京都大学が中心的役割を担う「日英産学連携スキーム(RENKEI)」を活用し、英国大学とデザイン領域でのマルチラテラルな交流を行う。さらに、それを離形として、世界のデザインスクールと連携するスキームの実現を図る。一方、産学官連携では、既に多数の企業が参加する京都大学工学桂会や京都大学ICT連携推進ネットワークを母体に、デザインイノベーションコンソーシアムを形成する。地域の産業界や研究機関が結集する京都リサーチパークが全面的に協力していることも、本プログラムの優位性を強化するものである。

【公表】

プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

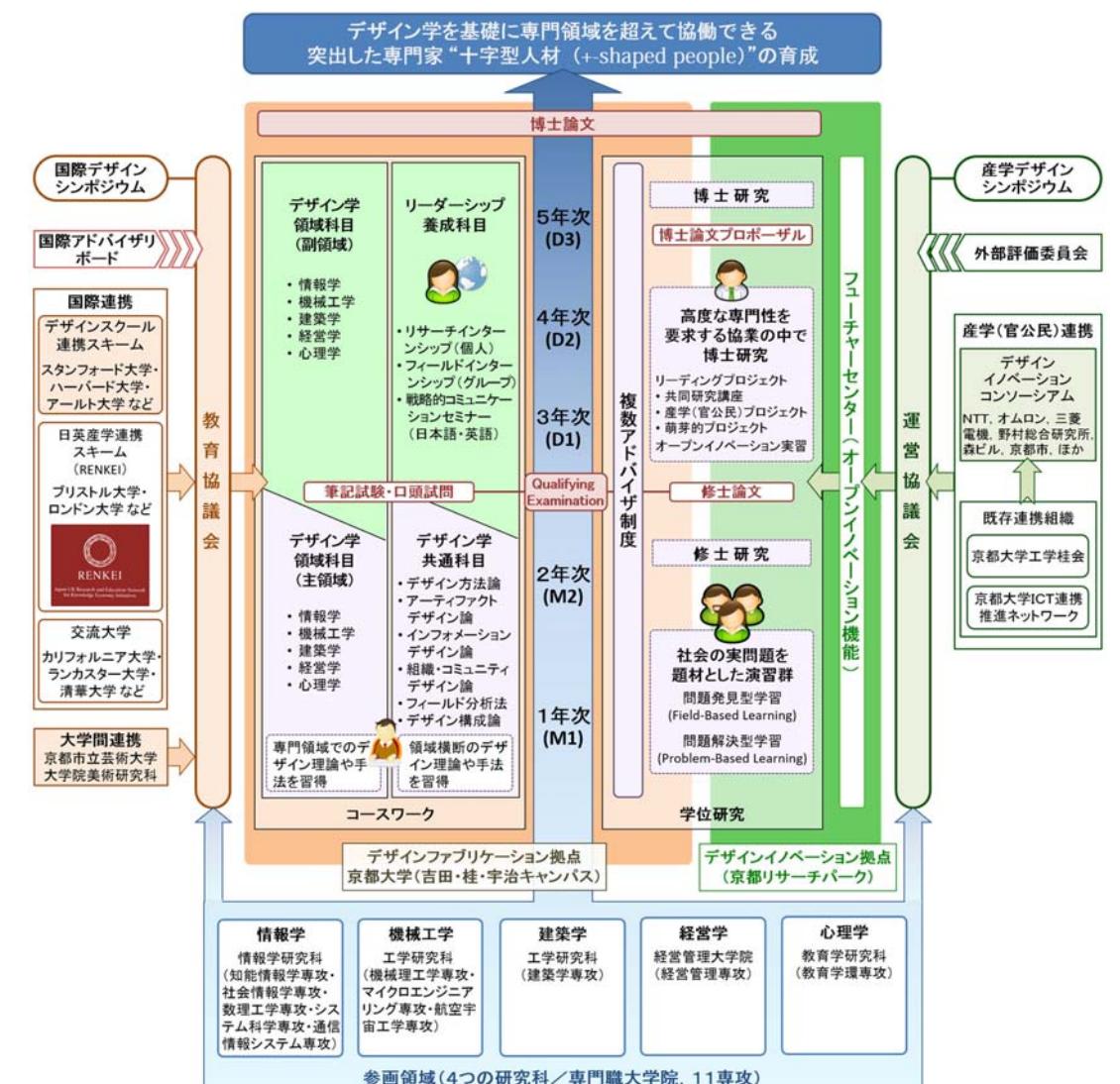


図 1: 学位プログラムの概要と組織構成

本プログラムは、以下の特徴を備える。

- ・情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学を結集した「デザイン学共通科目」と「デザイン学領域科目（主領域・副領域）」から成る体系的な科目設計、並びにそれに基づく教科書シリーズの発刊
- ・専門領域を超えた学生チームによる「問題発見型・解決型学習(FBL/PBL)」。
- ・国際連携ネットワークに支えられた「リサーチインターンシップ（個人）」による国際的研究活動。
- ・現場の教育力を活用する「フィールドインターンシップ（グループ）」による国際的実践活動。
- ・社会の実問題を扱う「リーディングプロジェクト」の中で複数アドバイザ制の下での博士研究。
- ・60余社が参加する「デザインイノベーションコンソーシアム」による産学官連携の人材育成。
- ・オープンイノベーション機能を有する「デザインイノベーション拠点」をハブとした産学官連携
- ・汎用力の到達度を測る「デザインイノベータインデックス」とループリックによる質保証。

【公表】

プログラムの成果

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

【質評価の方法】

本プログラムは「専門的知識と汎用的能力を備え、異なる分野と連携し突出した実践力を持つ博士人材」の養成を目的とする。その質評価に、以下の2つの手法を考案した。

第一は、プログラム全体の質保証の指標である「デザインイノベータインデックス（Design Innovator Index）」である。これは、産業界ならびに学生の視点からの評価であり、産業界が求める能力に対し学生の達成度を測り、プログラム全体の質保証の指標としている。履修者が獲得すべき能力として、インテリジェンス、パーソナリティ、エンゲージメント、ガバナンスの計24項目の能力指標と定め、学生の申告に基づき能力伸張を測定している。履修者に対する5年間の調査の結果、学年進行とともに、特にエンゲージメントとそれを支えるパーソナリティを中心に履修者の自己評価が上昇している。



図2: デザインイノベータインデックス

第二は、履修者個々人の質保証のためのループリック指標である。これは、評価基準と到達度のマトリクスで構成される多元的・多段階的評価基準で、汎用力に関わる各履修者の長期的な学修成果を把握し、評価結果を教育・学修の質の改善に活用することを目的とする。プログラムの正課だけでなく、正課外の補助カリキュラムも含むプログラム全期間におよぶ履修者のワークを評価するもので、2017年度の修了生については全員が全項目の基準を満たしていることを確認した。

【履修者の博士研究と進路】

2017年度末に5年次の履修者に対し、個別にインタビューを行い、異なる専門領域やコンソーシアム企業との交流が履修者の博士研究や進路に与えた影響を調査した。その結果、履修者が、カリキュラム内外の活動を通して異分野の教員や企業専門家と自発的に共創の機会を作り出し、博士研究やキャリアパスの展開に有効に活用したことが明らかとなった。

例えば博士研究では、情報学の履修者が機械系の企業専門家とのオープンイノベーション実習の成果を博士研究に組み込む、心理学の履修者が副専攻の教員と共同研究し情報学の会議で論文を発表する、情報学の履修者が心理学研究室のゼミに定期的に参加し自らの研究を持ち込み議論する、学会で出会った他大学の教員に共同研究を持ちかけ共著の国際会議論文を発表する、ワークショップを共にした他大学の教員の協力を得て起業する、などの事例がある。

一方、履修者の進路は多様で、アカデミアを希望する者（教員とコミュニケータを含む）は40%、企業（研究所と事業・コンサルを含む）は54%、起業が6%である。異領域を学ぶことが博士研究のテーマに影響を与えた履修者は40%に上る。また、コンソーシアム企業との交流が、履修者の職業観に大きな影響を与え、様々な職種の選択を促したことが分かる。

さらに、プログラム活用の類型と進路の関係を調査した。「機会活用型」は、提供される機会を活用し社会や海外などに体験を広げていくもので、アカデミア志向の履修者が多い。「専門領域拡張型」は、専門を深めつつ周辺領域との接点を広げていくもので、企業研究所への就職が多い。

「クロスボーダー型」は、研究領域を横断するテーマに挑戦するもので、企業の事業部門やコンサル部門に進む者が多い。「キャリアパス開拓型」は、企業や異分野と活発に接し視野を広げていくもので、様々な進路に分かれ、起業した者もいる。

【外部の評価】

産学官の委員から構成される外部評価では、「従来のデザイン・リテラシー教育指向的なアプローチに対して、よりホリスティックで理論的なデザイン・コンピテンシー教育を指向する取組みである」「実学的要請を受けつつも、分野横断的なデザイン学の体系化に成功し、グローバルリーダーを育成する学位プログラムを構築している」という評価を得ている。また、本プログラムの活動と評価手法をまとめた記事は、IEEEの機関誌（*IEEE Computer*）に採択された。このことは、本プログラムの取り組みが国際的な評価に耐えるものであることを示している。

【公表】

プログラムの成果

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

【教育研究組織の再編】

京都大学第3期中期目標・中期計画（平成28年～33年度）、および総長による京都大学の改革と将来構想（WINDOW構想）に、学際的な研究の推進や機動的・効果的な組織改編を通じた異分野融合による新分野創成を推進するために、博士課程教育リーディングプログラムを活用することが明記されている。具体的には、プログラムの教育と学位の質保証を担い、大学院改革を進めるための新組織「大学院横断教育プログラム推進センター」が、2018年4月に、総長と教育担当理事の下に新設された。センター内に設けられた大学院横断教育プログラム運営委員会は、プログラム代表者以外の者が過半数となるよう第三者的視点を確保して教育の質保証を行う。本センターにリーディングプログラムの運営主体が置かれ、参画研究科が責任を持ってその運営に協力する枠組みを整え、大学院改革を推進するための全学的実施体制が構築されている。

また、国際高等教育院を中心に大学院共通・横断教育の見直しと充実が図られており、本プログラムにおいてもデザイン学共通科目を大学院横断科目として提供し、全学への定着を進めている。

【産学官連携による人材育成】

本プログラムが中心となり、産学官連携による人材育成を目的とした「デザインイノベーションコンソーシアム」を2014年3月に設立した。以来、大学が持つ知のネットワークやデザイン理論・手法などの専門性と、産官が持つ社会の実問題や実践力が交わる場として発展してきている。コンソーシアムの運営は企業と大学からの約半数ずつの理事・推進委員によって行われ、参加会員からの会費と収益事業を財源に運営を行っている。さらに、産学官の協力者からなるプロフェッショナル・ネットワークをコンソーシアム内に設けた。その構成員は、現在および過去の本プログラムの教員、コンソーシアムの理事・委員、主要な企業会員が推薦するフェローなど数十名であり、国内外に協力の輪が広がっている。

コンソーシアムは支援期間終了後も継続して、本プログラムと連携を図ることが2018年5月の総会において決議された。具体的には、コンソーシアムにより、履修者への経済的支援やプロフェッショナル・ネットワークを活用した講演・講義を行い、産学官が連携した人材育成を推進する。

また、産学官のハブとして機能してきた「デザインイノベーション拠点」は、全学共用施設として維持し、学学連携、産学連携、産産連携のオープンイノベーションを推進することとした。これは、2017年6月に京都大学が指定国立大学法人とされたことを受け、「新たな知の創造、イノベーションの確立、未来社会への指針を示すための取り組みを実行」する一環であり、デザインイノベーション拠点を、これからも、地域における知の拠点として多様な利用者が交流する場として活用していく。

【学外への波及効果】

本プログラムでは、国内外の教育・研究機関と連携し、デザイン学の新しい教育カリキュラムを構築する努力を行ってきた。得られた知見を広く社会と共有するために、新規開講した主要科目に対応する教科書を、「京都大学デザインスクール・テキストシリーズ」として順次発刊している。

また、共同でデザインワークショップを実施してきた他大学にも波及効果が見られる。琉球大学では、工学部の学科再編を機に、学部共通科目としてワークショップを導入する。同様に、香港バプティスト大学では、学部の4年制移行を機に、デザインワークショップを一般教育に導入する。これらの他大学への波及効果は、新しい教育を目指す長期にわたる協働の成果である。

デザイン学大学院連携プログラム

事後評価スライド(抜粋)

平成30年11月21日

評価項目1

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築

【評価の観点】

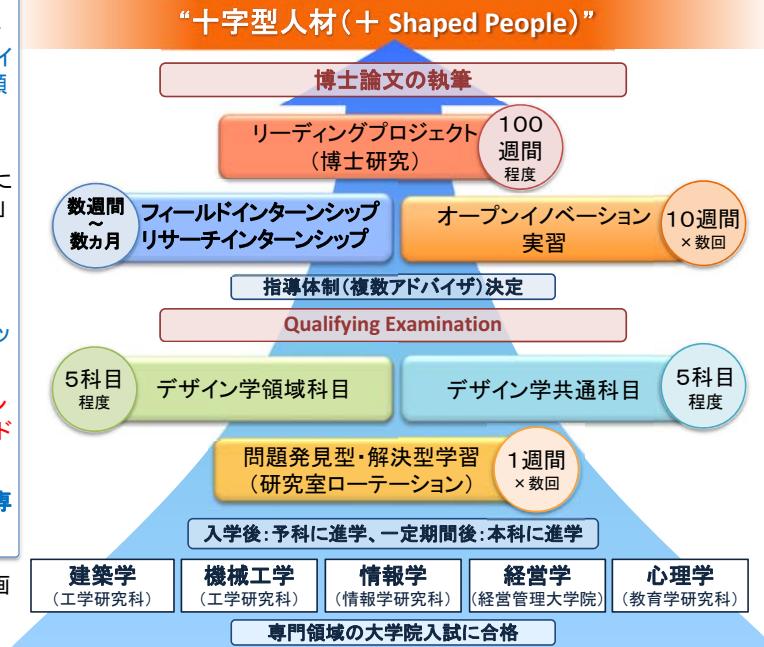
- 優秀な学生をグローバルに活躍するリーダーへと導く一貫した学位プログラムが構築され、コースワーク等による広範かつ体系的な教育研究指導が行われたか(プログラムの最終形態の確認)
- 国内外の多様なセクターからの第一級の教員、メンターやTAの活用をはじめとする組織的な指導体制や、留学生・教員との関わり及び外国語の使用等によるグローバルな教育研究・生活環境が構築されたか(指導体制等の構築)
- プログラム担当者、それ以外の学生の指導教員等の学内関係者のみならず、大学全体として改革理念を共有し共通理解をもって改革を推進・協力しているか(改革意識の共有)
- 学生選抜、Qualifying Examination、開かれた学位審査体制など、グローバルに活躍するリーダーとなるに相応しい資質能力を保証するシステムが構築されたか(学位の質保証)
- 外部評価により採択プログラムの検証・改善が図られ、設定した数値目標が達成されたか(PDCAサイクルの構築)
- 経費の支出内容及び規模は適切か(経費の適切な執行)

プログラムの最終形態の確認

**異なる領域の専門家と協働し、社会のシステムやアーキテクチャをデザインする
突出した実践力を持つ人材を育成。**

- ・情報学、機械工学、建築学、経営学、心理学を結集した「**デザイン共通科目**」と「**デザイン学領域科目**(主領域・副領域)」から成る体系的な科目設計
- ・専門領域を超えた学生チームによる「**問題発見型・解決型学習**」
- ・国際連携ネットワークに支えられた「**リサーチインターンシップ**(個人)」と、現場の教育力を活用する「**フィールドインターンシップ**(グループ)」
- ・社会の実問題を扱う「**リーディングプロジェクト**」の中で、複数アドバイザ制の下での博士研究
- ・新設科目の多くを参画専攻の専任教員が担当

4研究科11専攻が参画

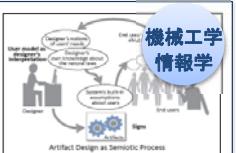


プログラムの最終形態の確認(デザイン学共通科目)

人・社会の視点からのデザイン理論・手法と、デザイン方法論の6科目を新設

アーティファクト デザイン論

人工物のシステムについて、目的を達成するための機能デザイン、利用者視点のユーザビリティデザインを学ぶ。



Hollnagel and Woods: Joint Cognitive Systems, (2005) の図を改編

フィールド分析法

デザインに必要なフィールド分析手法として、エスノグラフィやアンケート等の調査法、統計解析法等のデータ分析を学ぶ。



情報学
経営学

インフォメーション デザイン論

インフォグラフィックスに加えて、情報の構造化・可視化、言語・映像表現、インターフェースデザインを学ぶ。



wikipedia "infographic" より転載

デザイン構成論

人間の認知的・社会的特性を踏まえた上で、デザインという事象に関わる人間および環境の系を構成する手法を学ぶ。



情報学

組織・コミュニティ デザイン論

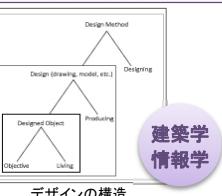
社会科学の諸理論を実際の組織やコミュニティに適用し、社会をモノのように扱うことなくデザインすることを学ぶ。



夢の活動を描く技法

デザイン方法論

デザイン研究の歴史を踏まえて、複雑なシステムを生成する新たなデザインの科学や方法論を学ぶ。



建築学
情報学

各科目の教科書を京都大学デザインスクール・テキストシリーズとして発刊中

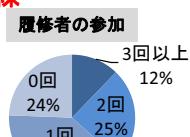
プログラムの最終形態の確認(デザイン実践のラインナップ)

実習科目とイベントを組み合わせた**5ステップのデザイン実践訓練**
異分野、異文化との協働のラインナップで実践力を鍛える

STEP1 サマーインスツール(興味を持つ)

東日本大震災を機に開始。社会課題を産官学で解く。
2018年は23テーマ(半数は企業から)。250人が参加。

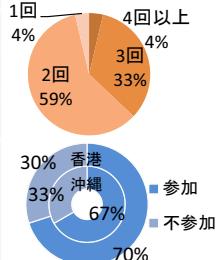
一般向け
単位なし



STEP2 問題発見型・解決型学習 FBL・PBL(手法を知る)

研究室が実施(研究室ローテーション)。異領域や企業
の協力を得る。講義で修得したデザイン手法を実践。

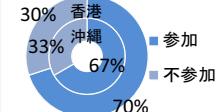
1年次向け
1単位×2回



STEP3 デザインスクール in 沖縄 / in 香港(協働する)

地元の大学と3日間の合同実習。沖縄ではファシリテーションを、香港では英語で課題解決。

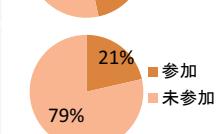
1~2年次向け
単位なし



STEP4 オープンイノベーション実習(運営する)

企業が課題提供。専門家、学生がチーム構成。
履修者の役割はチームのマネジメント。

3~5年次向け
4単位



STEP5 フィールドインターンシップ(専門を生かす)

未知の環境で専門家として貢献する難度の高い実習。
履修者チームが現場に滞在し課題解決。

3~5年次向け
2単位



指導体制等の構築

京都大学の**70余名**の教員がデザイン学リーディング大学院を構成
アドバイザリボード、特命教授、芸術系、企業、海外研究者による指導体制を構築

アドバイザリボード10名 Barry Katz教授(IDEO/スタンフォード大学)、Bernie Roth教授(スタンフォード大学)、Anna Lee Saxenian教授(UCB)、Pekka Korvenmaa教授(Aalto大学)、Maosong Sun教授(清華大学)、Dennis Sylvester教授(ミシガン大学)、Wolfgang Wahlster教授(DFKI)、David C. Plaut教授(CMU)他。

プログラムへの助言

デザイン学リーディング大学院 72名(外国人4名) 情報学 32人(知能情報学9、社会情報学12、数理工学4、システム科学1、通信情報システム5、医療情報1)、工学 18人(建築学7、機械理工学6、マイクロエンジニアリング2、航空宇宙工学2、電気工学1)、教育学 5人、経営管理 5人、人間・環境学 1人、防災研究所 2人、博物館 1人、国際高等教育院 1人、白眉センター 1人、デザイン学リーディング大学院 6人。

特命教授3名 富山哲男教授(クランフィールド大学)、濱口秀司氏(monogoto Inc.)、中津良平博士(ヘキサゴンジャパン)。

企業フェロー10名 NTT、三菱電機、オムロン、野村総研、日本総研、竹中工務店、博報堂、京都リサーチパーク、ソニー、日建設計。



学生が指導を受けた海外研究者 Thomas Malone 教授(MIT)、Richard Davidson 教授(Wisconsin-Madison大学)、三田村教授、柴田講師(カーネギーメロン大学)、宗像教授、三宅教授(コロラド大学)、Robert H. Logie 教授(エジンバラ大学)、Kari-Hans Komonen教授(アールト大学)、Oscar Tomico 博士(ホーフェン工科大学)、P.J.Stappers 教授(デルフト工科大学)、L.T.Adishakti 博士、Robert Hirschfeld 教授(ボツダム大学)、Paola Falini 教授(ローマ大学)、奥井教授(ルーアン大学)、Eva Loth 博士(ロンドン大学)、Dwita Hadi Rahmi 博士(ガジャマダ大学)、Ying-Yi Hong 教授(香港大学)、Jiming Liu 教授(香港バプティスト大学)、Pierre Gosselin 教授(オタワ大学)他多数。

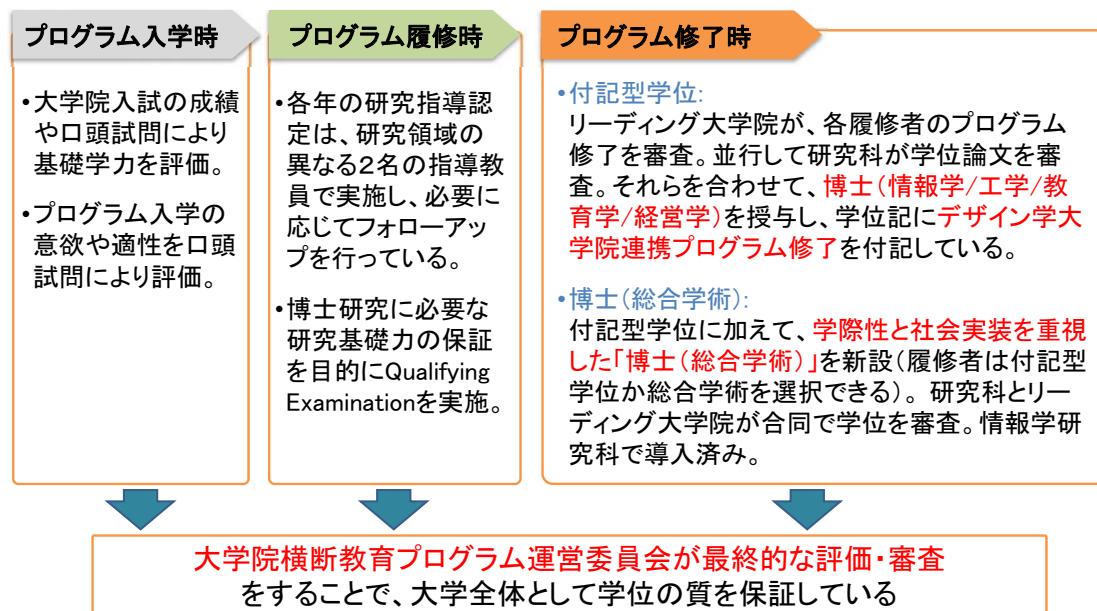
改革意識の共有

デザイン学の理念と活動は**学内、学界、産業界に波及してきた**



学位の質保証

異領域の教員チームによる継続的な評価を通じた質保証



PDCAサイクルの構築

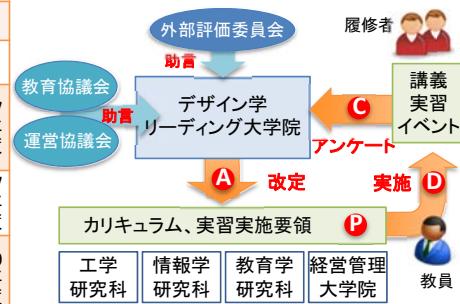
外部評価委員会、教育・運営協議会の助言、学生アンケートに基づく改善

学生アンケート(64項目:各年)

課題	改善	
英語のみで履修したい。(留学生)	デザイン学共通科目・共通実習科目を英語化。英語のみでプログラムを修了可能に。	26年度
通常の博士進学と比較し科目履修が思いの外、負担に感じる。	各研究科の既存開講科目を精査し、13科目をデザイン学領域科目に追加。	27年度
同学年の履修者とのネットワークはできているが、他の学年との交流が活発でない。	募集説明会で先輩のポスター発表会を開催。新入生合宿へ3年次以上の学生が参加。	27年度
企業との接点が少ない。博士取得後のキャリアパスとして企業を考えることが難しい。	デザインイノベーションコンソーシアムと連携し、企業への訪問学習会を実施。	29年度
博士進学後、履修者で集まる機会が少ない(在学生)。同期生との繋がりは一生の宝(修了生)。	修了生のネットワークモデルを在学生に伝える合宿を開催。学年ごとの情報交換会を定期開催。	29年度

外部評価委員会(産学5名の委員)

課題	改善	
大学側だけでなく、学生、産業界の視点でも評価を行い改善すべき。	履修者、コンソーシアム会員への質問紙調査を実施。デザインイノベータインデックスの開発。	27年度
学生の経済的負担を軽減する方策を検討すべき。	学振研究員応募を前提に、研究活動経費を3年次以上の履修者に支給。	27年度
補助金終了後も、カリキュラムの骨格と、産学官協力体制を維持すべき。	主要な講義が継続するようカリキュラムを改訂。コンソーシアム総会において協力体制の継続を決定。	29年度

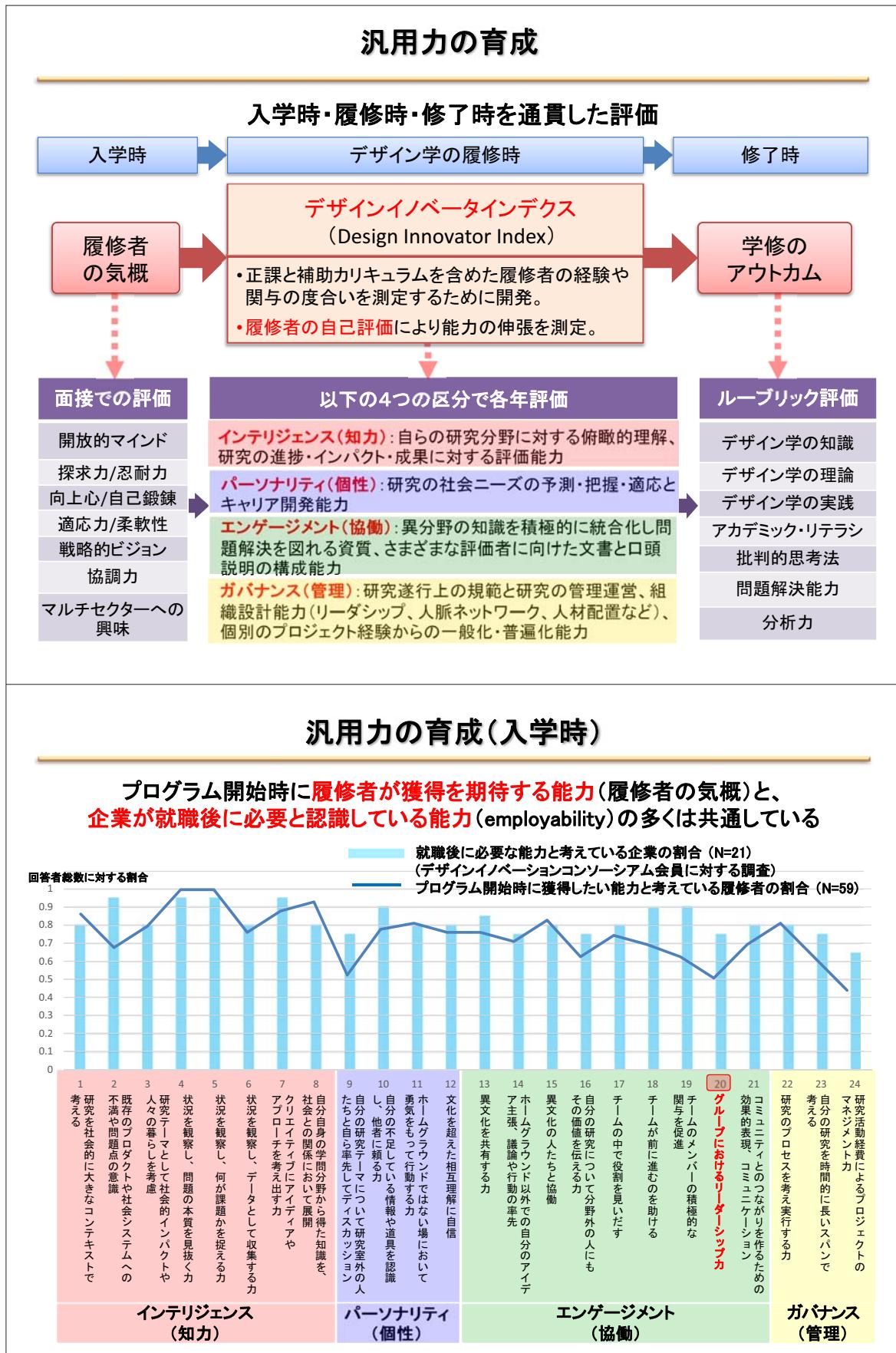


評価項目2

修了者の成長とキャリアパスの構築

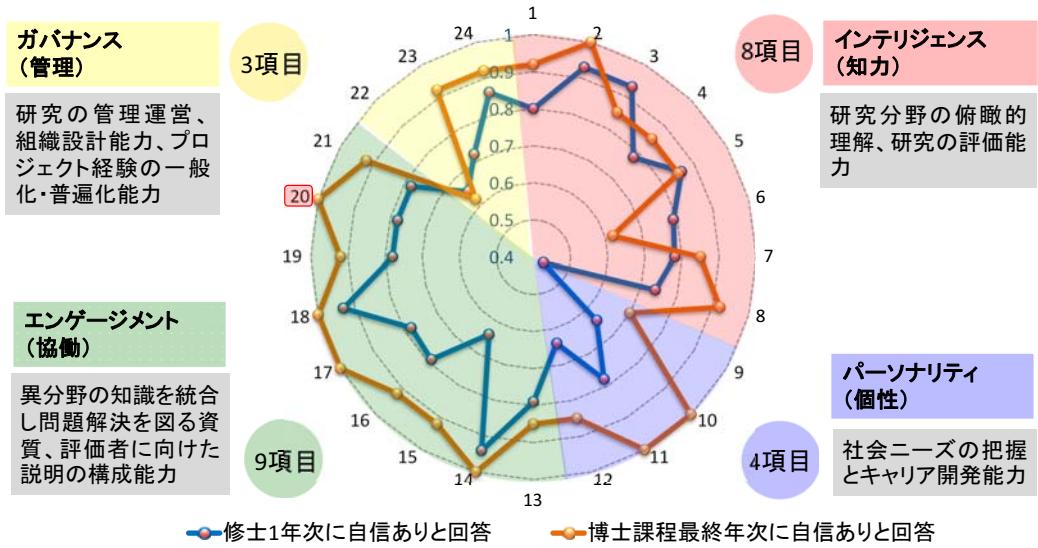
【評価の観点】

- 修了者がプログラムを通じ、俯瞰力や独創力等の汎用力を向上することができ、プログラムを履修したことに満足しているか(汎用力の育成)
- 修了者がプログラムを通じ、分野や立場を超えた多様な人的ネットワークを構築することができたか(ネットワークの構築)
- 修了者が、産学官民等の各界のリーダーとしてグローバルに活躍するキャリアパスにつながる就職や起業等の実績を上げているか(就職、キャリアパスの実績)
- 修了者の社会での活躍状況を長期にわたり把握する仕組みが構築されたか(把握手法の構築)



汎用力の育成(デザイン学の履修時)

考案した**デザインイノベータインデックス**に基づく評価により、
学年進行に伴う確実な能力アップと、実業界の期待に応える学修成果を確認



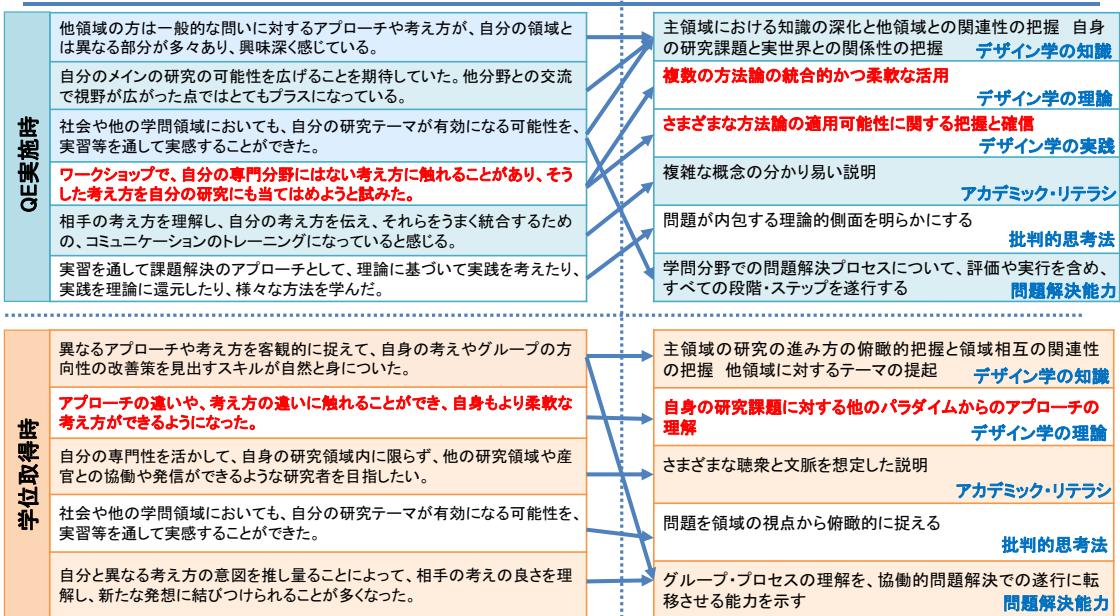
学年進行に従い、**エンゲージメントとパーソナリティ**に関して履修者の自己評価が上昇している。
最終年度では24項目中18項目が最も高い比率を示している。

汎用力の育成(修了時)

各修了生について、博士論文審査に加えループリック評価を実施
毎年の質問調査回答からループリック評価の基準を満たしていることを確認

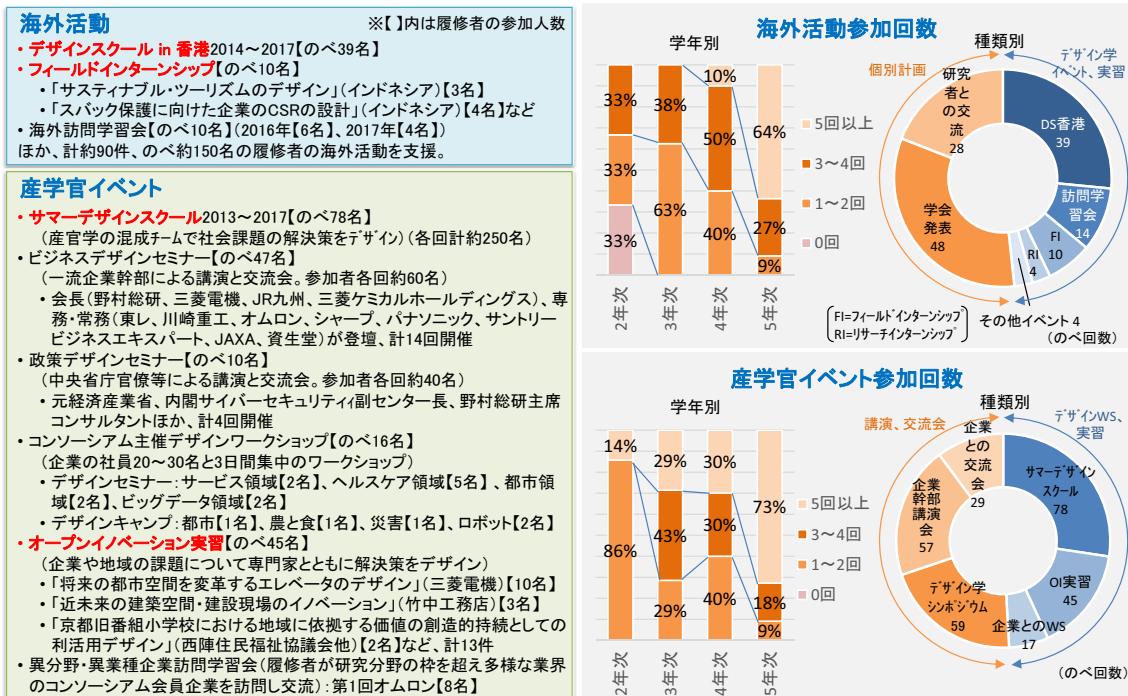
質問調査回答(自由記述)

ループリック評価の基準



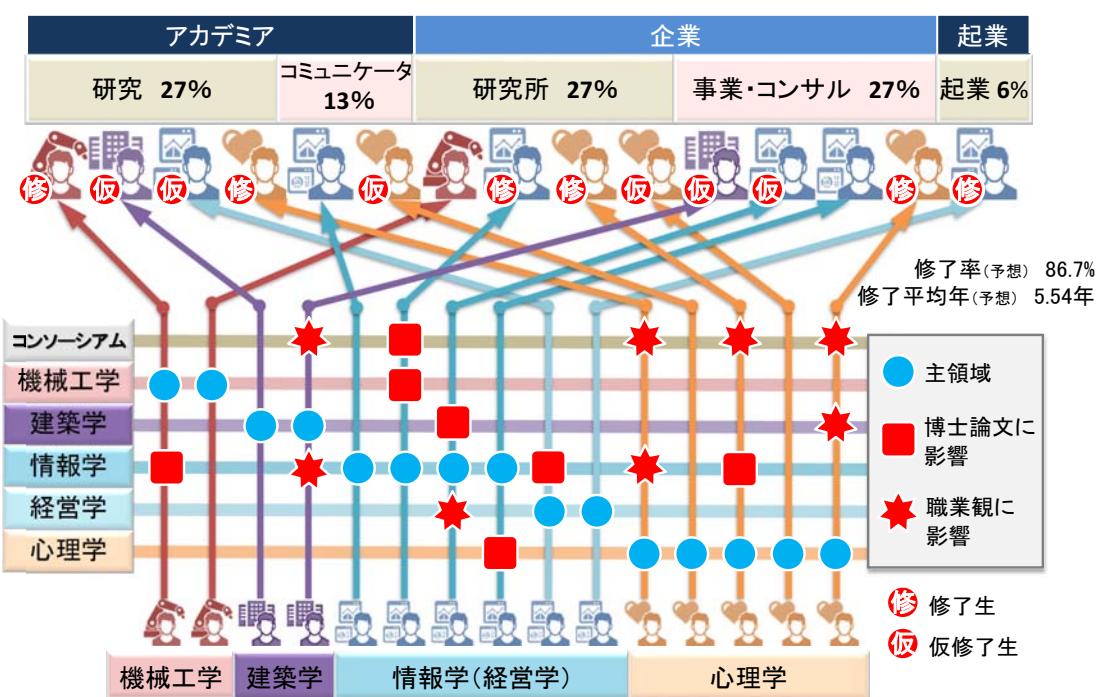
ネットワークの構築

履修者はプログラムが提供した多くの機会を活用してネットワークを構築



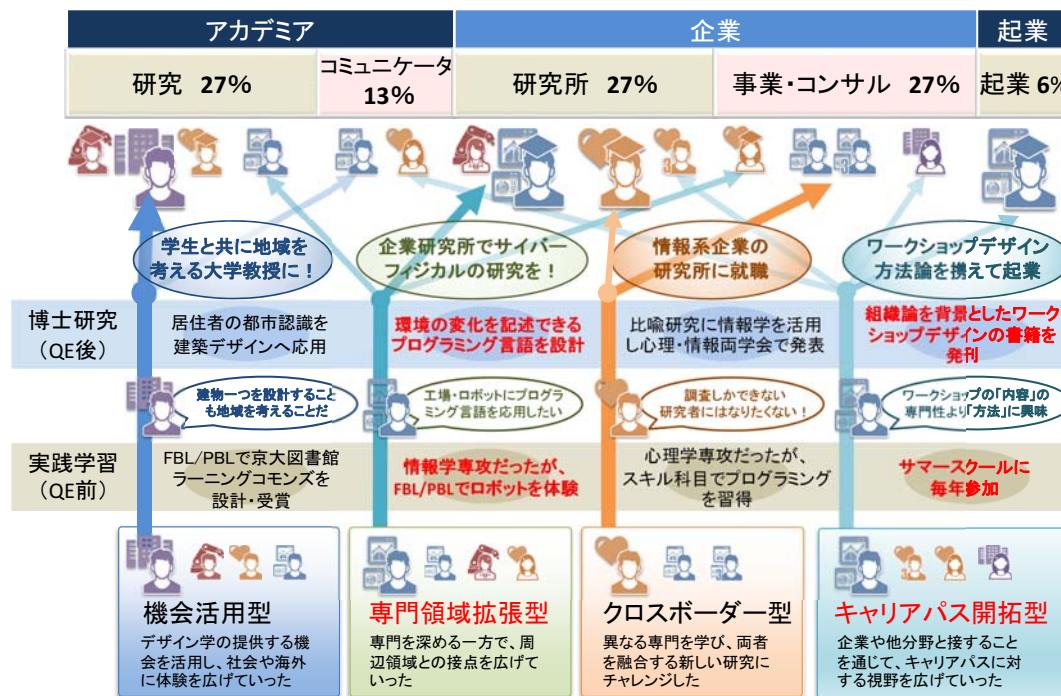
就職、キャリアパスの実績(就職状況)

異なる専門領域との交流が様々なキャリアパスを生み出した



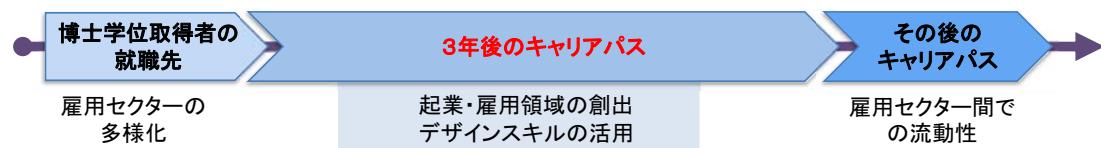
就職、キャリアパスの実績(活用パターン)

履修者のプログラム活用は4つのパターンに類型化できる



把握手法の構築

実社会との関わりの中で能力を発揮しているかを追跡調査



追跡調査の項目案(プログラム修了後3年経過時)

プログラム終了後の追跡調査項目	キャリアに関する質問項目	Transferable Skills(移転可能な汎用力)に関する質問項目
<ul style="list-style-type: none"> 外部機関との共同研究実績 学際チームでの参加実績 国外でのインターンシップ経験 社会貢献の実績 政策立案者との交流経験 エンドユーザーとの交流経験 学部生や院生への指導経験 研究プロジェクト申請経験の有無、など 	<ul style="list-style-type: none"> 博士取得に要した年月 ポスドク職への応募実績 現在の雇用状況と雇用形態 博士学位の分野と現在の専門分野、など 	<ul style="list-style-type: none"> 産業で必要とされる高度人材となり得ているか 雇用後の流動性(国、セクター、学術分野)に寄与しているか 異なる分野であっても、コミュニケーションに支障なく、意見を交換できているか 複雑で大規模なプロジェクト管理の能力を備えているか 学術分野、文化、セクターの境界を越えて仕事をしているか 一般の人々、政府、産業界と話す能力を用いているか、など
	プログラムに対する意識調査 <ul style="list-style-type: none"> プログラムの中で有意義と認める内容 プログラム履修生として特別に経験し得た内容 評価を受けるに際して有効と思われたプログラムでの内容、など 	

評価項目3

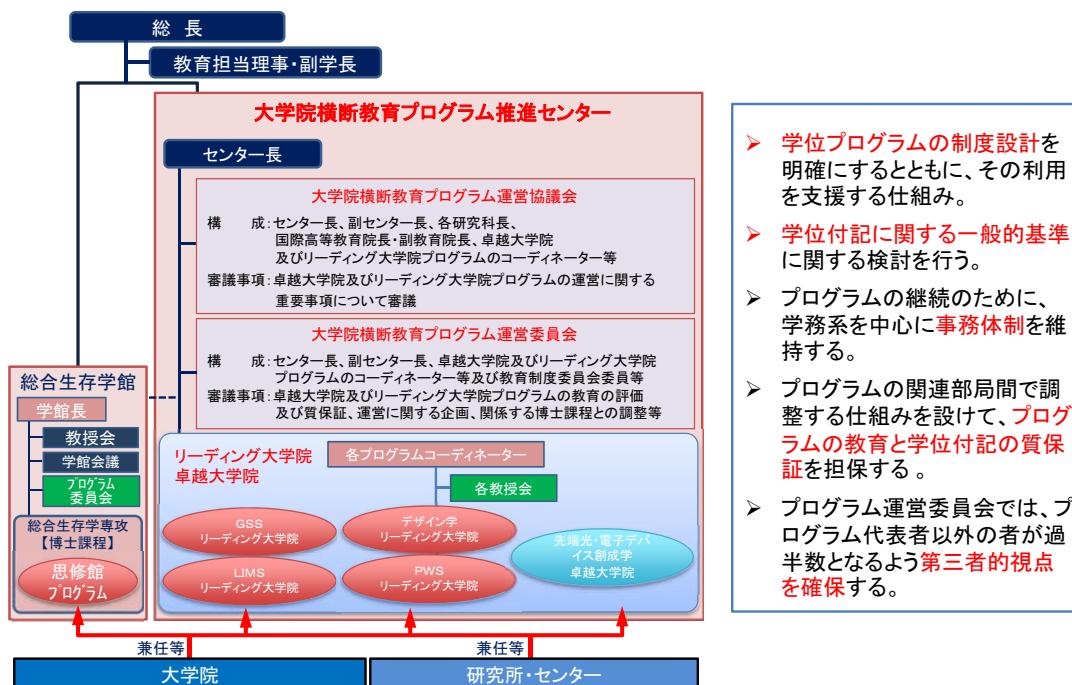
事業の定着・発展

【評価の観点】

- 支援期間終了後も学位プログラムの定着・発展に向けて、計画に沿った**教育研究組織の再編**、テニュア教員のポストの配置計画、**学位審査体制の整備**、学内の資金再分配計画やFD・SDの実施、教育実績の重視など教職員の評価基準の見直し等について具体的な取組が実施され、十分継続できるか。また、それに加えて、学生が学修研究に専念できる**経済的支援の定着**や新しい専攻や研究科の創設など計画を上回る教育研究組織の再編等に意欲的に取り組んだか。(定着・発展のための取組状況)
- 产学官民等の各界の連携先機関との間で、支援期間終了後の連携の在り方等について方針が定められたか(外部連携の継続性)
- 全体責任者(学長)を中心とした責任あるマネジメント体制が構築され、全体責任者(学長)のリーダーシップの下に採択プログラムに参画していない研究科や専攻への学位プログラムの導入など大学院全体として教育改革が進められたか(マネジメント、波及効果)

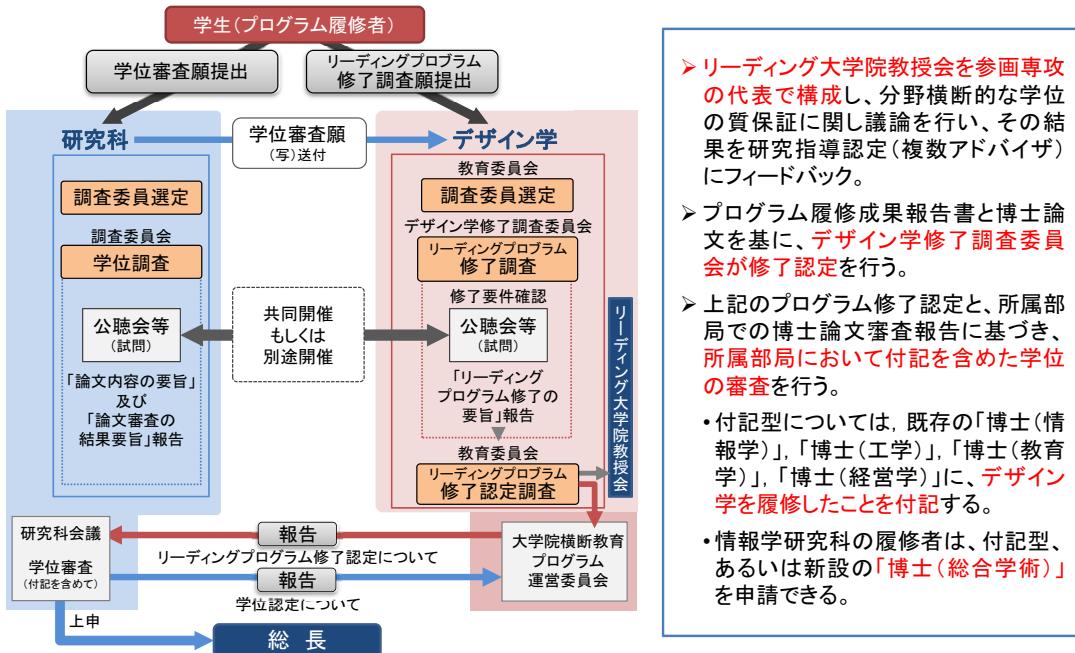
定着・発展のための取組状況(教育研究組織の再編)

大学院横断教育プログラム推進センターによる継続性の確保



定着・発展のための取組状況(学位審査体制の整備)

研究科とリーディング大学院の協働による分野横断型学位の質保証



外部連携の継続性

デザインイノベーションコンソーシアムと連携し、産学官での人材育成を継続



付録6 事後評価結果

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機関名	京都大学	整理番号	K02
プログラム名称	デザイン学大学院連携プログラム		
プログラム責任者	北野 正雄	プログラムコーディネーター	石田 亨

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、異分野の専門家と協働し社会システムやアキテクチャをデザインできる博士人材を養成する学位プログラムが構築されたことは評価できる。具体的には、学内の異領域の教員に加え企業や海外研究者による指導体制が確立され、また、情報学研究科においては「博士（総合学術）」の学位、全てのプログラム参画研究科において学位記に「デザイン学大学院連携プログラム修了」を付記する付記型の学位を新設し、大学全体で学位の質保証に取り組んでいる。デザイン学という分野を横断する学問領域を意欲的に立ち上げ、参画研究科におけるデザイン学関連科目の創設、教科書の作成の取組等は優れたものと評価できる。デザイン学の体系化に向けた今後の発展が期待される。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、異なる専門領域や産業界との交流により視野の広がりと視点の高まりが見られ、多彩でバランスの良いキャリアパスが生み出されていることは評価できる。履修生個人の質保証に関する指標（ループリック指標）とプログラム全体の質保証に関する指標（デザインイノベーションデックス）による評価が実施され、学生の成長が確認できる。特に、エンゲージメント及びパーソナリティの能力に関して学生の自信が芽生えており、博士課程教育リーディングプログラムの趣旨を体現できていると評価できる。修了者の社会での活躍状況を長期にわたり追跡調査する仕組みが検討されており、修了者がグローバルリーダーとして成長していく姿が浮き彫りにされることが期待される。

事業の定着・発展については、「大学院横断教育プログラム推進センター」が新設され、本プログラムを、新センター内に「デザイン学リーディング大学院」と位置付け、プログラムの精神を引き継いだ教育が計画されていることは評価できる。大学の第3期中期目標・中期計画の中に、プログラムの趣旨を踏まえた人材育成目標と措置が明記されており、大学の展開計画における重要課題として取組む姿勢がみられる。全学及び参画研究科、さらに産業界が主導するデザインイノベーションコンソーシアムによる人的・経済的支援により、产学研官での人材育成が継続される見通しであり更なる発展が期待される。

付録7 問題発見／解決型学習（FBL/PBL）成果ポスター

2018年度前期FBL/PBL

MaaS(Mobility as a service)時代のためのデータベース構築と分析 京都観光におけるspontaneousな移動式コミュニティのデザイン

経営管理大学院 林 ジュンタク [実施責任者] 情報学研究科数理工学専攻 特定准教授 佐藤 彰洋 [実施協力者] 株式会社Andeco 代表取締役 早川 康朗、鈴木 健之
工学研究科 奥 拓郎 情報学研究科 高比良 健太郎 デザイン学リーディング大学院 特定教授 川上 浩司 株式会社Vフォース 代表取締役 佐藤 光一、阿良田 遼
情報学研究科 李 慧勇
情報学研究科 河盛 亮介

1. モビリティの分類

来るべきMaaS時代に、「どこに行くのか？何をしに行くのか？」という「行き先や行動の目的」がより重要となってくる。そのためには、デジタル化された目的地情報がMaaSと連携し、ユーザーニーズや、サービスと組合せてユーザーへ届ける仕組みまで、トータルデザインされる必要がある。

MaaS時代に合わせてフィールド調査とデータ分析を併用することにより探索的に調査し、要求および設計仕様の特定を行った。

交通の分類			
方法	料金	自由度	コスト
公共交通	乗車料金	高	高
自転車	賃料	中	高
バス	料金	中	低
タクシー	料金	中	中
レンタカー	料金	高	中
シェアサイクル	料金	高	中
航空機	料金	中	最高
自転車	賃料	中	中
自転車	料金	中	中
自家用車	料金	中	中

5. サービスモデル

自由な入り
Kyoto Community Vehicle
自由な入り

- 京都で移動しながら自由に乗り降りしてしまった人たちで作るコミュニティ。
- 地元の人によるテーマ提供。
- 地元の人および観光客間の情報交換。

2. フィールド調査

日時：6月22日 10:30～16:15
場所：京都府京都市
目的：京都市内で考えられるMaaSサービスのUXについてカスタマージャーニーマップ、サービスモデルと参与観察法にもとづくフィールド情報の抽出

6. サービスプロセス

Before: Webアプリ
Moving: カフェバイクコミュニティ
After: 目的地

○ 観光客 △ 地元の人 ◇ 出店者

3. フィールド調査の様子

7. カスタマージャーニーマップ

Doing	Thinking	Feeling	Problem
<ul style="list-style-type: none"> 河原町から南禅寺への移動手段を探す カフェバイクを見かける 	<ul style="list-style-type: none"> バスはやっぱり走るで 時間はある 他の観光客はどこを観光するんだろう 	<ul style="list-style-type: none"> またなー やっぱ面白そう 	<ul style="list-style-type: none"> 見慣れないものに乗るのは抵抗感
<ul style="list-style-type: none"> 河原町から南禅寺への移動手段を探す 古都らしい風景の写真を撮影 同乗者と会話 	<ul style="list-style-type: none"> 明日は京都大学に観光行こうかな 帰りはバスかな 	<ul style="list-style-type: none"> 少し疲れた。 Blue bottleのコーヒー美味しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・Instagramでいいねもえで嬉しい ・疲労 ・帰りはバスでないといけない
<ul style="list-style-type: none"> カフェバイク車、渡ぐ 出店者の飲み物を飲む 	<ul style="list-style-type: none"> どれくらい到着するんだろう 明日京都大学観光に行こう 自分でも京都観光に行こう 	<ul style="list-style-type: none"> 風景が綺麗 Blue bottle京都にはあるんだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・明日は京都大学に観光行こうかな ・帰りはバスかな
<ul style="list-style-type: none"> 同乗者の話から、新しい観光地を知る 	<ul style="list-style-type: none"> 自分でも京都観光に行こう 	<ul style="list-style-type: none"> Blue bottleのコーヒー美味しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・少し疲れた。 ・Instagramでいいねもえで嬉しい
<ul style="list-style-type: none"> 出店者の飲み物を飲む 	<ul style="list-style-type: none"> Blue bottle京都にはあるんだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・少し疲れた。 ・Instagramでいいねもえで嬉しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・疲労 ・帰りはバスでないといけない

4. フィールド調査～気づきのまとめ～

- 情報共有の問題
 - QRコードが見つけにくい場所に
 - 蹴上インクラインはオフシーズン、ホームページも日本語のみ
- 小さな観光スポットの存在
 - 錦市場は混雑、一本道を外れると閑散
 - 道を歩いて見てこそみつかる小さいお店
 - 観光エリアの偏在性
- 観光のための交通手段の問題
 - バスが分かりにくい・混雑・本数
 - 観光に使える手段が少ない

目標 GOAL
滞在中の観光情報の入手経路への課題発見／課題解決のためのサービス提案

8. ステークホルダー

内部
従業員
マネジャー (財務、マーケティング、広報、HRなど)
CEO
外部
業者 (食材、飲食など)
自治体・政府
地元の人
顧客
投資家

— 111 —

京都大学デザイン学大学院連携プログラム

2018年度前期FBL/PBL

「法則」と「感性」に基づくデザインプロセス

[実施責任者]

京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻 教授
京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻 教授
京都大学大学院工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
京都大学デザイン学リーディング大学院 特定講師

[履修生]

経営管理大学院 M2
情報学研究科社会情報学専攻 M2
経営管理大学院 M1

小島玄久
奥野僚介
真島美帆子



2. 社会的影響へのトリガー

浮き花動画をインスタグラムにアップしよう！



4. 浮き花の特徴と使い方

- ✿ 不規則に動くものはずっと見ていられる。
- ✿ 空間と調和する。⇒インテリアとして活用
- ✿ 動画に映える。⇒インスタグラムにアップ
- ✿ 花を組み合わせることで様々な動きを見せる。
- ✿ 花を筒に入れると、すぐにどんな飛び方をするかわかる。
- ✿ 誰でもできる。⇒アクティビティとしてみんなで楽しめる

1. プロトタイプ



3. 「IKEBANA」から「UKIBANA」へ

生け花	浮き花
格式高い	ハードルが低い
型をつくる	予想ができない動きをする
花を長持させようとする	デジタルに保存できる
動かない	動く
剣山に活ける	宙に舞う
横に広がるデザインが可能	縦長でシンプルなデザイン

→既存のものからのソフトランディング

5. 浮き花が文化になるまで



インスタグラマーが浮き花動画を投稿。浮き花動画の流行

風を出すアクリルの筒
「風器」がセレクトショップに並ぶ

浮き花を囲んでのお茶会、浮き花ワークショップ等が流行
UKIBANA しながら KOIBANA

インテリアとして流行、老若男女問わず身近なものに



浮き花は新しいインテリアであり、アートであり、文化です。
表現し、鑑賞し、発信してください。
定石、流派、タブー、難しいことは何もありません。
ただ浮かべ、浮かべたあなたの自身も予想できないその動きを楽しんでください。
音楽と共に楽しんだり、光を当てて見てみるのも面白いかもしれません。
いいものができたら発信・共有してください。きっとあなたの作品は誰かを惹きつけるでしょう。

2018年度 前期 FBL/PBL オフィスビルの快適空間設計のための 映像を使ったLEDアートイノベーション

<受講者> 廖 博健（リョウ ハクケン）（情報学研究科・社会情報学専攻）、清水 桜子（工学研究科機械理工学専攻）、Liu Shengyu（情報学研究科）、徳海 史夏（工学研究科建築学専攻）
<実施責任者> 富田 直秀（工学研究科）、土佐 尚子（総合生存学館）、十河 卓司（デザイン学リーディング大学院）
<実施協力者> 島津製作所、三菱電機株式会社、中津 良平（デザイン学リーディング大学院）、奥野 修平（総合生存学館）、Pang Yunian（総合生存学館）

● テーマの背景

現在のオフィスのLED照明のブルーライトはサーカディアンリズムを乱すなど、オフィスビル空間のLED照明の快適性が求められている。人間にとって快適とは何か、日本古来の美の一つである陰翳礼讃を背景に、オフィスビル環境の快適空間を実現するためのライティング・評価技術に関する研究を行なった。

● 空間照明のデザイン

エレベーター空間照明

エレベーターは狭く、さらに密閉された空間なので、天窓のような映像を天井に映した。天井の照明だけでは照度が足りないため、光の筒を光の壁として使う（図1～図4）。



図1、図2 エレベーター空間照明のデザイン



図3、図4 エレベーター照明の実験環境



● 実習の概要

FBL/PBLにおいて基軸は、芸術家が感じ、また表現する「現実」を、いかに「事実」として捉え、自身の分野に生かしていくかが、重要である。この実習は、映像の中の揺らぎなどの日本美を発見し、人の感性に影響を与える照明空間のパラメーター解析やその最適化、それを実現する照明器具の配光制御や配置などの照明環境構築技術を開発する。

オフィス空間照明

アート映像を活かす光源として、LEDディスプレイを用いた。目に優しく心地よい作業空間とするため、フィルタとして様々な材料を検討し紙と採用した（図5、図6）。



図5、図6 オフィス空間照明のデザイン



● 快適空間の計測方法

使用機器1 唾液アミラーゼモニター

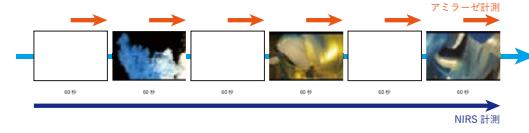


図7 唾液アミラーゼモニターと計測チップ（NIPRO）

空間の快適さを測る生理的指標として、ストレス反応に着目した。ストレス負荷がかかると、唾液中のアミラーゼが増加するとされる。唾液アミラーゼモニターでは、チップに採取した唾液からアミラーゼ値を計測する（図7）。

実験プロックデザイン（エレベーター空間とオフィス環境で共通）

白色光による照明とアート映像を用いた照明の2種類を60秒ごとに切り替え、それを3セット計6分間行う（図9）。終了後、感想を聞く。



使用機器2 fNIRS(functional Near-infrared Spectroscopy)



図8 fNIRS（島津製作所）の装着例

設計空間におかれた人の脳活動を観察するため、fNIRSを用いた。fNIRSは、頭皮上から近赤外光を照射し、大脳皮質の血液中のヘモグロビン変化を計測する。今回は思考や判断を司るされる前頭部を対象に測定を行った（図8）。

被験者：エレベーター空間・オフィス環境ともに大学生9名（男性4名、女性5名）

実験方法

<アミラーゼストレステスト>

設計したエレベーター空間のなかに立ち、各プロックの後半30秒の間、チップを口に含み唾液を採取する。

<fNIRS脳血流計測>

椅子に座り計測装置を前頭部に装着し、調整のちディスプレイに向かい安静にする。

<fNIRS脳血流測定実験によるオフィス照明の評価>

・脳血流変化の様子は個人差や同一実験でのチャンネル間の差が大きかった。

・アート映像照明に肯定的な意見を表明した2人を含む3人の被験者において、白色照明の60秒間の後半で賦活した部分が、アート映像照明に切り替わった後に沈静化する傾向がみられた（図10、図11）。逆に、アート映像照明のときのほうが賦活の大きい傾向のある被験者も存在した。

・脳の部分別でみると、6人の被験者で額中央部分よりも側面寄りで変動が激しくなる傾向があった。1回の実験を通して、4人の被験者の額の中央よりや左側で血流変化量が上がるマップが見られた。

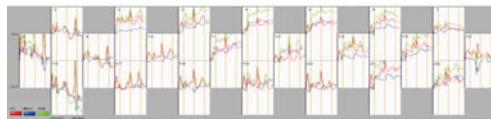


図10 各チャンネルの6分間にわたる時系列データの例

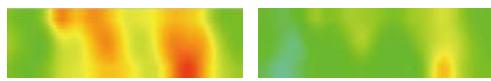


図11(a)(b) 特定の時間における血流変化量のマッピング

● 実験結果と考察

<アミラーゼ測定実験によるエレベーター照明の評価>

- ・白い照明と映像1による照明を比較すると、9名中5名の被験者のアミラーゼ値が減少した。映像照明によってストレスが減少したと考えられる。しかし、3名はアミラーゼ値が増加し、そのうち1名は3倍以上に増加した。
- ・白い照明と映像2による照明を比較すると、9名中6名にアミラーゼ値の減少が見られた。2名は増加し、そのうち1名は2倍以上に増加した。
- ・白い照明と映像3による照明を比較すると、9名中6名がアミラーゼ値の増加が見られた。しかし映像内容は2と3で大きく違わないため、映像によるストレス増加とは考えにくい。映像3は実験の最後であったので疲労が原因でアミラーゼ値が増加したと考えられる（表1）。

表1 エレベーター照明におけるアミラーゼ値の変化

● まとめ

- ・アート映像を用いて照明空間を設計した。
- ・エレベーター空間におけるアミラーゼストレステストでは、白色照明時から映像への遷移に伴って生理的ストレス負荷が変化したかどうか検討した。
- ・オフィス空間におけるfNIRS脳血流計測では、実験環境におかれた被験者が思考や判断を活性化あるいは沈静化する様子を観測した。
- ・被験者実験では、被験者の関心や状態、映像の好みによって個人差があるものの、静的な白色照明との比較において揺らぎをもつアート照明空間がもたらす効果を生理的に評価できる可能性がある。

付録8 イベントポスター

DESIGN SCHOOL CALENDAR

2018-2019 京都大学デザイン学大学院連携プログラム 年間スケジュール

2018

キックオフ合宿

4月に新しく予科に入った学生を中心に、デザインスクール履修者と教員が一堂に会し、交流を深める1泊2日のイベントです。参加者の自己紹介に始まり、将来の夢や今考えていることをリラックスした雰囲気の中で語り合います。合宿先周辺の散策やミニワークショップなども行います。

6月 16日(土) - 17日(日)

履修者(予科)選抜

- 授業開講 4月 9日(月)
- 募集説明会 4月 9日(月)
- 履修者(予科)募集 4月 9日(月) - 23日(月)
- 履修者(予科)合格発表 5月中旬
- 履修者(予科)向けガイダンス 5月中旬

博士論文 研究基礎力審査(QE)

4月下旬

デザインスクール in アジア

京大・香港パブティスト大・台湾国立成功大 合同デザインスクール

京都、香港のアジア二都市で香港パブティスト大学および台湾国立成功大学の学生と英語でデザインワークショップを行います。海外を訪れて初めて現地の状況と背景を理解するという条件のもと、問題発見・解決にチャレンジします。

京都ラウンド 4月 6日(金) - 4月 8日(日)
香港ラウンド 5月 25日(金) - 5月 28日(月)

サマーデザインスクール

今年度で8回目となる3日間集中のデザインワークショップ。学生、教員と、多様な専門性を持つ実務家がグループに分かれ、それぞれのアプローチから課題に挑みます。年齢や立場を超えて討論し、発展する自由なスタイルが特徴です。

at KRP
9月 12日(木) - 14日(土)

履修者(本科)選抜

- 履修者(本科)選抜・面接 8月末~9月初旬
- 履修者(本科)発表 9月下旬

履修者(予科)選抜(10月入学)

- 授業開講 10月 1日(月)
- 募集説明会 10月上旬
- 履修者(予科)募集 10月下旬
- 合格者発表・ガイダンス 11月中旬

博士論文 研究基礎力審査(QE)

10月下旬

デザインスクール in 沖縄

京大・琉大合同デザインスクール

沖縄にて、琉球大学生とグループワークを行います。京都とは異なる文化を持つ沖縄の地で、多元の人々とともに沖縄独自の問題発見と解決に取り組みます。

後期開催予定

デザインフォーラム

・ビジネスデザインシリーズ
・政策デザインシリーズ

デザインイノベーションコンソーシアムと共同で主催するフォーラム。産業界の第一線で活動する企業幹部や政策立案する省庁の方々に、その実績、教訓、背景などについて講演いただきます。

月1回程度開催

デザインビジョンズ

国内外のデザイン研究者や実践者をスピーカーとして招き、学生自らの学習や研究、デザイン実践などのビジョンを広げる場を提供します。

月1回程度開催

プロフェッショナル・デザインキャンプ

デザインイノベーションコンソーシアム主催

企業ニーズを踏まえたテーマ設定のもと、産学や分野、業界を横断してプラットフォームで対話する、3日間のイノベーションワーク。コンソーシアム会員企業の社会人とともに取り組みます。

年1回程度開催

デザインセミナー

デザイン教員による、デザイン対象領域の理論や手法の講義と、それらを実践するワークショップを組み合わせた3日間集中のセミナー。コンソーシアム会員企業の社会人とともに取り組みます。

年2回程度開催

スプリングデザインスクール

3月中旬

国際デザインシンポジウム

3月中旬

2019

DESIGN SCHOOL KYOTO UNIVERSITY

Collaborative Graduate Program in Design

www.design.kyoto-u.ac.jp

2018

D4S

Joint Workshop on Design for Sustainability

Hong Kong

Kyoto

Tainan

DESIGN FOR SOCIAL
INNOVATION
TRANSFER >>



→ **Kyoto University** → **Hong Kong Baptist University**
Apr 5 - 8 May 25 - 27



香港浸會大學
HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY



京都大學
KYOTO UNIVERSITY



國立成功大學
National Cheng Kung University

✉ comp@comp.hkbu.edu.hk

☎ +852 3411 2385

🌐 <http://www.comp.hkbu.edu.hk/designworkshop>



「京都大学サマーデザインスクール」は、
3日間集中のデザインワークショップです。
このスクールでの「デザイン」とは、意匠
デザインばかりでなく、社会システムや
アーキテクチャのデザインも含みます。
大学の枠を越えて産業界や自治体からも
テーマを募り、様々な分野の参加者がテーマ
ごとに分かれ、社会の実問題に真剣に挑み
ます。

京都大学サマーデザインスクール 2018 で、
今年の夏を締めくくりましょう！



参 加 費

学生（主催・共催団体の大学）	1,000円
学生（上記以外）	3,000円
一般（主催・共催団体の大学*、会員組織）	3,000円
一般（上記以外）	10,000円

*京都大学、京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学



申 し 込 み

お申し込みはHPから
(先着順、7月中旬受付開始) *主・共催大学の学生優先
[サマーデザインスクール 2018] 検索
www.design.kyoto-u.ac.jp/sds2018/



主催 京都大学 デザイン学大学院連携プログラム / 京都大学大学院 情報学研究科 / 京都大学 経営管理大学院 / デザインイノベーションコンソーシアム
共催 京都大学大学院 工学研究科 / 京都大学大学院 教育学研究科 / 京都大学 学術情報メディアセンター / 京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科 / 京都工芸繊維大学
工芸科学研究科

Spring Design School 2019

International Design Symposium in Kyoto 2019

MARCH 19, 2019

CLOCK TOWER CENTENNIAL HALL, KYOTO UNIVERSITY

The Past, Present and Future of Kyoto University Design School

デザイン学プログラムの経緯と展開

13:00-14:05 Part 1

デザイン学プログラムの経緯と現状

Cooperative Graduate Program in Design: The Status Quo

(Toru Ishida, Professor, Program Coordinator)

デザイン学プログラムの展開と展望

The Future and Visions of the Cooperative Graduate Program in Design

(Tetsuo Sawaragi, Program Planning Director)

デザイン学リサーチショーケース

Design Research Showcase

(Students in the Kyoto University Design School)

14:05-14:15 Short Break

14:15-15:25 Part 2



Bringing Human-Centered Design to Life in Industry

(Daniel Fallman, Expert Principal, Innovation, Bain & Company)

15:25-15:45 Coffee Break

15:45-16:55 Part 3



アートを遊び、アートで学ぶ：アート体験の導入による学習の深化

Engagement with Art and Learning through Art

(Takeshi Okada, Professor, Department of Education, University of Tokyo)

16:55-17:00 Part 4

Conclusion

(17:00-18:30 デザイン学学生研究交流会（ポスターセッション）

Related event: Session on Students' Individual Research)

18:30-20:00 Banquet



Organized by

Collaborative Graduate Program in Design, Kyoto University
Design Innovation Consortium



<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/idskyoto-2019/>

執筆担当

石田 亨 プログラムコーディネータ／京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授
榎木 哲夫 京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授
神吉 紀世子 京都大学工学研究科建築学専攻 教授
楠見 孝 京都大学教育学研究科 教授
中小路久美代 京都大学大学院横断教育プログラム推進センター－デザイン学リーディング大学院
特定教授
川上 浩司 京都大学大学院横断教育プログラム推進センター－デザイン学リーディング大学院
特定教授
十河 卓司 京都大学大学院横断教育プログラム推進センター－デザイン学リーディング大学院
特任准教授
北 雄介 京都大学大学院横断教育プログラム推進センター－デザイン学リーディング大学院
特定講師
村上 陽平 京都大学工学研究科 非常勤講師／京都大学情報学研究科 非常勤講師／
立命館大学情報理工学部 准教授
井上 武男 京都大学大学院横断教育プログラム推進センター－デザイン学リーディング大学院
特定職員

編集担当

久保田 庸子 京都大学大学院横断教育プログラム推進センター－デザイン学リーディング大学院
特定職員

博士課程教育リーディングプログラム
京都大学デザイン学大学院連携プログラム
活動報告書（平成 30 年度）

発行日 平成 31 年 3 月

発行者 京都大学デザイン学大学院連携プログラム
contact@design.kyoto-u.ac.jp
<http://www.design.kyoto-u.ac.jp>

